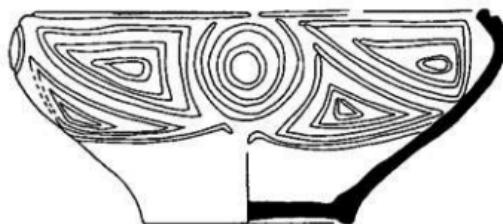


# 松ノ木遺跡 I

(高知県長岡郡本山町)



1992.3

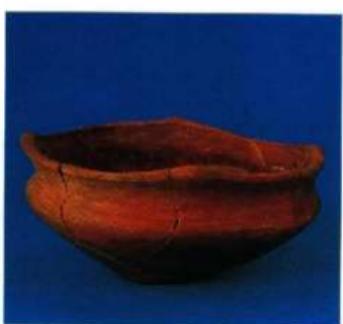
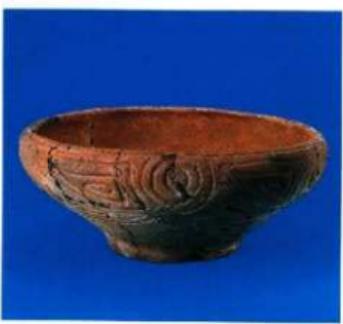
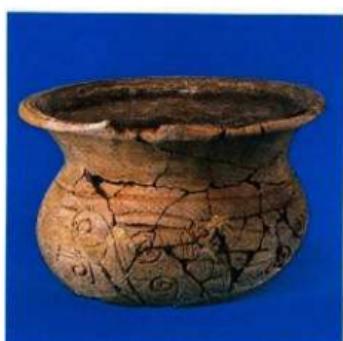
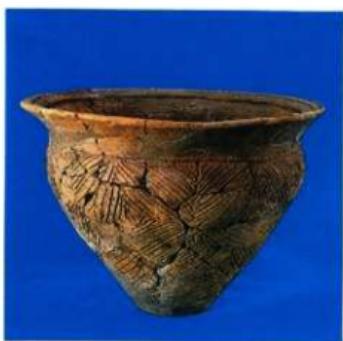
本山町教育委員会

# 松ノ木遺跡 I

本山町埋蔵文化財調査報告書第3集

1992. 3

本山町教育委員会



67 | 63  
244 | 312

## 序

本山町は、西日本でおそらく初めてであろうといわれた長徳寺跡の多宝塔の根石群が発見されるなど想像以上の寺院があったことが証明されました。

また同じ場所から縄文・弥生時代の遺物が多数出土、この台地を中心に私たちの先祖が既に住んでいたことが確認されています。

松ノ木遺跡は、この台地より見下す一級河川吉野川と汎見川の合流地で発掘されたもので、西日本屈指の縄文遺跡として脚光を浴びています。

この調査は、農道開設中の工事残土から考古学ファンの竹田瑞男氏が発見したもので、町教委が主体となり、高知県教育委員会文化振興課出原恵三主幹をはじめ、埋蔵文化財に関心をもつ町内外有志の御協力により大きな成果をあげることができました。

緑と水、花と歴史の町をキャッチフレーズにする本町にとりましては、まさに歴史的意義の大きさを感じるところであります。

諸先生方をはじめ、この調査に御協力いただきました皆様に深く感謝申し上げますと共に、今後、この報告書が考古学上貴重な参考資料として活用され、埋蔵文化財に対する人々の認識が深まるよう念じます。

平成4年3月

高知県長岡郡本山町教育委員会

教育長 和田 型寛

## 例 言

- 1 本書は、第Ⅲ期山村振興農林漁業対策事業小規模土地改良（農道）事業の際に発見された松ノ木遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 松ノ木遺跡は、高知県長岡郡本山村守家字落合、松ノ木にある。
- 3 調査面積は60m<sup>2</sup>であり、調査期間は平成2年3月29日～4月14日である。
- 4 発掘調査は、本山村教育委員会の依頼により高知県教育委員会が行った。調査体制は下記のとおりである。

調査員 前山 光雄（高知県教育委員会）

出原 恵三（ ）

庶務担当 岡村勝一郎（本山村教育委員会・本山村中央公民館館長）

松葉 孝史（本山村教育委員会）

- 5 本書の執筆・編集は、前田と出原が協議しながら出原が行った。
- 6 当遺跡出土資料は、本山村教育委員会が保管している。また遺跡の略号は90-MMである。
- 7 遺物整理・図面作製等の作業においては、武古真裕・浜田雅代・欠野 雅・川村恵矢・松木富子・大原喜子・吉本暎子・山中美代子・竹村延子氏の協力を得た。
- 8 発掘調査及び報告書作製にあたっては、下記の方々から指導・貴重なご助言を頂いた。記して深く感謝の意を表したい。

犬養徹夫（宇和島市立天神小学校）・岡本健児（高知県文化財保護審議会会長）・岡内三眞（徳島大学）・木村剛朗（日本考古学协会会员）・高橋 謙（岡山県立博物館）・千葉豊（京都大学埋文センター）・丹羽佑一（香川大学）・松田美津子（高知市立大津小学校）・満塙大洗（高知大学）・宮本一夫（愛媛大学）

- 9 発掘作業においては、地元守家地区をはじめ下記の方々の献身的な協力を得た。記して深く謝意を表したい。

秋山 清穂 竹田 瑞男 平石 元重

大原 喜子 山中美代子

## 報告書要約

1. 遺跡名 松ノ木遺跡 遺跡番号 250042 遺跡地図No. 9-9
2. 所在地 高知県長岡郡本山町寺家松ノ木・落合
3. 立地 吉野川左岸の低位段丘 標高248m
4. 種類 縄文時代
5. 調査主体 本山町教育委員会
6. 調査契機 道農改修
7. 調査期間 平成2年(1990年3月29日~4月14日)
8. 調査面積 60m<sup>2</sup>
9. 出土遺物 縄文前期・後期土器、縄文後期石器
10. 内容要約 南四国における成立期の縁帯文土器が大量に出土。有文深鉢・浅鉢などのバリエーションが豊富で当該期の器種組成を明らかにするうえで貴重な資料である。これまで南四国では当該期のまとまった資料がなく編年上の空白期であったが、当遺跡出土資料を松ノ木式土器として型式設定を行い、宿毛式と縁帯文土器をつなぐ土器として編年的位置付けを行った。これらの土器と共に打製石包丁も出土しており当時の生業を明らかにするうえでも興味深い。

## 本文目次

第Ⅰ章 椰査に至る経過 .....	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境 .....	3
第Ⅲ章 発掘調査の方法 .....	5
第Ⅳ章 発掘調査の成果 .....	6
1 調査区の概要及び略序 .....	6
2 遺物の出土状況 .....	8
第V章 出土遺物 .....	14
1 縄文前期土器 .....	14
2 縄文後期土器 .....	15
(1) 有文深鉢 .....	15
(2) 有文深鉢頭・胴部 .....	20
(3) 粗製深鉢 .....	20
(4) 深鉢底部 .....	49
(5) 有文浅鉢 .....	49
(6) 無文浅鉢 .....	51
(7) 浅鉢底部 .....	52
(8) 注口土器 .....	52
(9) 双耳壺 .....	52
(10) 器種不明土器及びその他 .....	52
(11) 各型式と出土層位との関係 .....	52
3 石器 .....	63
(1) 打製石包丁 .....	64
(2) 石鏃 .....	64
(3) 磨製石斧 .....	64
(4) 叩き石 .....	66
(5) 砕石 .....	66
(6) 打ち欠き石錘 .....	66
(7) その他 .....	66
第VI章 考 察 .....	71
1 縄文後期土器 .....	71
2 石器 .....	80
第VII章 松ノ木式土器の提倡とその意義 .....	83

## 図版目次

第1図：松ノ木遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図：調査区周辺の地図	5
第3図：調査区位置図	6
第4図：セクション図	7
第5図：遺物出土状況平面図及びセクション位置図	11
第6図：遺物出土状況垂直分布図	12
第7図：溝状落ち込みの発掘状況	13
第8図：縄文前期土器	14
第9図：縄文後期土器 有文深鉢	21
第10図：縄文後期土器 有文深鉢	22
第11図：縄文後期土器 有文深鉢	23
第12図：縄文後期土器 有文深鉢	24
第13図：縄文後期土器 有文深鉢	25
第14図：縄文後期土器 有文深鉢	26
第15図：縄文後期土器 有文深鉢	27
第16図：縄文後期土器 有文深鉢	28
第17図：縄文後期土器 有文深鉢	29
第18図：縄文後期土器 有文深鉢	30
第19図：縄文後期土器 有文深鉢	31
第20図：縄文後期土器 有文深鉢・粗製深鉢	32
第21図：縄文後期土器 有文深鉢	33
第22図：縄文後期土器 有文深鉢	34
第23図：縄文後期土器 有文深鉢	35
第24図：縄文後期土器 有文深鉢	36
第25図：縄文後期土器 有文深鉢	37
第26図：縄文後期土器 有文深鉢（頸胴部）	38
第27図：縄文後期土器 有文深鉢（頸胴部）	39
第28図：縄文後期土器 有文深鉢（頸胴部）	40
第29図：縄文後期土器 粗製深鉢	41
第30図：縄文後期土器 粗製深鉢	42
第31図：縄文後期土器 粗製深鉢	43

第32図：縄文後期土器	粗製深鉢	44
第33図：縄文後期土器	粗製深鉢	45
第34図：縄文後期土器	粗製深鉢	46
第35図：縄文後期土器	粗製深鉢・深鉢底部	47
第36図：縄文後期土器	深鉢底部	48
第37図：縄文後期土器	有文浅鉢	53
第38図：縄文後期土器	有文浅鉢	54
第39図：縄文後期土器	有文浅鉢	55
第40図：縄文後期土器	有文浅鉢	56
第41図：縄文後期土器	有文浅鉢	57
第42図：縄文後期土器	無文浅鉢	58
第43図：縄文後期土器	無文浅鉢	59
第44図：縄文後期土器	無文浅鉢	60
第45図：縄文後期土器	無文浅鉢・浅鉢底部	61
第46図：縄文後期土器	注口土器・双耳壺・器種不明土器	62
第47図：石器		65
第48図：石器		66
第49図：石器		67
第50図：石器		68
第51図：石器		69
第52図：仕出原遺跡出土の後期土器		74
第53図：縁帶文土器の成立過程		76

## 表 目 次

表1 遺跡名一覧表 .....	2
表2 有文深鉢各型式層位別出土点数 .....	63
表3 粗製深鉢各型式層位別出土点数 .....	63
表4 有文浅鉢各型式層位別出土点数 .....	63
表5 無文浅鉢各型式層位別出土点数 .....	63
表6 石器 器種別出土点数 .....	64
表7 石器 石材別点数 .....	70
表8 後期土器の器種組成 .....	71
表9 有文深鉢型式分類 .....	72
表10 有文深鉢IV・V類の口縁部文様 .....	72
表11 有文深鉢胴部文様 .....	74
表12 粗製深鉢型式分類 .....	77
表13 土器底部の形態 .....	78
表14 有文浅鉢型式分類 .....	78
表15 無文浅鉢型式分類 .....	79
表16 遺跡別石器組成表 .....	80
図表1 石錐法量図表 .....	70

## 写真図版 目次

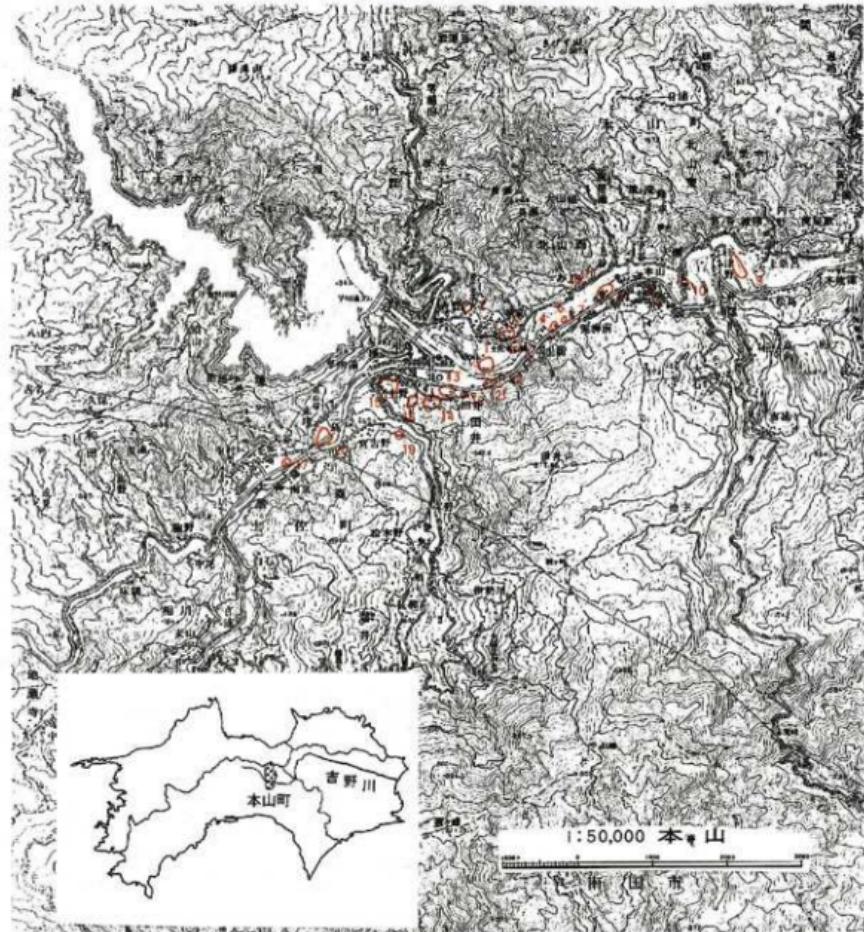
P L 1 : 遺跡全景・調査前の状況 .....	105
P L 2 : 調査前の状況・セクション断面 (A-B) .....	106
P L 3 : セクション断面・完掘状況 (西から) .....	107
P L 4 : 完掘状況 (東北から) ・セクションベルト付近遺物出土状況 .....	108
P L 5 : 遺物出土状況 .....	109
P L 6 : 遺物出土状況 .....	110
P L 7 : 遺物出土状況 .....	111
P L 8 : 遺物出土状況 .....	112
P L 9 : 遺物出土状況 .....	113
P L 10 : 有文深鉢 .....	114
P L 11 : 有文深鉢 .....	115
P L 12 : 有文深鉢・有文浅鉢 .....	116
P L 13 : 有文浅鉢・無文浅鉢 .....	117
P L 14 : 無文浅鉢 .....	118
P L 15 : 繩文前期土器 .....	119
P L 16 : 繩文後期 有文深鉢 .....	120
P L 17 : 繩文後期 有文深鉢 .....	121
P L 18 : 繩文後期 有文深鉢 .....	122
P L 19 : 繩文後期 有文浅鉢・双耳壺・注口土器・粗製深鉢 .....	123
P L 20 : 繩文後期 粗製深鉢・有文深鉢 .....	124
P L 21 : 繩文後期 有文浅鉢 .....	125
P L 22 : 繩文後期 有文浅鉢 .....	126
P L 23 : 繩文後期 無文浅鉢 .....	127
P L 24 : 繩文後期 底部 .....	128
P L 25 : 繩文後期 底部・石錐・石匙・石包丁・剥片石器 .....	129
P L 26 : 繩文後期 砧石・石錐・石斧 .....	130

## 第Ⅰ章 調査に至る経過

松ノ木遺跡は、本山町寺家地区で実施された第Ⅲ期山村振興農林漁業対策事業小規模土地改良（農道）事業の際、偶然発見されたものである。平成2年3月中旬、本山町寺家字落合・松ノ木の農道拡幅工事で汗見川方向に伸びる農道西端部の待避所部分の掘削廃土中に土器片が含まれているのを地元の竹田端男氏が発見し、本山町教育委員会に通報したことに始まる。

本山町教育委員会は、採集遺物を直ちに県教委に持ち込んだ。県教委ではこれらの遺物が、高知県中・東部では僅少な縄文時代後期の土器で、しかもこれまでに未確認の土器型式に属するものであるとの判断をした。そして比較的大きな破片が数多く含まれ、ローリングなどを受けていないことから、良好な遺物包含層あるいは遺構の存在していることが予想された。事態を重視した県教委は、3月23日現地に急行したところ、工事は掘削・地ならし作業を完了しアスファルト舗装直前の状況であった。この時にも道路西端部に設けられた待避所の緩斜面や道路脇に積まれた廃土中から大・小の土器片が見えかくれしていた。路面は黄褐色の音地層と濃茶色の包含層あるいは遺構埋土と考えられる土が斑点状に広がっており、土器は濃茶色土層に含まれていた。この土層と土器は、掘削によって天地返しにあって露出したものであることを容易に判断することができた。そしてこれらは路上をはさんで南と北に築かれたコンクリート壁の基礎掘削の際に搅乱を受けたものが多い。路面上を鏝簾で搔き混乱の広がりと搅乱を受けない所を明らかにしたところ、路面のほぼ中央部に東西方向に伸びる溝状の埋土の広がりを検出することができた。

この段階で待避所部分60m<sup>2</sup>の全面発掘調査が必要であると判断し、県教委は本山町教育委員会に対して記録保存のための緊急発掘調査の要請を行った。本山町教委は工事主体である同町産経課と協議を行い、その結果工事を一時中断し3月29日から4月14日まで発掘調査を実施することになった。



No	遺路名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	松ノ木遺路	縄文・弥生・古墳	9	下津野遺跡	縄文・弥生・中世	17	沖田遺跡	縄文
2	長徳寺遺路	縄文・中世	10	上奈路遺跡	縄文・中世	18	橋ノ口遺跡	縄文・弥生
3	東久保遺路	弥生	11	北山瀬ノ上遺跡	中古銅矛出土	19	高篠遺跡	弥生
4	銀谷の木遺路	弥生・中世	12	駿ノ尻遺跡	古代・中世	20	静岡遺跡	縄文
5	寺家遺路	中世	13	八反坪遺跡	縄文	21	大塙遺跡(同遺跡)	弥生
6	東畠遺路	弥生・中世	14	下田遺跡	弥生	22	鳥井遺跡	縄文
7	天神前遺跡	弥生	15	玉屋敷遺跡	縄文			
8	朝北西後遺跡(水田遺跡)	弥生・中世	16	田井古屋遺跡	弥生			

第1図 松ノ木遺跡の位置と周辺の遺跡

表1 遺跡名一覧表

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

松ノ木遺跡のある長岡郡本山村は、四国島の真中にあり近隣の町村と共に嶺北地方と呼ばれ、高知県の最北部を形成している。猿田岬を界して愛媛県伊予三島市に接しており、瀬戸内海と太平洋岸を結ぶ最短距離の中間点でもある。また四国三郎の異称をもつ吉野川の上流域にあたり、東方からの情報伝播の道も開けている。本山村は東西・南北からの情報のクロスする地点であり、交通の要衝としても重要な役割を果たして来たところである。段丘上に数珠なりにつらなる縄文・弥生時代の遺跡の存在はそのことを雄弁に語っている。まさにこのような地理的環境は、本山村の歴史と文化の形成に重要な役割を果たして来たのであり、松ノ木遺跡の内容を規定する大きな要因の一つである。

地質学的に見れば、当地域は中央構造線沿いに走る三波川帯の中にあり白亜紀後半の結晶片岩類によって構成されているが、古崖錐性の堆積物が隨所に見られる。付近には花崗岩派は確認されていないが、松ノ木遺跡出土の土器には、白濁色の含花崗岩特有の石英が多く見られる。これは古崖錐性の堆積物に含まれている可能性が強い。また段丘上の表土下にはアカホヤ（音地）が堆積しており地山となっている。

松ノ木遺跡は、県境付近から南流する汗見川と土佐町から出た地蔵地川が吉野川本流に合流して流れを大きく北東方向に転じたところに舌状に張り出した低位段丘上の南端部から沖積低地への変換点付近に位置し、標高約250mを測る。この低位段丘は吉野川上流域では最大の規模を誇るもので、南に展開する中位・高位段丘につらなっている。

周辺から旧石器は未確認であるが、最古のものとしては当遺跡の南の高位段丘に位置する長徳寺址（2）から出土した縄文早期の薦島式土器と高知県では初出土の大形横円押型文土器である高山寺式土器を挙げることができる。この他雲母が多量に入った厚手無文土器が出土しているが、岡本健児氏は高山寺式に含まれるものとしている<sup>(1)</sup>。続く前期の遺物は未発見であったが、今次調査によって磯ノ森式・彦崎Ⅰ・Ⅱ式を得ることができた。中期の遺跡としては、対岸の地蔵寺右岸の玉屋敷遺跡（15）を挙げることができる。偶然に発見されたもので1950年8月に岡本氏によって短期間の調査が行なわれている。船元Ⅰ式併行の土器（岡本氏によって玉屋敷式土器と命名される）が、横形石匙1点、石鐵15点と共に出土し、この他にも中期中葉と考えられる土器片や後期前業の磨り消し縄文土器が出土している<sup>(2)</sup>。晩期は、これも対岸の八反坪遺跡（13）から突帝文以前の深鉢・浅鉢が比較的まとまって、磨製石斧やノミ状石斧と共に出土している。黒土BⅠ式に併行する晩期前半の土器は、當時として本県初の出土であり八反坪式土器と命名されている<sup>(2)</sup>。この他上奈路遺跡（10）から晩期に属すると考えられている磨製石斧が単独出土している。また最近実施された分布調査によって下津野遺跡（9）、沖田遺跡（17）などいくつかの縄文土器散布地が確認されている。

本県の縄文時代の遺跡は西高東低の様相を呈しており、遺跡の約8割が西部の四万十川流域

や海岸段丘に分布している。このような状況下にあって、本山町と土佐町にまたがる吉野川上流域とそれに連なる支流に形成された河岸段丘上には、縄文時代の遺跡が帶に分布しており、しかも早期から晩期に至るまで継起的な展開のあり方を示している唯一の地域であると言つてよい。嶺北地域は、今後本県はもとより瀬戸内を含めた四国の縄文時代研究において重要な位置を占めることになる。

弥生時代の遺跡は、第Ⅳ様式から確認されている。嶺北高校校庭遺跡（8）から円線文土器と大型蛤刃石斧<sup>(3)</sup>が出土しており、岡遺跡（21）からも同時期の壺底部が出土している<sup>(4)</sup>。続く後期前半については嶺北高校校庭遺跡以外では未確認であるが、後期末～古墳時代初頭になると飛躍的に遺跡数が増加する。1981年に調査した銀杏ノ木遺跡からは、豊穴住居址状構、貯蔵穴などの遺構が検出されると共にヒビノキⅢ式土器と共に打製石包丁3点、石錐等が出土している<sup>(5)</sup>。嶺北高校校庭遺跡からもヒビノキⅠ・Ⅱ・Ⅲ式土器が、八反坪遺跡からもヒビノキⅢ式土器が出土している。

次に青銅器について触れなければならない。当地域は、県中・東部において最も青銅器が集中しているところであります。神社所蔵品など出土品の不明瞭なものを含めると銅鐸1個・銅矛5本を数える。銅鐸は、土佐町森字土居の琴平神社所蔵のもので畿内型突線鍔式（高さ約60cm）に属する。文化10年（1813）に編纂された『南路志』にも紹介されており、近世以前に周辺の遺跡から出土した可能性がある<sup>(6)</sup>。5本の銅矛の中で出土地点が唯一明瞭な1本は、北山瀬ノ上（11）出土の中広Ⅱ式である。吉野川とその支流渠谷川の合流地点を臨む位置にあり、1917年9月山腹の崩壊により露出したのである。他の4本のうち1本は広形Ⅰ式で土佐町袖ノ木の妙見社（星神社）の宝物である。残る3本は土佐町駒野山ノ神神社の宝物となっているものですべて中広Ⅱ式に属する<sup>(6)</sup>。これらの青銅器のすべては高知平野から持ち込まれたと考えられることから、弥生後期以降の当地域の遺跡数の増加と関連して注目すべき現象であり、当地が高知平野と瀬戸内海とを結ぶルートの中繼地としての要衝であったことが窺われる。

しかしながら古墳時代初頭を最後に、それ以降に続く遺跡はなくなり平安時代始めまで大きな空白期となる。嶺北地域が果たしてきた歴史的役割が一つの終りを迎えたことを意味する。

註(1) 岡本健児他「長慈寺址発掘調査報告書」 高知県長岡郡本山町教育委員会 1977年

(2) 岡本健児・宅間一之・森田尚宏・井本葉子「玉屋敷・八反坪遺跡と出土遺物」『土佐町史料』 高知県土佐郡土佐町教育委員会 1981年

(3) 岡本健児「嶺北高校校庭出土の遺物群」 前誌註(1)

(4) 岡本健児「岡出土の土器」 前誌註(1)

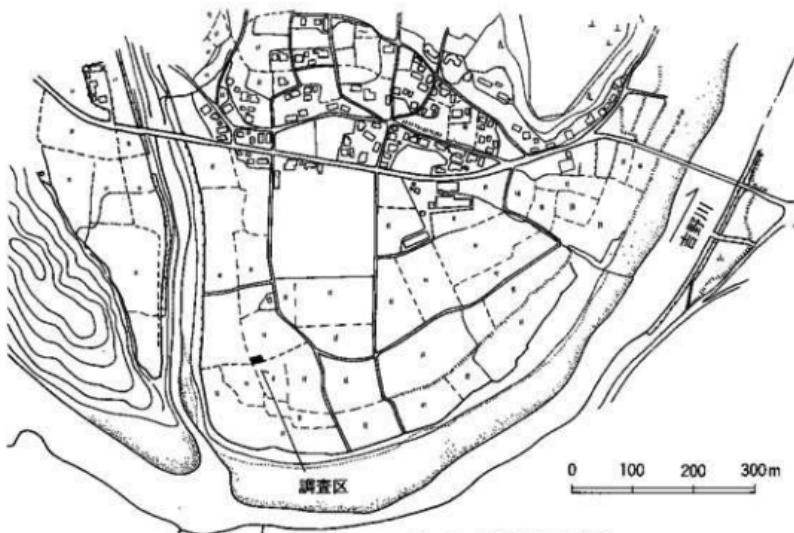
(5) 岡本健児「土佐町森 琴平神社の銅鐸」 前誌註(2)

(6) 岡本健児「嶺北地方発見の銅矛」 前誌註(1)

### 第Ⅲ章 発掘調査の方法

本山町教育委員会から通報を受け急行した時、現場はアスファルト舗装をする直前の状況であった。道路面は整地され黄褐色の音地層が露出し、その中の隨所に遺物包含層と思われる黒一茶褐色シルト層が斑点上に現われ、その中に縄文土器の細片が数多く見え隠れしていた。路面をはさんで南北にコンクリート擁壁が塗かれており、擁壁の基礎を深く際に掘削された「廃土」は付近の荒地に積まれていた。この「廃土」は黒一茶褐色シルト層で、大・小の縄文後期土器片が数多く含まれていた。このことから擁壁基礎が縄文後期の遺物包含層もしくは遺構を掘り込んでつくられたことを容易に知ることができた。

作業第一段階として路面上に鋤籠を掛け、擾乱部分とそれ以外の部分とを判別することに努めた。その結果、調査区の東よりの部分において、音地層（地山）の広がる中に濃茶色シルトの不整形な広がりが認められた。擁壁の周囲は音地層と黒一茶褐色シルト層がブロック状に入り混ざっており相当の擾乱を受けていることがわかった。この不整形の埋土の広がりは遺構の可能性もあると判断し、ここを中心に十字のセクションベルトを残して掘下げるにした。遺物は可能なかぎり20分の1でドット図を作製しながら取り上げ、レベルと共に記録した。後述するように調査が進むにつれて擾乱部分が広がっていることが判明し、遺物に埋土層序を付して取り上げることのできたのは、セクションベルト周辺を除くと一部の地点に限られた。

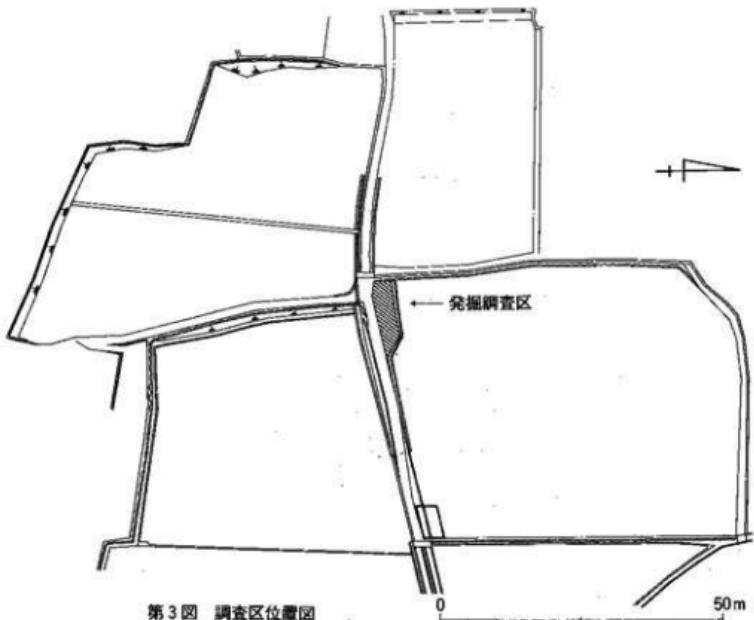


第2図 調査区周辺の地図

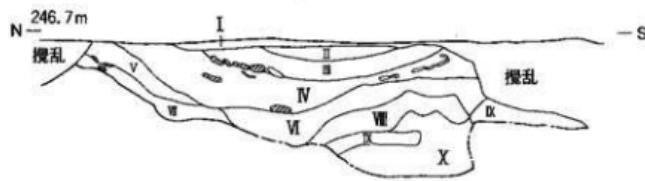
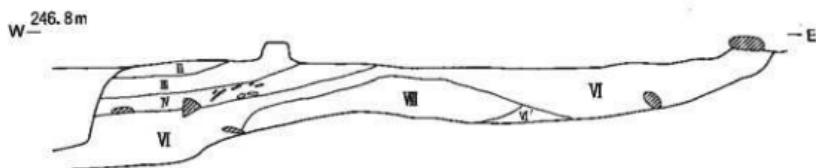
## 第IV章 発掘調査の成果

### 1 調査区の概要及び層序

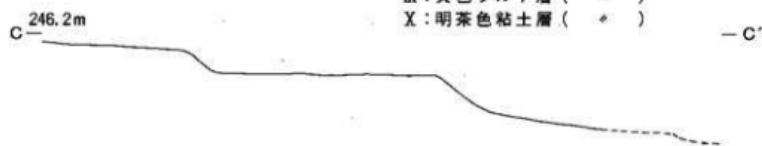
調査区は、低位段丘から沖積低地への変換点の緩傾斜地にあり、北側の町有地（育樹林）と南側の水田にはさまれた農道西端部の退避所である。東西12m・南北5mで面積は60m<sup>2</sup>を測る。東から西に向かって緩勾配の傾斜を示しており、調査区の東端と西端の比高差は約1.5mである。調査区の路面上は俗称音地層と呼ばれるアカホヤ火山灰層が広がっており、検出作業を繰り返した結果、調査区の東から西に向かってS字状に曲がる埋土の広がりを認めた。最初の輪郭が現われた時は土坑か堅穴住居の一部かと思われたが、検出作業が進むにつれて音地層に掘り込まれた溝状の埋土の広がりであることが判明した。埋土の広がりの東端の起点は明確にすることはできたが、西端は北側の現水田下に潜り込んでおり、その終りを明らかにすることはできない。南北共にコンクリート擁壁の近くは基礎工事の際の擾乱を激しく受けており、中央部分においても重機のバケットの爪が埋土下層にまで達している。この中で比較的残存状況の良い所に東西・南北（E-W・N-S）のセクションベルト（幅25cm）を設定し、溝状の落ち込みの層序を確認しつつ掘り下げて行った。層序は以下の通りである。



第3図 調査区位置図



- I : 摆乱層
- II : 赤茶色粘質土層（遺物包含層）
- III : 暗茶色シルト層（ $\oplus$ ）
- IV : 暗茶灰色シルト層（炭化物・土器多し）
- V : 茶色シルト層
- VI : 淡黄色シルト層（下部には0.5~2cmの砂礫混入）
- VI' : VI層に淡黄色シルトのブロックが混入
- VII : 淡灰茶色シルト層
- VIII : 暗灰色シルト層（無遺物層）
- IX : 黄色シルト層（ $\times$ ）
- X : 明茶色粘土層（ $\diamond$ ）



第4図 セクション図（第5図参照）

X層：明茶色粘土層：音地層堆積以前の層序であり、N-Sラインの一部でしか確認し得なかつたが、付近一帯に広がりをもち音地層の下層を形成しているものと考えられる。無遺物層である。

IX層：黄色シルト層：X層の上またはX層にくい込む状態で堆積している。無遺物層である。

VIII層：暗灰色シルト層：X・IX層及びVI'層の上に堆積しており、E-WのラインではVI'層下に凸状の堆積を示している。無遺物層である。

VII層：淡灰茶色シルト層：N-Sラインの北側に流れ込むように堆積している。南側は擾乱のために確認できない。少量の縄文後期土器が出土している。

VI'層：淡黄色シルトに音地層の黄色シルトがブロック状に入っている。無遺物層である。

VI層：淡黄色シルト層：層厚7~40cmを測り、下位では0.5~2cmの少レキが混入している。

IV層と共に安定した層序であり、出土遺物は少ないが後述する有文深鉢IV類が主体を占めている。

V層：茶色シルト層：N-Sラインの北壁側に流れ込むように堆積しており、少量の縄文後期土器を含む。

IV層：暗茶色シルト層：N-S、W-Eライン共にレンズ状の堆積を示しており層厚は最も厚いところで40cmを測る。埋土中で最も安定した層序である。縄文後期土器の大部分はこの層序の中央から北半分に折れ重なるように堆積しており、炭化物も多い。拳大・人頭大の河原石も数多く入っておりN-Sラインの上層では、河原石が列状に載っている。

III層：暗茶色シルト層：層厚は最大で20cmを測り、多くの縄文後期土器を含んでいる。

II層：赤茶色粘質土層：層厚は最大で10cmを測り、少量の縄文後期土器を含んでいる。

I層：擾乱層である。

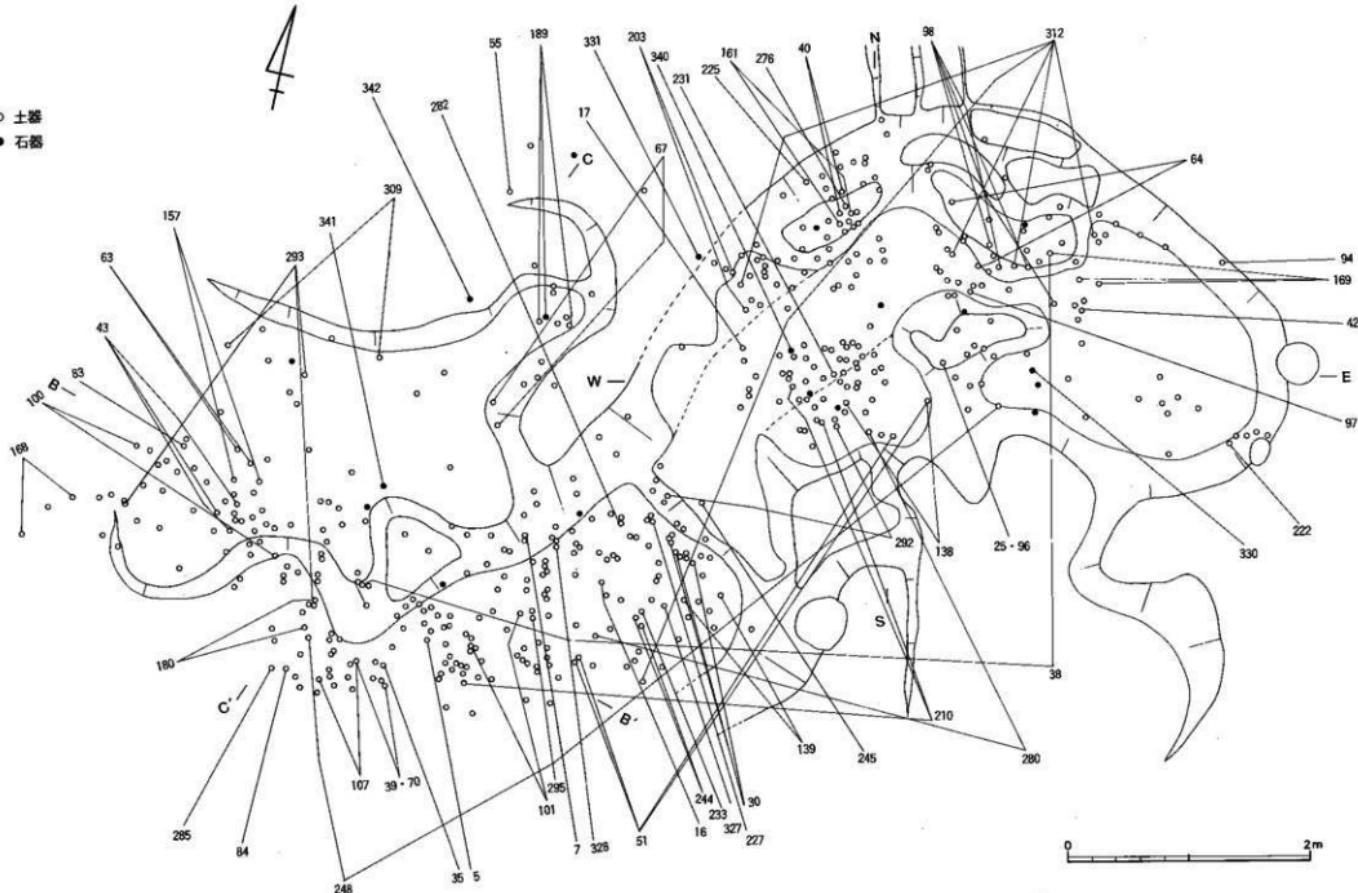
## 2 遺物の出土状況

出土遺物は、數点の縄文前期土器とコンテナケース約40箱分の縄文後期土器及び同時期の石器である。これらの遺物は、幅2.0~2.8m、深さ40~50cmの溝状の落ち込み及び溝状の落ち込みの西側北肩部にあるテラス状の部分から出土している。すでに述べたようにこれらの遺物の多くは、セクションベルト及びその付近で見る限り第IV層中から出土している。セクションベルト付近以外の地点については、擾乱が激しく出土層位を十分に確認できずに取り上げたものも多い。土器については第5図に示したように接合資料も多いが、38・210・280のように6m以上離れて接合したものもある。しかもそれらの中には割れ口の新しいものも含まれており擾乱による二次的な移動によるものも数多く含まれている。

セクションベルト付近では、写真図版を見ても判るように比較的大きな破片が折れ重なるよう堆積しており、それらは溝状の落ち込みの北側から一挙に投げ込まれたような状況を示している。この溝状の落ち込みの性格については、後で検討しなければならないが、比較的小規

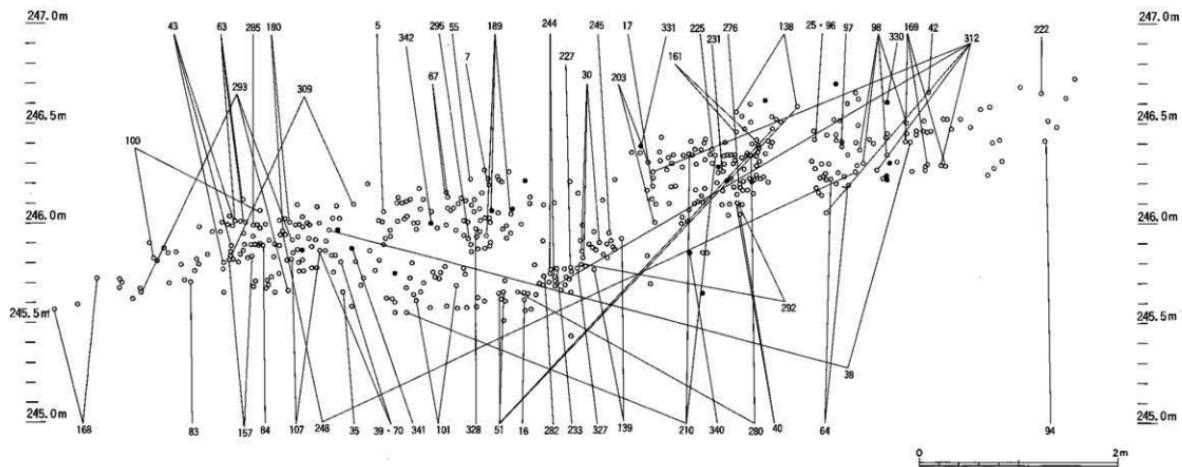
模なものであり、土器数型式にわたって存続できるようなものではなく、傾斜地にあることからもかなり短期間のうちに埋没したものと考えられる。以下出土遺物について縄文後期土器を中心に型態分類を行い土器組成・特徴などを明らかにしたうえで、各形態と層位的な関係などについて検証することにしたい。

○ 土器  
● 石器

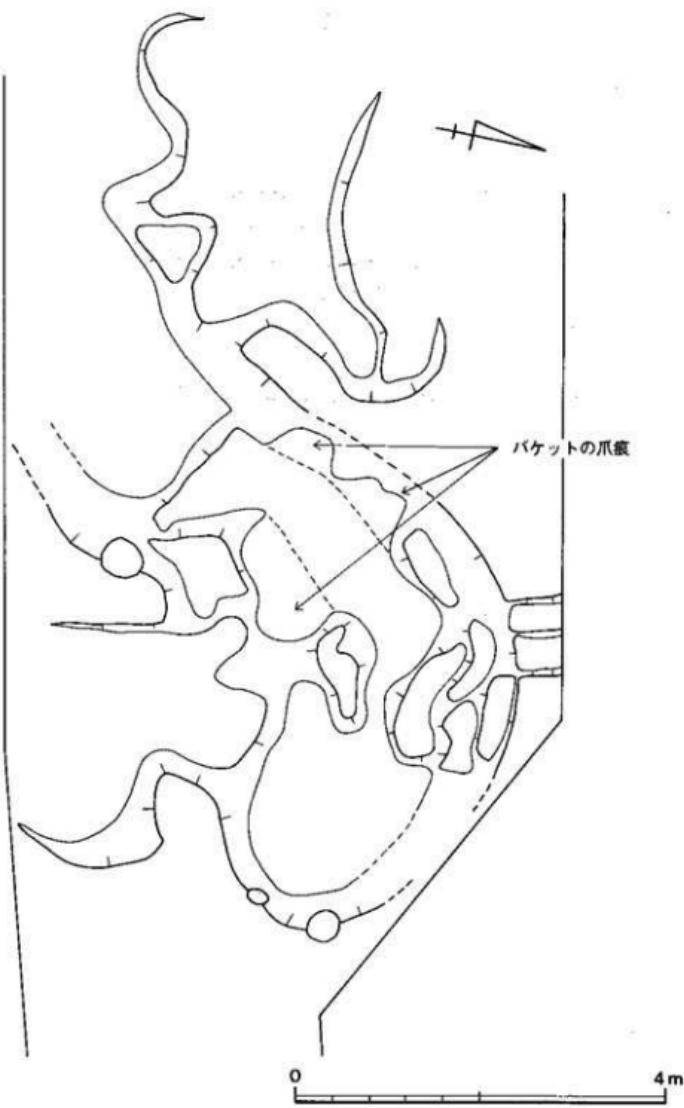


第5図 遺物出土状況平面図及びセクション位置図

○ 土器  
● 石器



第6図 遺物出土状況縦直分布図

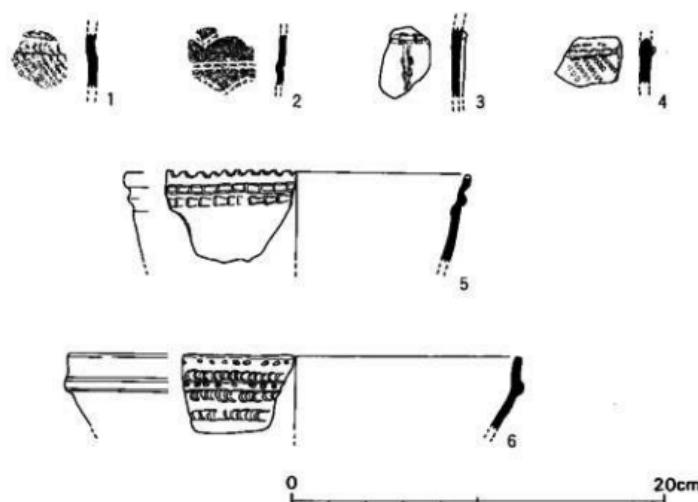


第7図 溝状落ち込みの完掘状況

## 第V章 出土遺物

### 1 繩文前期土器（第8図-1～6）

1は、2～3mmの器壁を有する上胴部細片である。幅6mmのC字状（右に聞く）連続爪形文を施し地文にR Lの繩文が見られるが羽状繩文をなすものであろう。磯ノ森式である。2も2～3mmの器壁を有する胴部細片で、幅4mmの半截竹管状原体を横位の直線、弧状に押し引きしている。3・4は（2）に比べると僅かに器壁が厚く細い突帯を貼付し、その上を半截竹管状工具で押し引きをしている。4の地文にはR Lの繩文を施している。共に彦崎Z II式である。5・6は2～3mmの器壁を有する。5は、口縁端部にやや荒い刻目を付け口縁下に2列の押し引き文を施す。工具を器面に強く押し付けるために施文部の内面が凸状を呈している。6は、口縁部が「く」字状に屈曲し、屈曲部外面に断面方形の隆帯が貼付される。半截竹管状工具による押し引き文が隆帯の上に1条、下に2条施され、口縁部と隆帯上に刺突文が見られる。5が彦崎Z I式に、6が磯ノ森式に属する。これらの前期土器は第IV層及び擾乱層から出土している。



第8図 繩文前期土器

## 2 繩文後期土器（第9図～46図）

繩文後期土器は今次調査出土遺物の主体をなすもので、有文深鉢・粗製深鉢・有文浅鉢・無文浅鉢・粗製浅鉢・注口上器・双耳壺に分けることができる。以下各器種ごとに型式分類を行い記述を進める。

### (1) 有文深鉢

#### ① 有文深鉢Ⅰ類（第9図-7）

2本沈線による磨り消し繩文を有するタイプである。繩文帯の幅が狭く口唇にも1条の沈線を有す。繩文はR L、外面丁寧に研磨され外側には赤彩が施されている。宿毛式に属する。

#### ② 有文深鉢Ⅱ類（第9図-8-10）

3本沈線による磨り消し繩文を有するタイプである。8は波状口縁を有し口唇部に繩文、波頂部に向かって短沈線を施し、波頂部下の頸部外側に3本の沈線が左右に描かれる。9は平縁口縁で、口縁部が外方に肥厚し、口唇部と口縁下に1条の沈線を配し、更に右下がりの短沈線（以後R）を施す。頸部外側には縦及び弧状の3本沈線による磨り消し繩文。10は胴部片である。8-10共に繩文の然りはR Lで、(9)の沈線脇にはドテが残る。3本沈線を有することで1つに分類したが、8は福田貝塚のFK9層に対応するものであり、型式的には(9-10)より後出の可能性がある。

#### ③ 有文深鉢Ⅲ類（第9図-11-17、第10図-18-22）

バケツ形の器形を有し胴部外側は2本沈線による区画文。口縁部は内面に粘土帶を貼付し肥厚させ文様帶とするもの。胴部文様が2本沈線で描かれるもの(A)と繩文帯・繩文地が伴うもの(B)・胴部無文のもの(C)更に口縁部内面の肥厚が強く太いもの①と弱く小さいもの②に分けることができる。

#### III-A-①類（第9図-12・13）

12は、ドーム状の突起を有しその外面に区画文、内面の縁部に刺突文を施す。肥厚した平縁口縁部にはRの短沈線を配す。13は口縁内面に1本の沈線を巡らしその外側にRの短沈線を配す。共に沈線脇にドテを残す。

#### III-A-②類（第9図-11・15）

11は肥厚がほとんど見られず口唇にRの短沈線、15は内・外に肥厚し口唇に沈線と刺突文を配す。共に沈線脇にドテを残す。

#### III-B-①類（第9図-16・17、第10図-20）

16・17は突起を有するが、(16)の突起は欠落しており形状は不明である。(17)の突起は山状をなしきな孔が左右に貫通している。内面肥厚した口縁部に1本の沈線を巡らし、16は沈線と直交するかたちで、17はRの短沈線を配す。(16)の胴部文様はR Lの粗雑な繩文があり、口縁下に横方向・胴部は縦方向の区画文を一部入り組みを使って描き、一部の区画文内には貝殻条痕をそのまま残している。17は、主として横方向に流れる区画文で沈線が部分的に切れて

いる。区画外に縄文を施し、区画内は貝殻条痕を残している。20は頭部に幅狭い無文帯を有するが、全体の器形から本類に分類した。内面肥厚した口縁に1本の沈線を巡らし外側にRの短沈線を配す。胴部外面2本の沈線間に断面三角形の刺目突帯を貼付。突帯下に横位梢円形の区画文を2つまで認める。区画内条痕の上を磨いている。三者共に縄文の撚りはR L、16・17は沈線脇にドテを顯著に残す。

### III-B-②類（第9図-14）

口縁内面に1本の沈線を巡らし外側に縄文、胴部外面は縄文地に円形区画文、III-B類でも16・17とはモチーフが異なる。縄文の撚りはR Lである。

### III-C-①類（第10図-18・19・21・22）

18・19は断面カマボコ状、21は台形状の粘土帯を貼付。三者共口縁内面に1条の沈線を巡らし、18・19はRの短沈線、21は左下り（以下L）の短沈線を配す。一見粗製土器風であるが内面を磨いてるので本類に入れた。共に外面は貝殻条痕調整である。22は外方にも拡張されている。

## ④ 有文深鉢IV類

有文深鉢の中で最も多数を占めるタイプである。外反する口縁を有し基本的に頭部無文、口縁内面に粘土帯を貼付し文様帯をつくり出す。胴部文様が沈線によるもの（A）、縄文帯・縄文地が伴うもの（B）、集合沈線によるもの（C）、刺突文によるもの（D）、口縁部文様帯のみのもの（E）に分類することができる。各種の突起・波状口縁が多く、沈線幅が太くて沈線脇にドテを残すことが多いのも本類の特徴である。

### IV-A類（第10図-24・25、第11図-26・28、第12図-29-31、第13図-32・33・35・36、第14図-37）

口縁内面の貼付粘土帯の形状が断面台形状のもの（24・25・30・33・36）、やや扁平な台形状のもの（31）、三角形のもの（26・28・29・35・37）、カマボコ状のもの（32）がある。内面の文様帯は沈線と外側に配した短沈線が主体となる。36は2本の沈線、28は四状を呈し、他はすべて1本の沈線を巡らしている。短沈線は例外なくRが配される。（30）以外の多くが頭胴部間に区画沈線文を巡らしている。26・29・30・32・35・36・37は大・小の突起を有する。このうち（26・30・32）は突起部下に2～3本の垂下沈線を有する。（26・37）の突起は小さい山形を呈し、（37）の頂部には2個の刺突文を配す。（29・30）の突起は大きな耳状を呈し、（29）の突起は左右に貫通し大突起間に大きな刺突を3個配した小突起を有す。30は、突起の位置関係から等間隔に4個所あるものと考えられ、口縁内面の沈線はこの突起のところで切れている。

（32）の突起は環状を呈している。胴部文様は全体を明らかにできるものはないが、25は横向向に流れる区画文を入り組みを使って描く。28は鉤状の区画文、30は長梢円形と弧状の区画文、35は垂下部が太く描かれた鉤状の区画文を主体にし、沈線は完全に連結していない。37は長方形と鉤状の区画文を配している。

IV-B類 (第10図-23, 第11図-27, 第14図-38~40, 第15図-41~45, 第16図-46・47, 第24図-97)

口縁内面の貼付粘土帯の形状は、断面台形状のもの (23・39・40・42・45・47・97), 三角形のもの (27・38・41・43・44), 長方形のもの (46) がある。口縁部文様帶には、(44) が2本、他はすべて1本の沈線を巡らし、(37) と (41) が沈線と直交する短沈線、(43・44・97) が繩文帯を施す他はすべてRの短沈線を配している。また97は、口縁に径1cmの刺穴を2個配しており、このうち1個は沈線を切るが、他の1個は沈線が内側にまわりこみ向方から切り合っている。しかし (27・46) の口縁は短沈線の下地に繩文帯が巡っている。27・38・39・40・43・44は、大小の突起を有し、45は波状口縁を有す。27・38は貫通する大きな耳状の突起で、40は大突起間に小突起がある。43は小さな瘤状の突起を有する。38は、突起部から沈線に画された繩文帯が垂下し、(45) の頸部外面には横方向に走る沈線が認められる。23・27・39・40・42・46・47は、頸胴部間に1本の区画沈線を配している。胴部文様は繩文地に鉤状の区画文 (40・43・47・97) や長方形の区画文 (39・41・42) が見られるが、区画内は貝殻条痕が残る。40は一部入り組み風に描かれている。繩文の歴りはすべてR Lである。

IV-C類 (第17図-51)

口縁部内面に断面三角形の粘土帯を貼付し文様帶をつくり出す。内面に沈線を巡らし外側にRの短沈線を配す。弱い波頂部を4個所に設け、頂部に刺突を施す。頸胴部間に1本の区画沈線を配し、胴部には弧状に沈線を配するが、各弧線共に連結せず下部で切れている。

IV-D類 (第16図-48)

口縁部内面に断面カマボコ状の粘土帯を貼付し1本の沈線を巡らす。両脇から摘んだ扁平な突起を有す。頸胴部間に1本の区画沈線を配し、そこから4本の沈線を垂下させ区画帯をつくり、その中を楕円形の刺突で充填する。

IV-E類 (第16図-49・50, 第17図-52・53・55, 第18図-56・57, 第25図-100・101)

(55) のように確実に口縁部文様帶のみのものもあるが、胴部以下が欠落しているものも一応この中に含めた。口縁部内面の貼付粘土帯の形状は、断面台形状のもの (49・52・56・57), 長方形のもの (53), 三角形のもの (50・101), カマボコ状のもの (55・100) がある。口縁部文様帶は (55) が2本の沈線を巡らすが、他はすべて1本であり、外側の短沈線は、(49・50・56・57) がRで (52・53・55) はR Lの繩文帯を配す。50・53・101は波状口縁を有し、波頂部に50は1個、53・101は2個の刺突を配し、その部分で沈線が切れている。

⑤ 有文深鉢V類

本類は、IV類に次いで多い型式である。外反する口縁部・頸部無文などはIV類と共通しているが、口縁部文様帶であるところの口縁部の内面肥厚帯の膨みが弱い。またIV類で見られたような大きな突起のないことも本類の特徴である。胴部文様はIV類と同じ基準で沈線文 (A), 繩文帯・繩文地 (B), 集合沈線 (C), 口縁部文様帶のみ (E) に分けることができる。

#### V-A類 (第18図-58・61)

58は、Rの短沈線を刺突風に配し、頸部外面には垂下沈線を有し、頸胴部間に沈線につながっている。61は口縁部内面に扁平な粘土帯を貼付、1本の沈線を巡らし外側にRの短沈線を配す。胴部文様は繩文地に区画沈線文を施す。

#### V-B類 (第18図-62, 第19図-63・64・66)

口縁部内面の肥厚は(63)が比較的顯著に見られるが、他は僅かな肥厚である。62は口縁部無文。63は突起部が欠損しているが、突起部から口縁内面に2本の沈線が巡る。(66)も2個の刺突文を有する小突起から2本沈線による区画文が走る。(64)の口縁部は、Rの短沈線のみを施している。62・63・66は頸胴部間に区画沈線を配する。62の胴部は繩文地に縱方向の区画文、63は繩文地に渦巻文風の文様を描く。64は長指円あるいは鉤状の区画文を描き繩文を充填している。沈線は一部切れているものもある。繩文の捺りはすべてR Lである。

#### V-C類 (第19図-65, 第20図-67)

65は口縁内面の沈線と短沈線で口縁部文様帯を形成。頸胴部間に弱い区画沈線その下に集合沈線を配す。67は口縁部に2本の沈線を巡らし頸胴部間に1本の沈線、胴部外面全面に幾何学文を充填する。

#### V-E類 (第20図-68・71, 第21図-72~77, 第24図-98)

71は3本の沈線集約部に3個の刺突文を配す。73は2本の沈線。72・74・75はRの短沈線のみ。76・77は1本の沈線とRの短沈線を口縁部文様とする。また72・74は小突起を有し2個の刺突文を配している。98は口径の4等分割点に弧線文を配しその間を沈線で結び、外側にRとLの短沈線を配する。

#### ⑥ 有文深鉢VI類 (第18図-59・60)

口縁部外反、頸部無文などはIV・V類と同様であるが、口縁部内面の肥厚帯の作り方が異なる。すなわち内面に粘土帯貼付の有無が不明である。59は内外に拡張された口縁上面に2本の沈線を配す。60は2本の沈線で弧線を描きそこから2本沈線が走る。(59)の胴部は3本の沈線が横走するが、沈線脇のドテは磨き取られている。

#### ⑦ 有文深鉢VII類

頸部外面無文の原則は貫かれているが、口縁部内面の肥厚が全く見られず、口縁部文様は端部の刻目のみである。胴部文様は沈線のみのもの(A)と集合沈線によるもの(C)に分けることができる。

#### VII-A類 (第21図-78, 第22図-79・81)

78は胴部が2~3本の沈線で鉤状に描かれるが、IV・V類の区画文とは全く異なる。79は、多条の沈線が横走、81は弱い波状口縁を有し頸部外面に3本の垂下沈線。頸胴部間に1本の区画沈線を配す。

#### VII-C類 (第22図-80)

口唇部に刻目、脣部外面に弧状の沈線文を重ねる。

⑧ 有文深鉢Ⅶ類 (第22図-83・84)

口縁部外面に粘土帯を貼付して文様帶をつくり出す。83は、口縁端部に刻目と外面に横方向の沈線を配す。沈線はⅣ類のように幅広くドテも残している。84は口縁部に刻目のみを配す。

⑨ 有文深鉢Ⅷ類

口縁部外面に文様帶をつくり出す点はⅦ類と同様であるが、粘土帯貼付の有無が不明のもので、沈線のみのもの (A) と繩文・擬似繩文を施すもの (B) に分けることができる。

Ⅸ-A類 (第25図-99)

波状口縁を有し波状曲線に沿って沈線を描く。頂部下に径1.1×1.5cmの円孔を穿ち、更に2本の沈線を垂下させる。

Ⅸ-B類 (第22図-82・85・86)

82は、波頂部に渦巻文を2段に配し、R Lの繩文地のうえに2本の沈線を横走させる。(85)もR Lの繩文地に2本の沈線を横走させる。86は2本の沈線の上下に擬似繩文を施す。

⑩ 有文深鉢Ⅹ類

口縁部の外面に施文する点はⅨ類と同じであるが、施文幅が狭いものを本類とした。粘土帯を上下に貼付して拡張するもの①と拡張しない②に分けることができる。

Ⅹ-①類 (第23図-96)

上方に拡張された口縁外面に1本の沈線を横走させ、下にRの短沈線を配す。頭部無文、脣部外面は貝殻条痕を施す。

Ⅹ-②類 (第23図-92・93)

両者共に一見バケツ型のⅢ類に似ているが、口縁部外面に文様帶を有する点に着目し本類に入れた。端部がわずかに内湾し、外面に1本の沈線を巡らせ(92)はLの(93)は沈線に直交する短沈線を配している。

⑪ 有文深鉢Ⅺ類 (第23図-90)

キャリバー状の口縁部を有し、外面に5本の沈線を横走させ沈線間に3帯のL Rの繩文を充填、最上部にはRの短沈線を配している。

⑫ 有文深鉢Ⅻ類 (第22図-88)

波状口縁の頂部が欠損しているが、内傾する口縁部外面に隆帯を貼付し刺突文を施す。頭部無文で、頸脣部間に1本の区画沈線が認められる。

⑬ 有文深鉢ⅩⅢ類 (第23図-89・91)

直立に近い口頭部を有する。89は頭部外面に複雑な意匠の沈線文を描く。91は頭部無文、脣部外面に沈線文。本類に施される文様は、これまでの文様意匠とは異なっており、沈線脇のドテも丁寧に磨き取られている。両者共に壺になる可能性がある。

⑭ 有文深鉢ⅩⅣ類 (第22図-87, 第23図-95)

口頸部無文で胴部全縄文を有するタイプである。87は頸胴部間に区画沈線を配し、それ以上に擬似縄文を施す。95はR Lの縄文を施す。

⑯ 有文深鉢Ⅹ V類 (第23図-94)

太い隆帯を有するタイプである。94は、上胴部で強く「く」字状に屈曲し、上胴部から底部に向かって断面カマボコ状の隆帯が垂下し高台状の底部に連結する。隆帯の両脇には細い沈線が沿っている。外面は丁寧に研磨され一見瓦質土器を思わせる。搬入品である。

(2) 有文深鉢類・胴部

全体のモチーフが明らかなものはないが、文様手法として沈線によるもの(A)・縄文が施されるもの(B)・集合沈線(C)・刺突文(D)・胴部全縄文(E)に分けることができる。

① A類 (第26図-102・103・106・107)

102は弧状に展開する区画沈線文、103は頸部の垂下沈線、106は頸胴部間に区画沈線と胴部の火炎状を呈する区画沈線文が見られる。107は鉤状の区画沈線文である。これらの多くは有文深鉢Ⅳ・V類の胴部文様と考えられる。

② B類 (第26図-104・105・108~112、第27図-113~126、第28図-127・128)

この場合縄文の多くは沈線区画文外の地文として存在する。(104・108・110・112・113・116・117など) そして沈線はA類に比べて入り組み文が多数見られる。(108・112・119・120・125) のようにA類と同様の鉤状区画文も見られる。122は、断面方形の小隆帯を貼付しているが一応本類に入れた。縄文の燃りは(122)がL Rで、他はすべてR Lである。104は胴下端で、底部との接合部で欠損している。

③ C類 (第28図-130~133)

130・133は、有文深鉢Ⅳ-C類(51)と同様な意匠を有し、弧線は下端で連結しない。131は頸部の垂下条線、132は横方向に流れる多条沈線である。

④ D類

有文深鉢Ⅳ-D類(48)の刺突文と同様なものが出土しているが図示し得なかった。

⑤ E類 (第28図-129)

R Lの縄文を全体に施す。底部との接合部で欠損している。

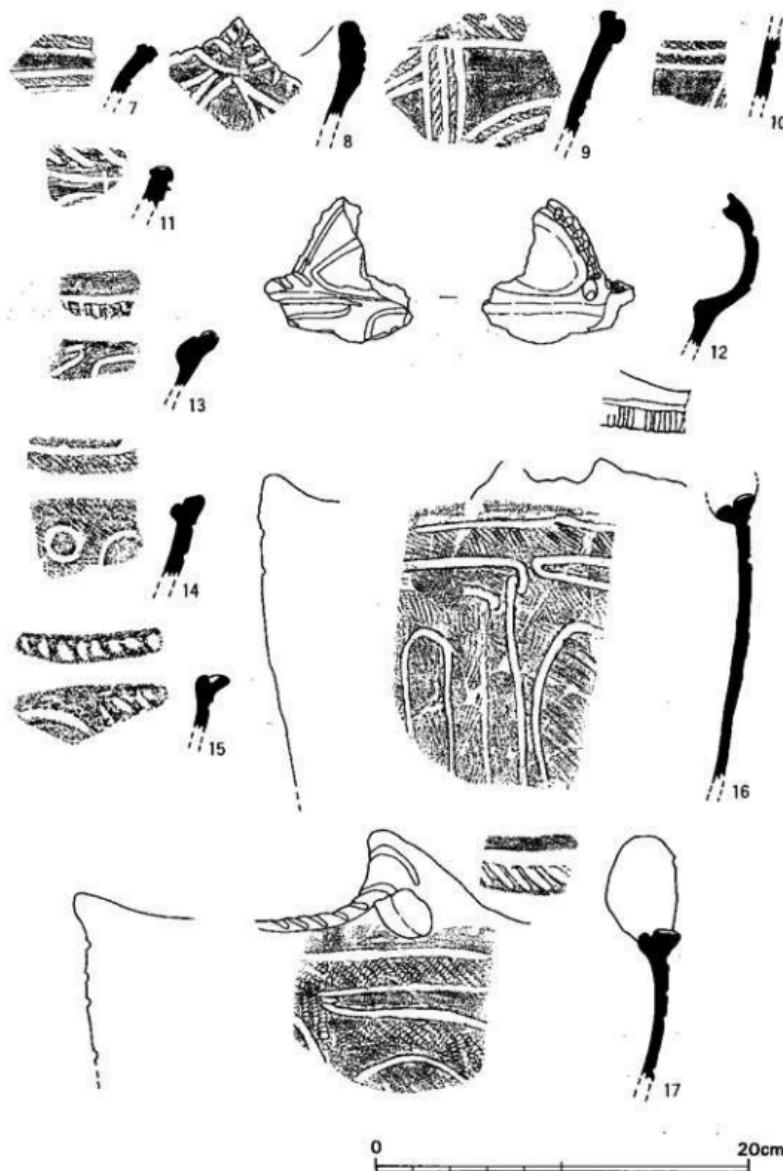
(3) 粗製深鉢

① 粗製深鉢 I類

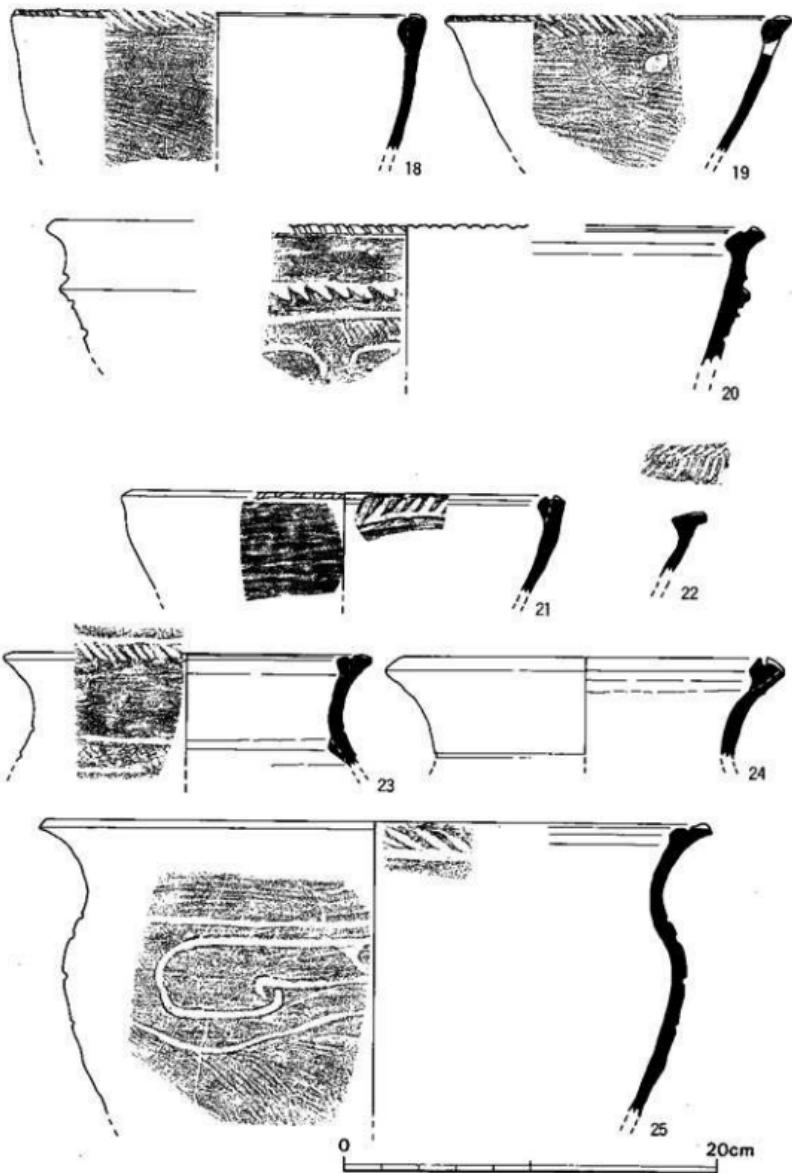
口縁部に刻目を有するタイプである。口頸部の型態の差違によってA~D類に細分することができるが、口縁部の縦片のみでは必ずしも十分な細分をすることができない。

I-A類 (第20図-69・70、第29図-134~138、第30図-141・146)

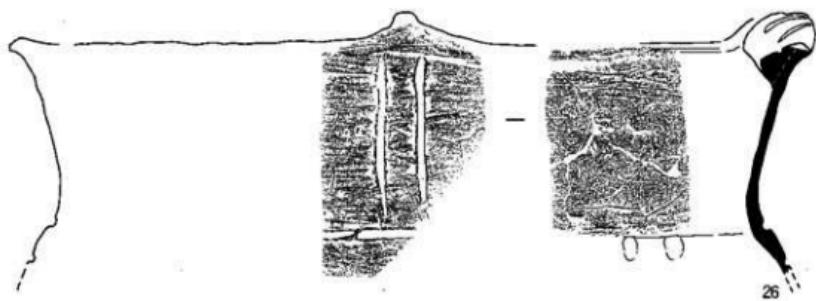
口縁部が強く外反するタイプである。(69)の口縁端は凹状をなし幅広くつくられ、刻目というよりRの短沈線が配される。70は山形の突起を有している。135はゆるやかな波状口縁をなす。(137)の刻目は、R・L・口縁に対して直角の3種の方向に施文せられている。



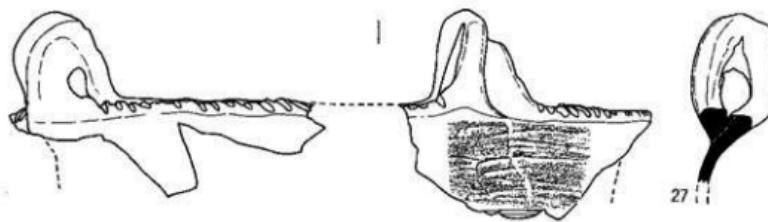
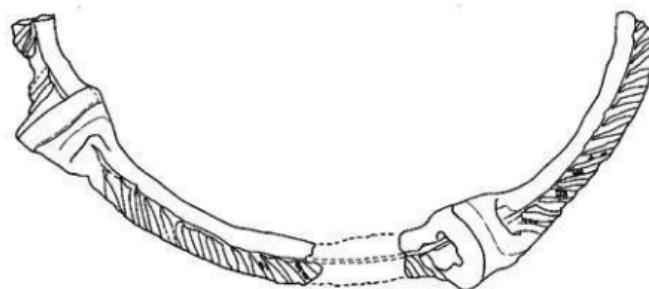
第9図 織文後期土器 有文深鉢I類(7), 同II類(8・9・10), 同III-A-①類(12・13),  
同III-A-②類(11・15), 同III-B-①類(16・17), 同III-B-②類(14)



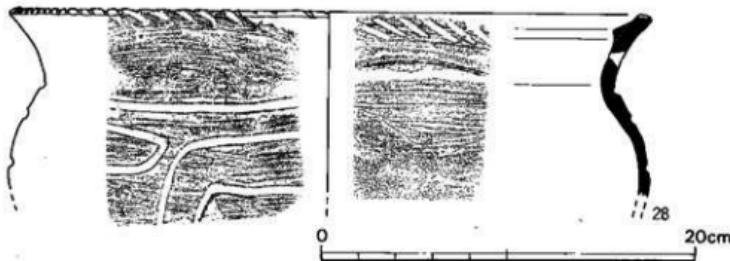
第10図 繩文後期土器 有文深鉢III-B-①類 (20), III-C-①類 (18・19・21・22),  
IV-A類 (24・25), IV-B類 (23)



26



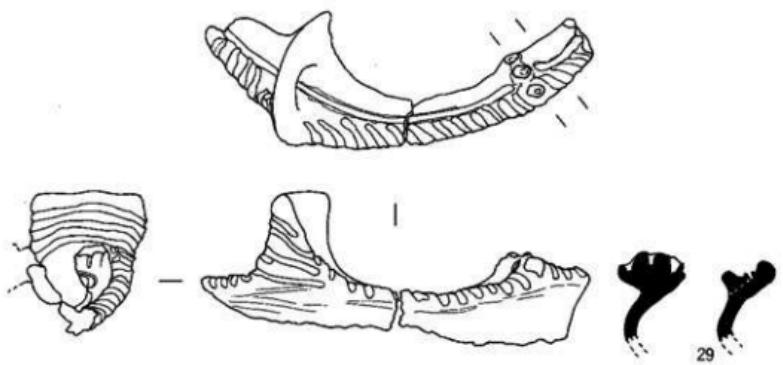
27



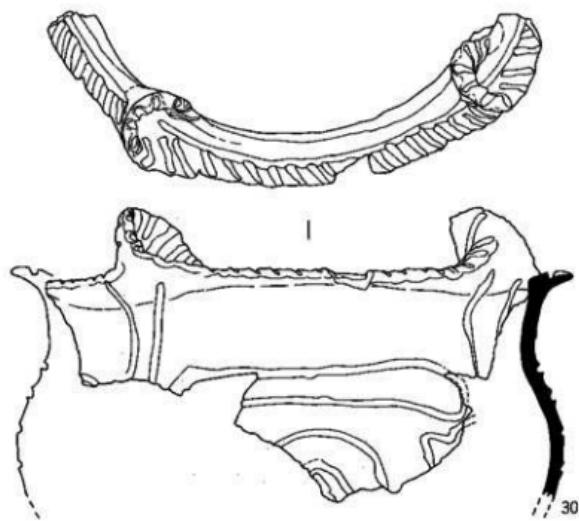
0

20cm

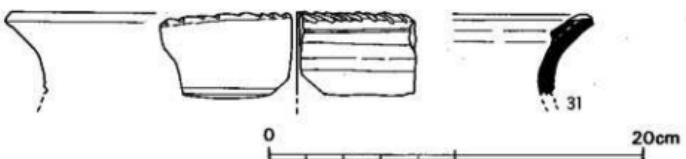
第11図 縄文後期土器 有文深鉢IV-A類 (26・28), 同IV-B類 (27)



29

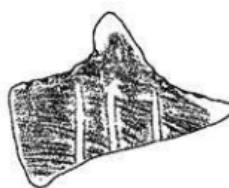


30



31

第12図 繪文後期土器 有文深鉢IV-A類 (29~31)



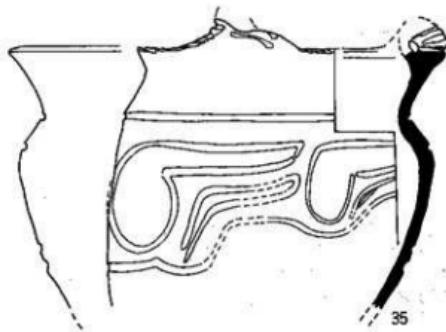
32



11 33



34



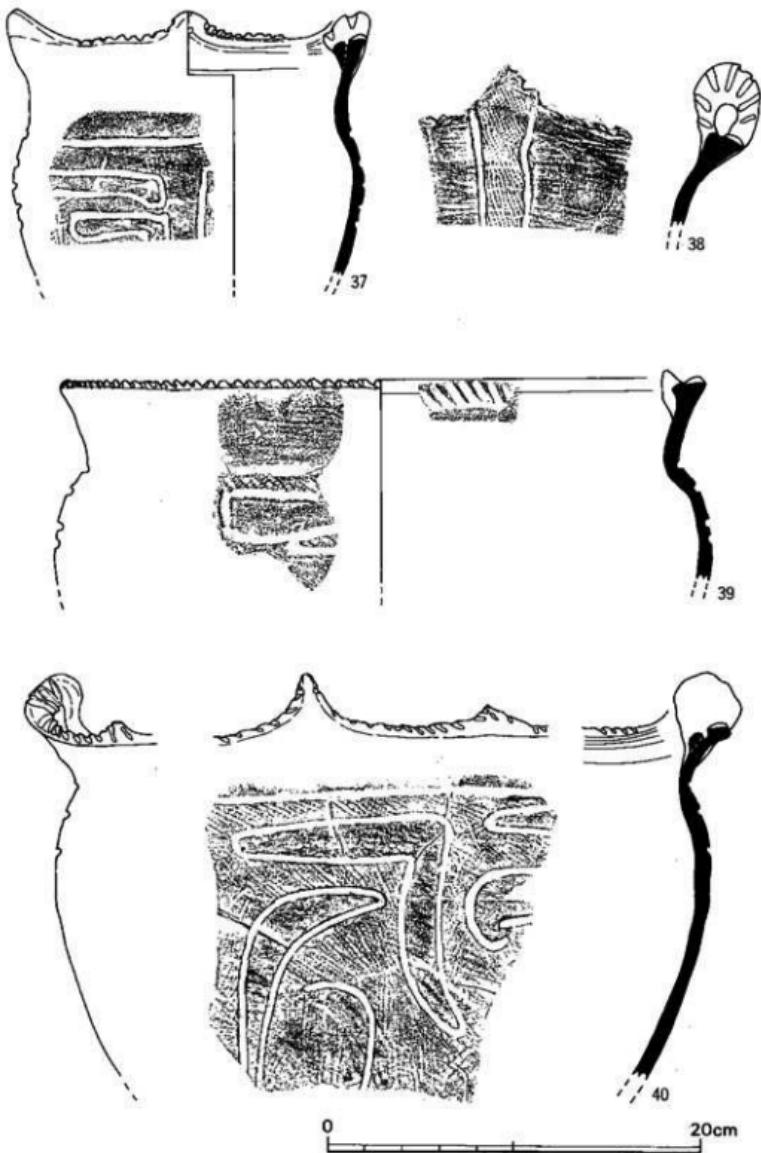
35



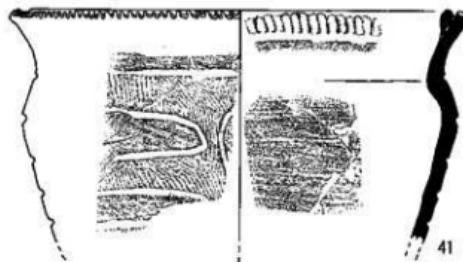
36

0 20cm

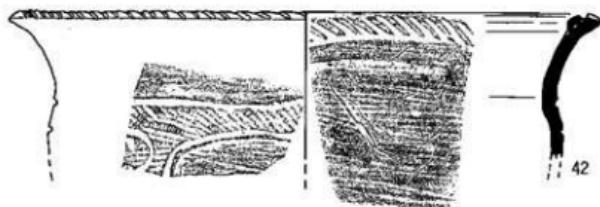
第13図 繩文後期土器 有文深鉢IV-A類 (32・33・35・36), 同V-A類 (34)



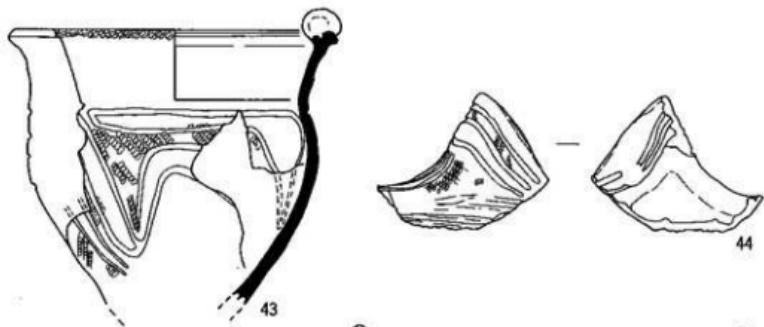
第14図 縄文後期土器 有文深鉢IV-A類(37), 同IV-B類(38~40)



41



42



43

—



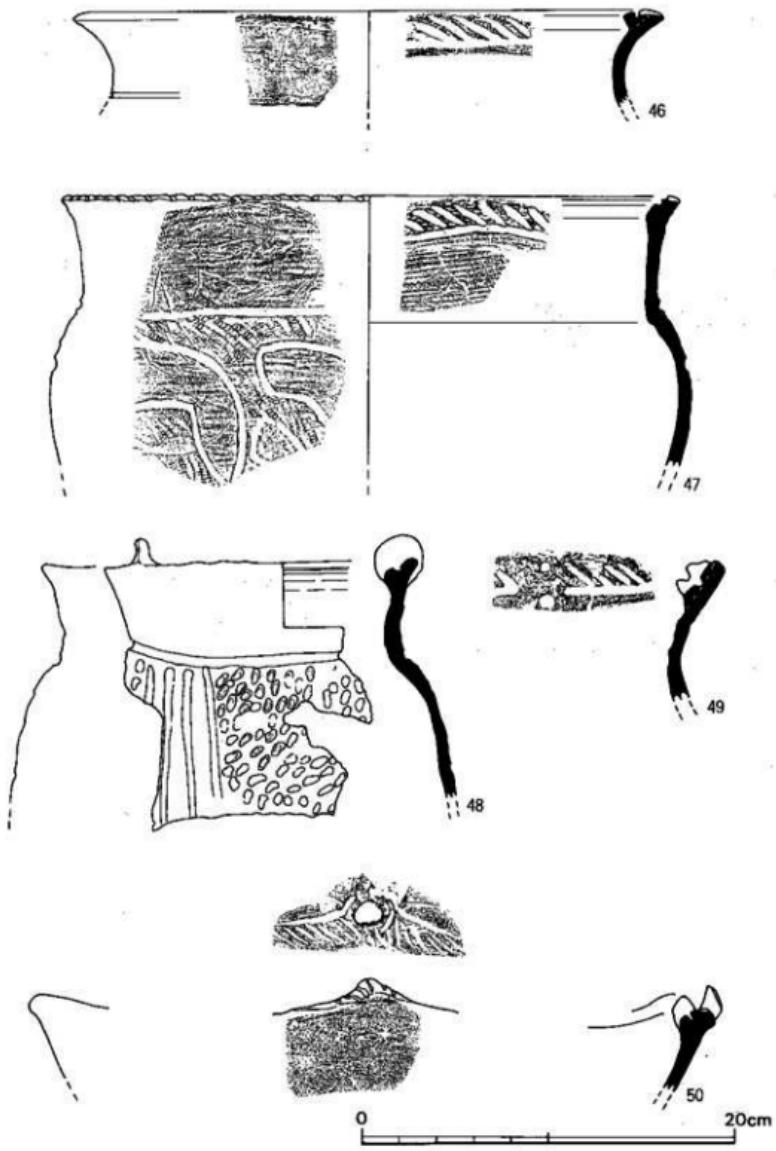
44



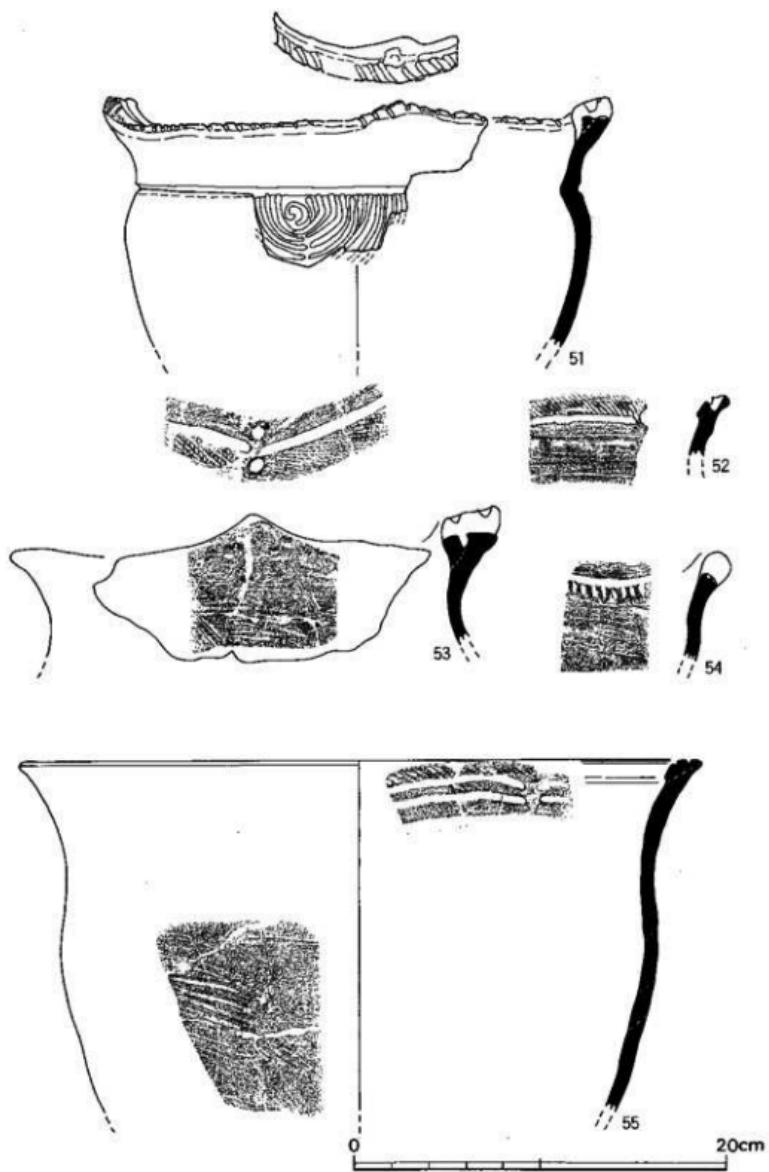
45

0 20cm

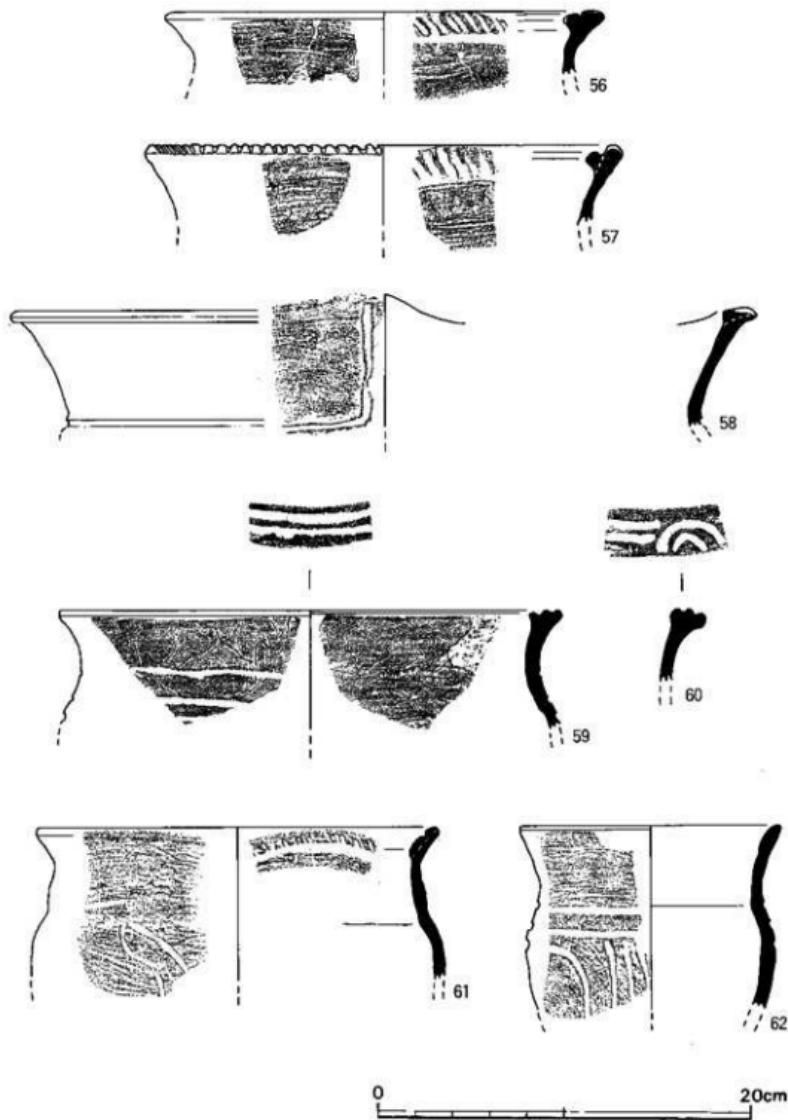
第15図 繩文後期土器 有文深鉢IV-B類 (41~45)



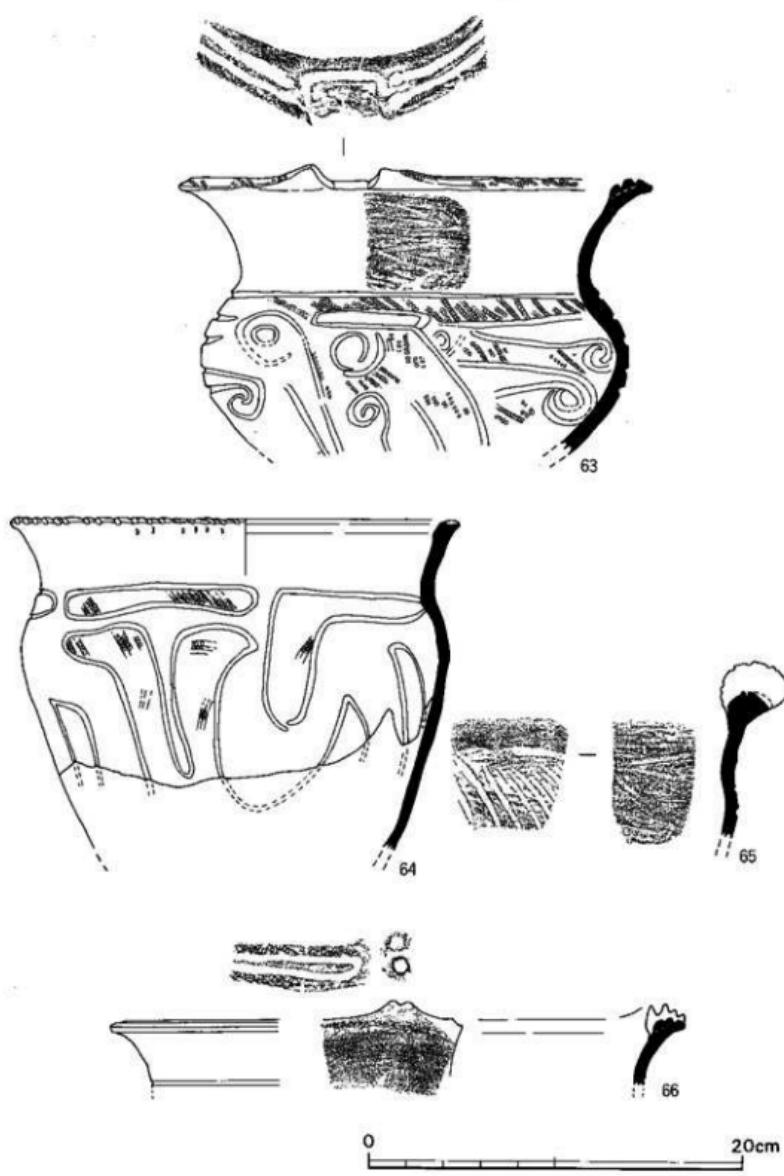
第16図 繪文後期土器 有文深鉢IV-B類(46・47), 同IV-D類(48), 同IV-E類(49・50)



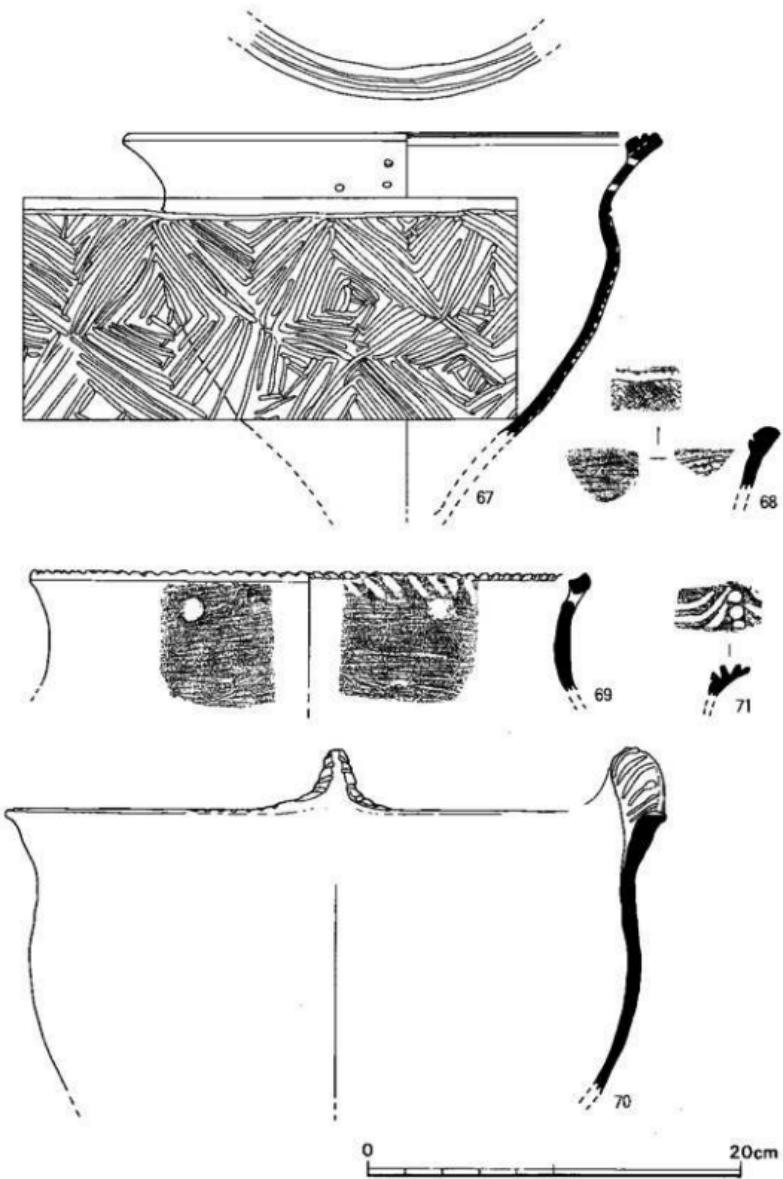
第17図 繩文後期土器 有文深鉢IV-C類(51), 同IV-E類(52・53・55), 同V-E類(54)



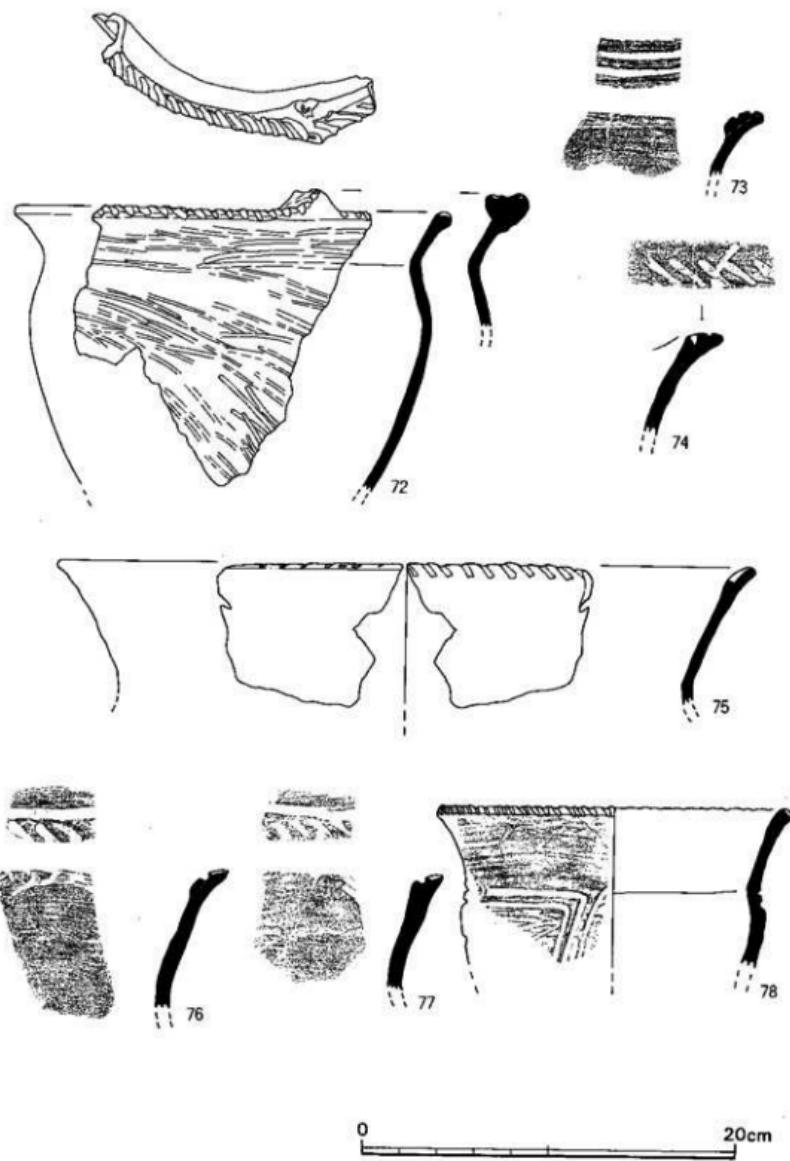
第18図 繩文後期土器 有文深鉢IV-E類 (56・57), 同V-A類 (58・61),  
同V-B類 (62), 同VI類 (59~60)



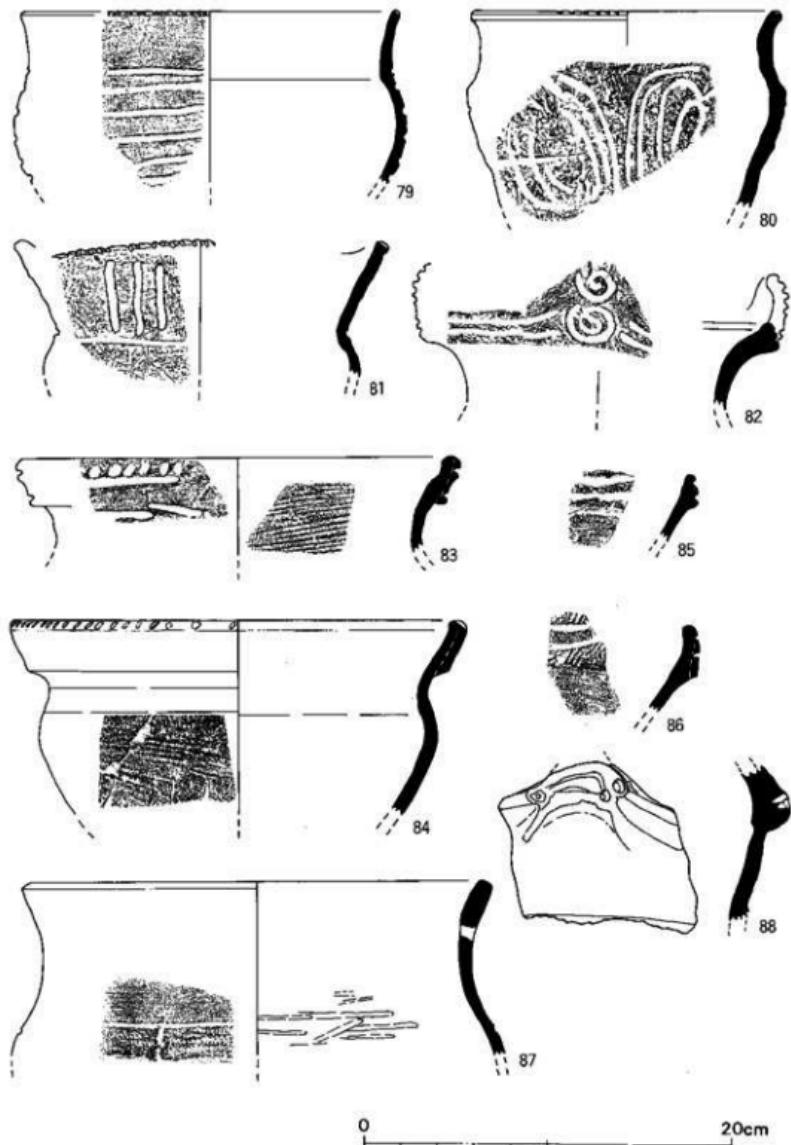
第19図 繩文後期土器 有文深鉢V-B類 (63・64・66), 同V-C類 (65)



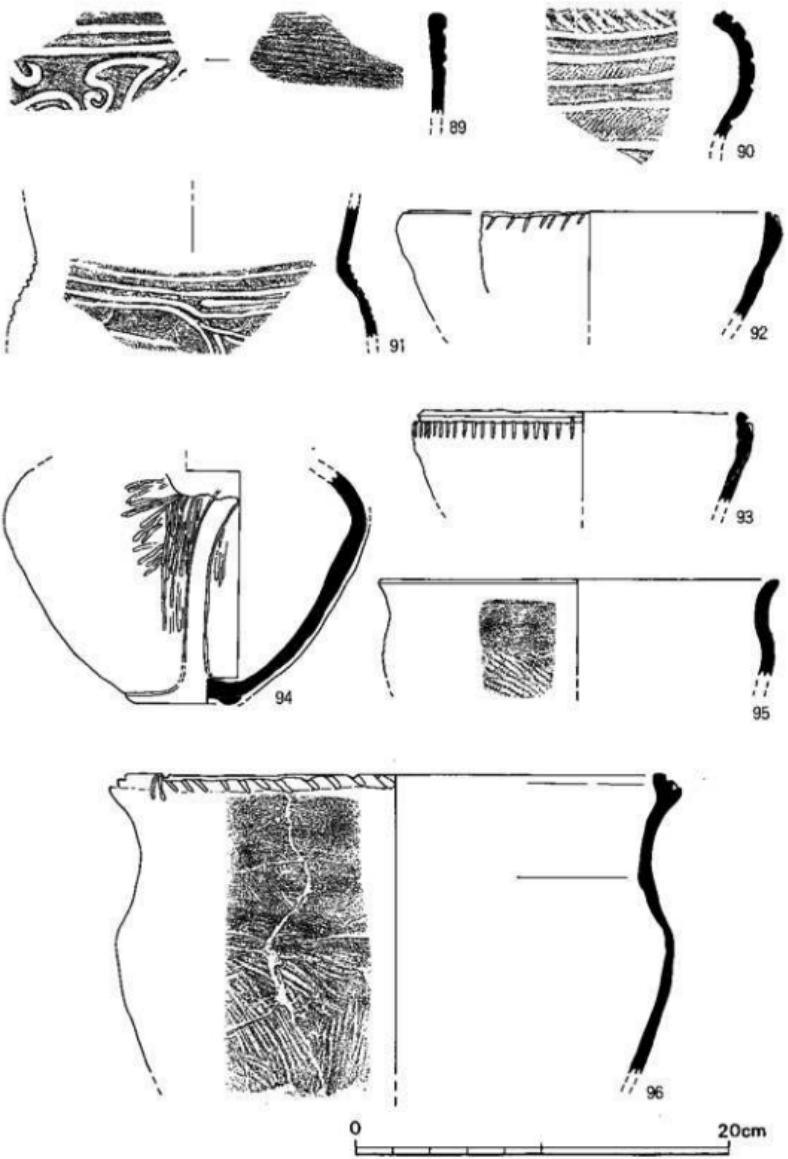
第20図 縄文後期土器 有文深鉢V-C類(67), 同V-E類(68・71),  
粗製深鉢I-A類(69・70)



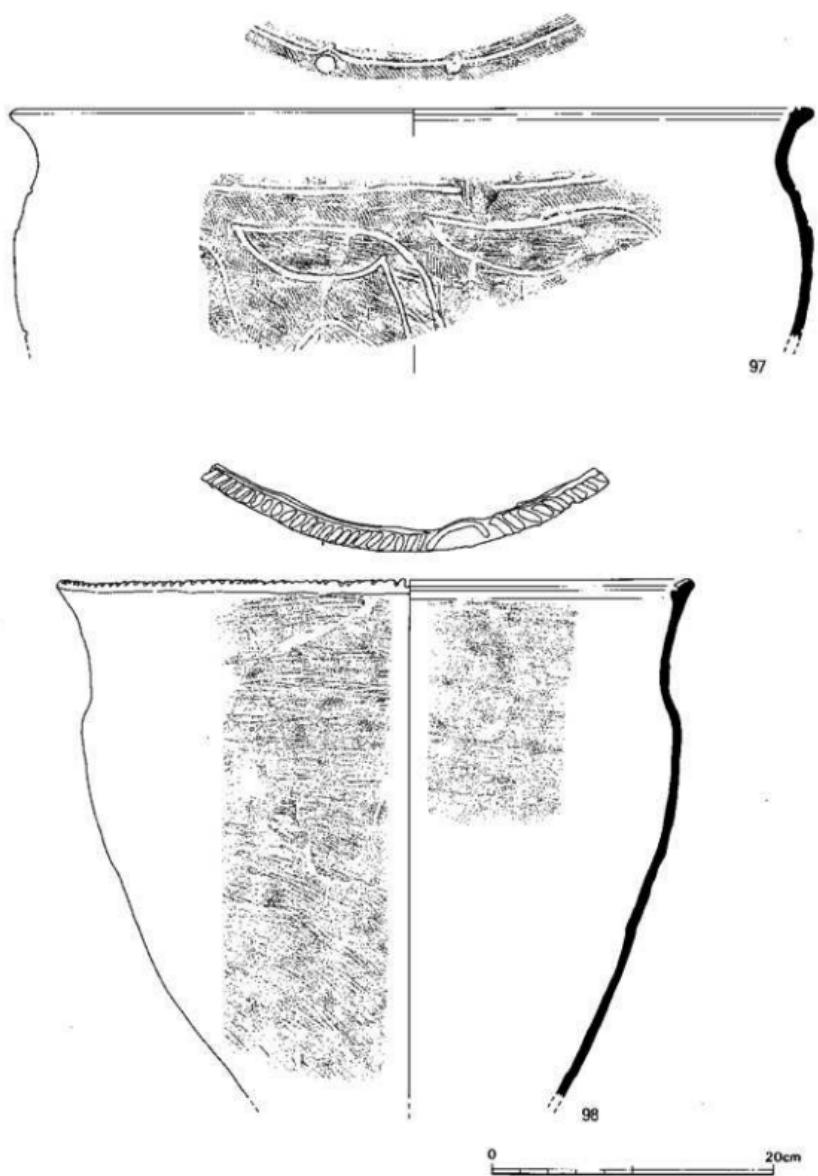
第21図 漢文後期土器 有文深鉢V-E類 (72~77), 同質-A類 (78)



第22図 繩文後期土器 有文深鉢Ⅱ-A類 (79・81), 同Ⅱ-C類 (80), 同Ⅳ類 (83・84),  
同XI-B類 (82・85・86), 同XII類 (88), 同XIV類 (87)



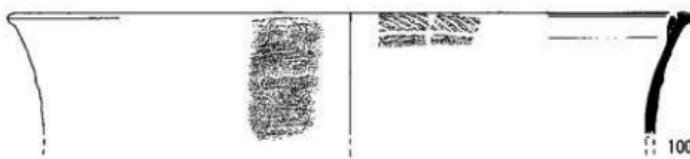
第23図 縄文後期土器 有文深鉢X-①類 (96), 同X-②類 (92・93), 同XI (90),  
同XIII (89・91), 同XIV (95), 同XV (94),



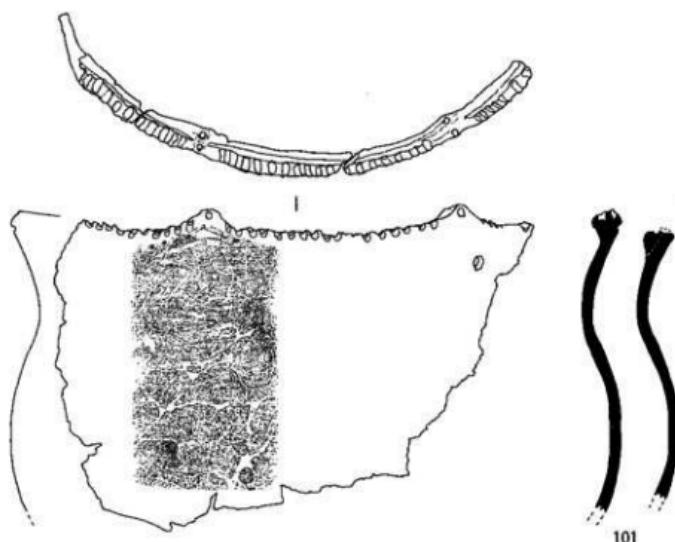
第24図 繩文後期土器 有文深鉢IV-B類 (97), 同V-E類 (98)



99



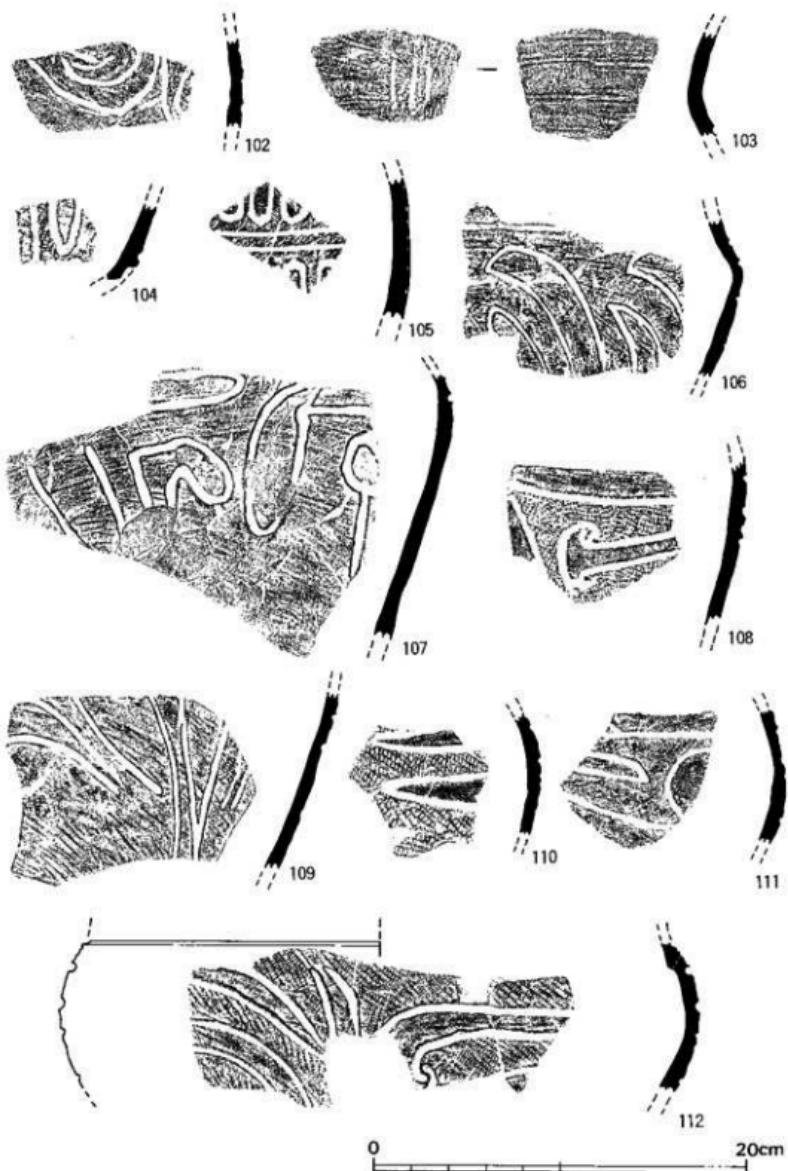
100



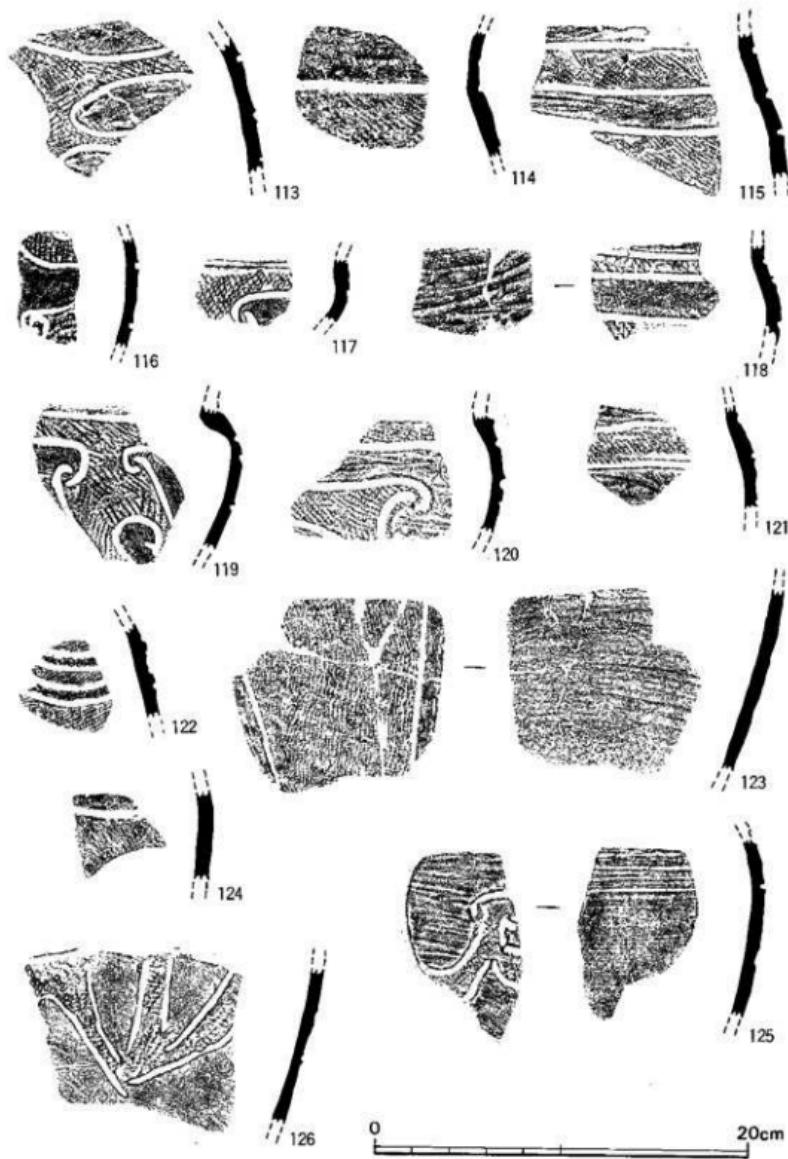
101



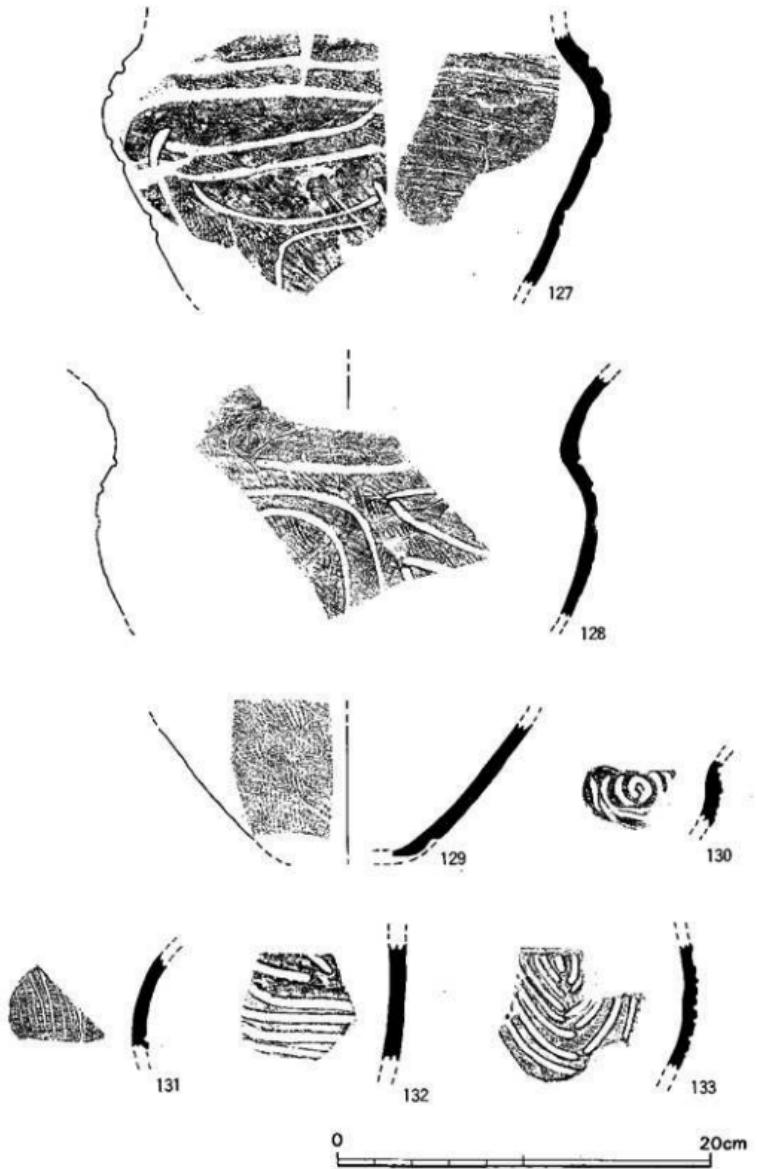
第25図 繩文後期土器 有文深鉢型-E類 (100・101), IX-A類 (99)



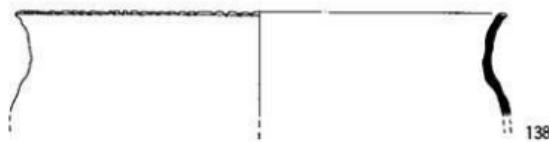
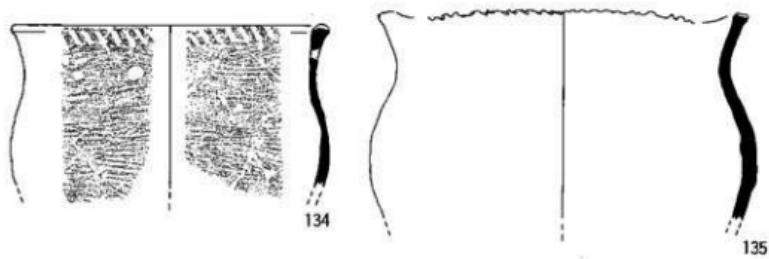
第26図 縄文後期土器 有文深鉢頭胴部A類 (102・103・106・107),  
同B類 (104・105・108~112)



第27図 桥文後期土器 有文深鉢頸部B類 (113~126)

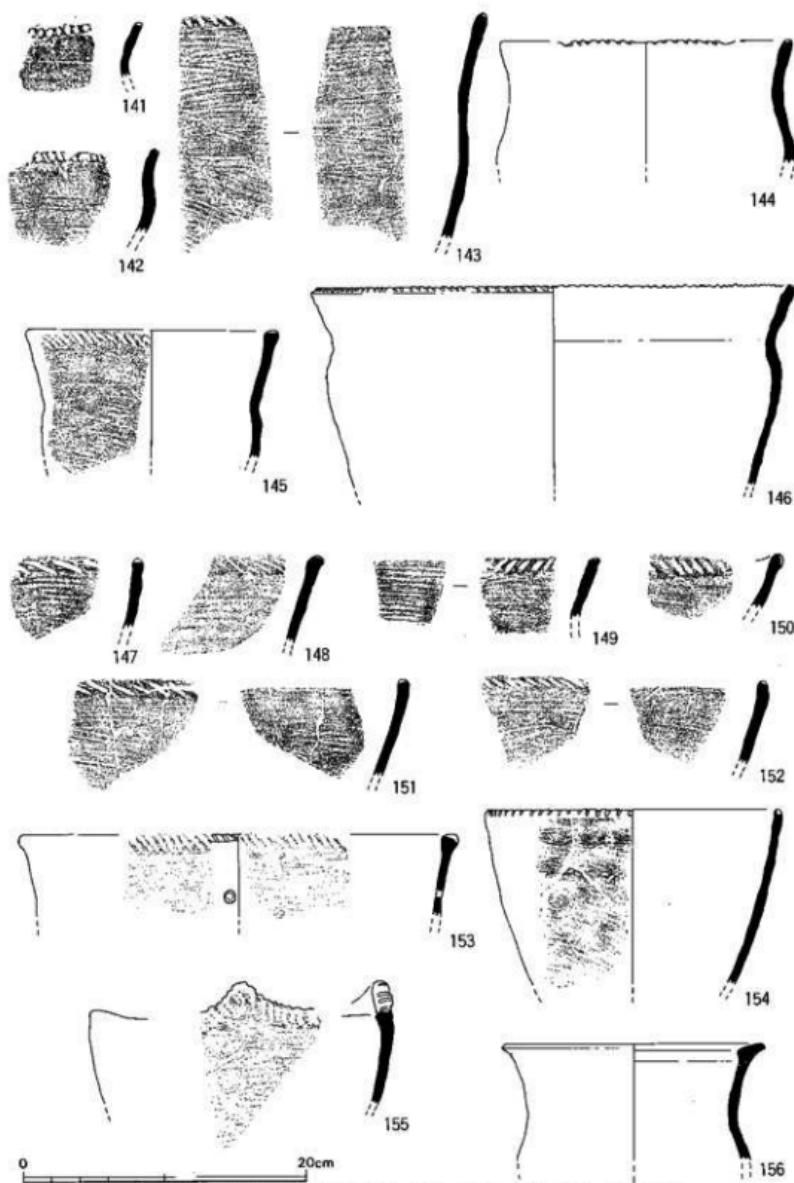


第28図 繩文後期土器 有文深鉢類胴部B類 (127・128), 同C類 (130~133),  
同D類 (129)

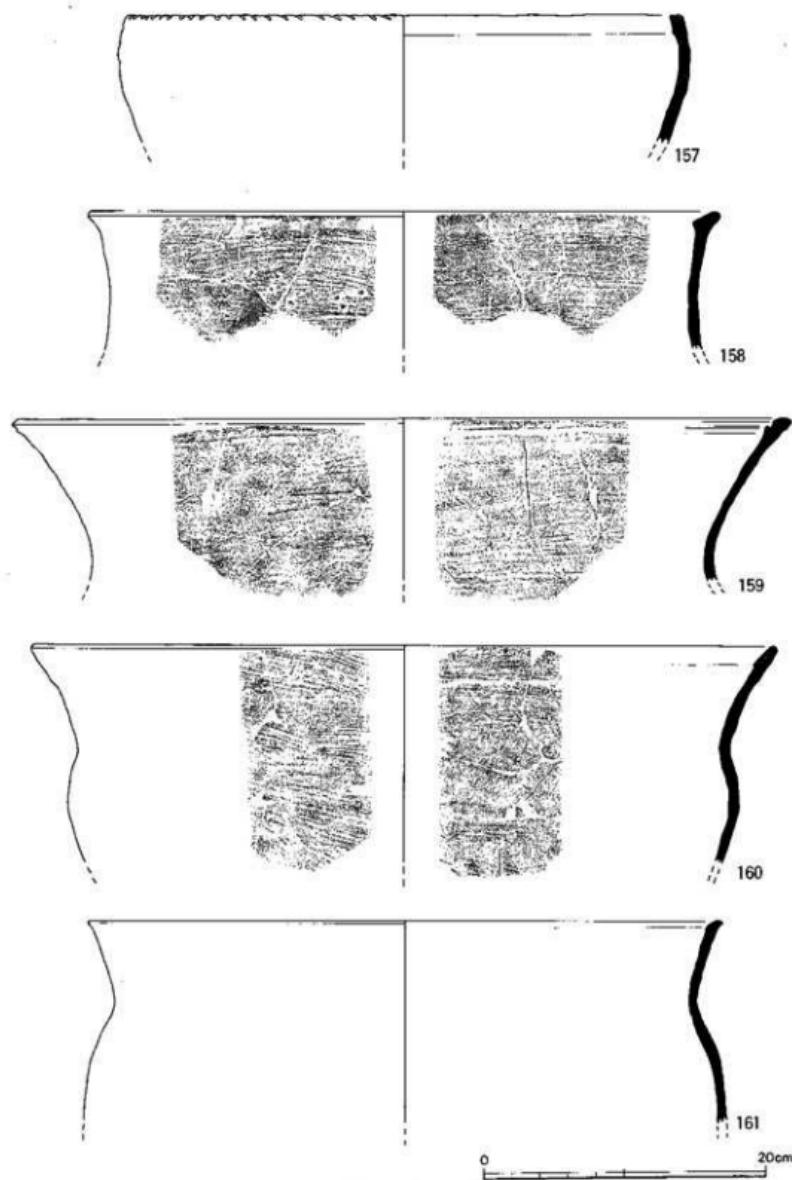


0 20cm

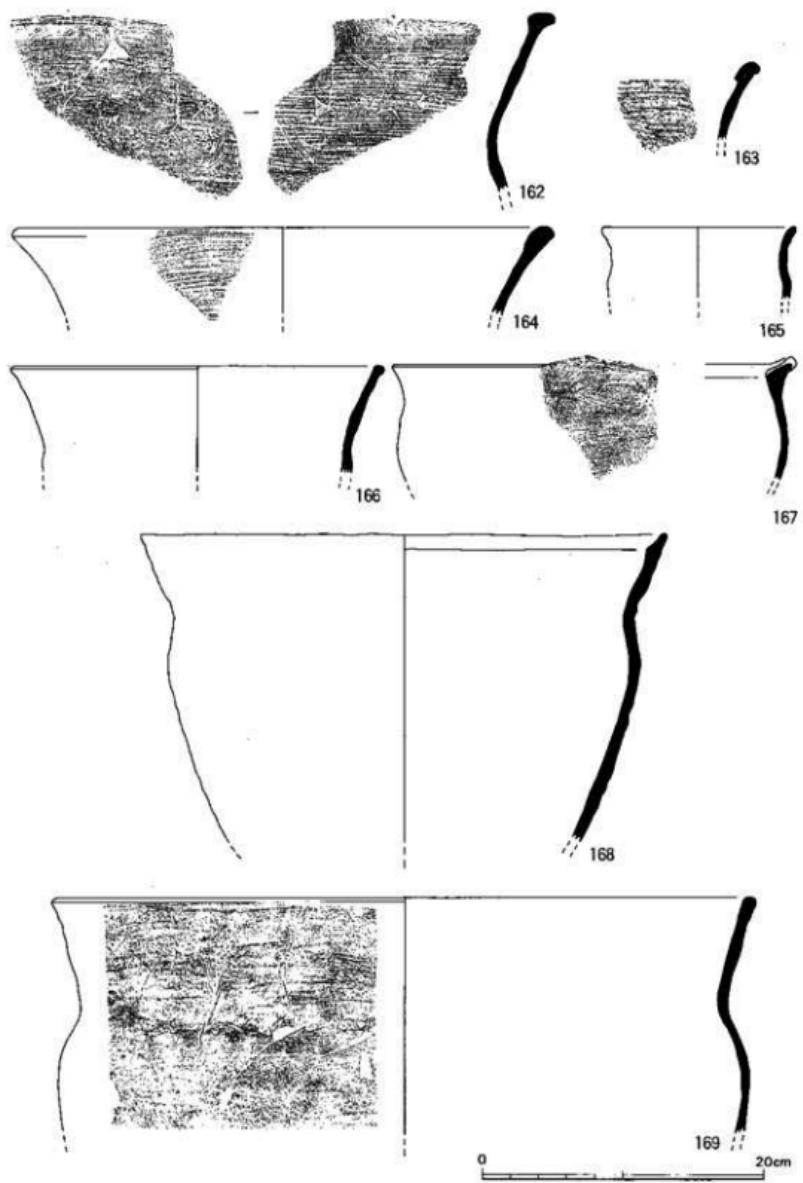
第29図 繩文後期土器 粗製深鉢I-A類(134~138), 同I-B類(139・140)



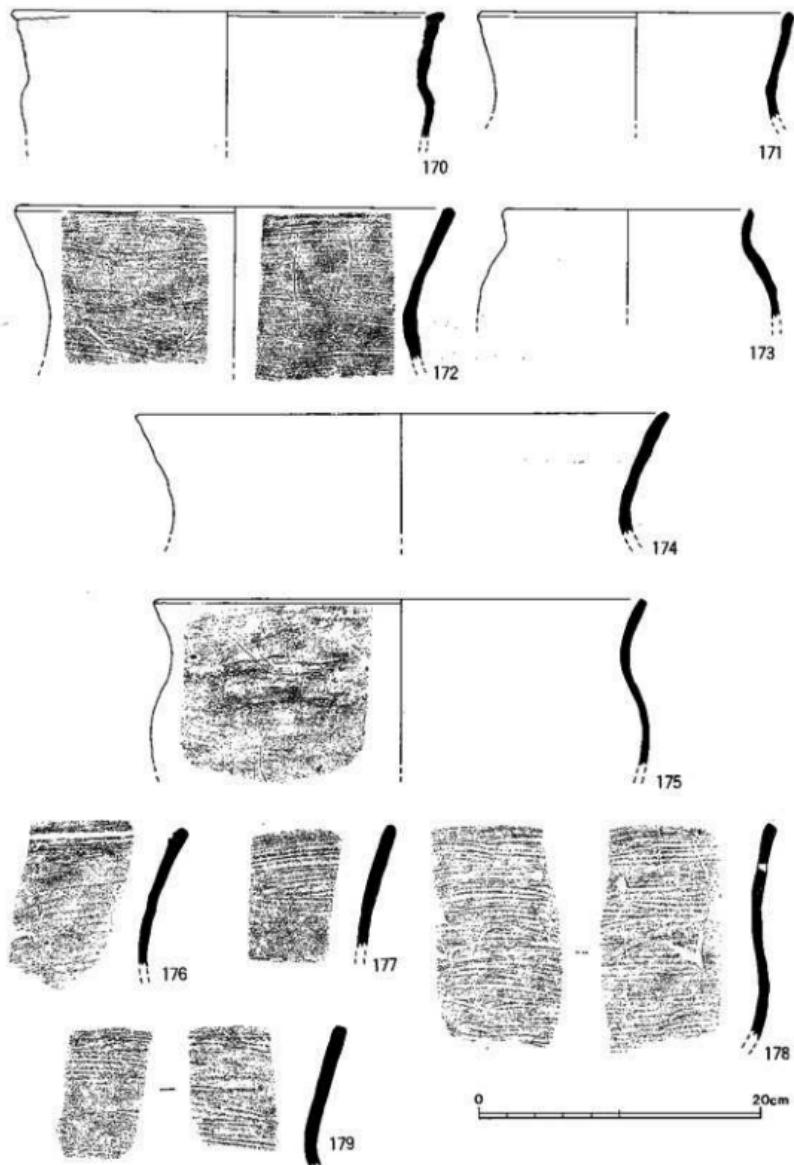
第30図 調文後期土器 粗製深鉢 I-A類 (141・146), 同 I-B類 (142~145・149),  
同 I-C類 (147・148・150~154), 同 I-D類 (155), 同 II-A-①類 (156)



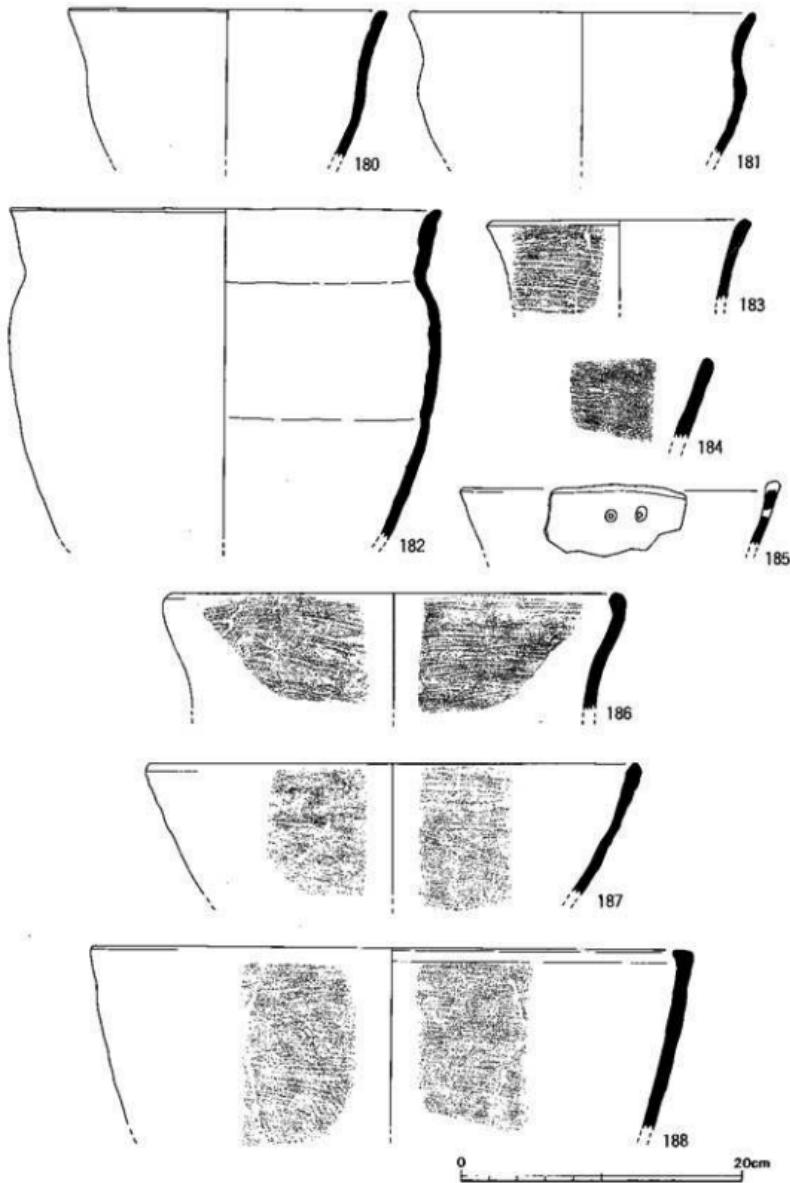
第31図 繩文後期土器 粗製深鉢I-D類 (157), 同II-A-①類 (158),  
同II-A-②類 (159・160), 同II-A-③類 (161)



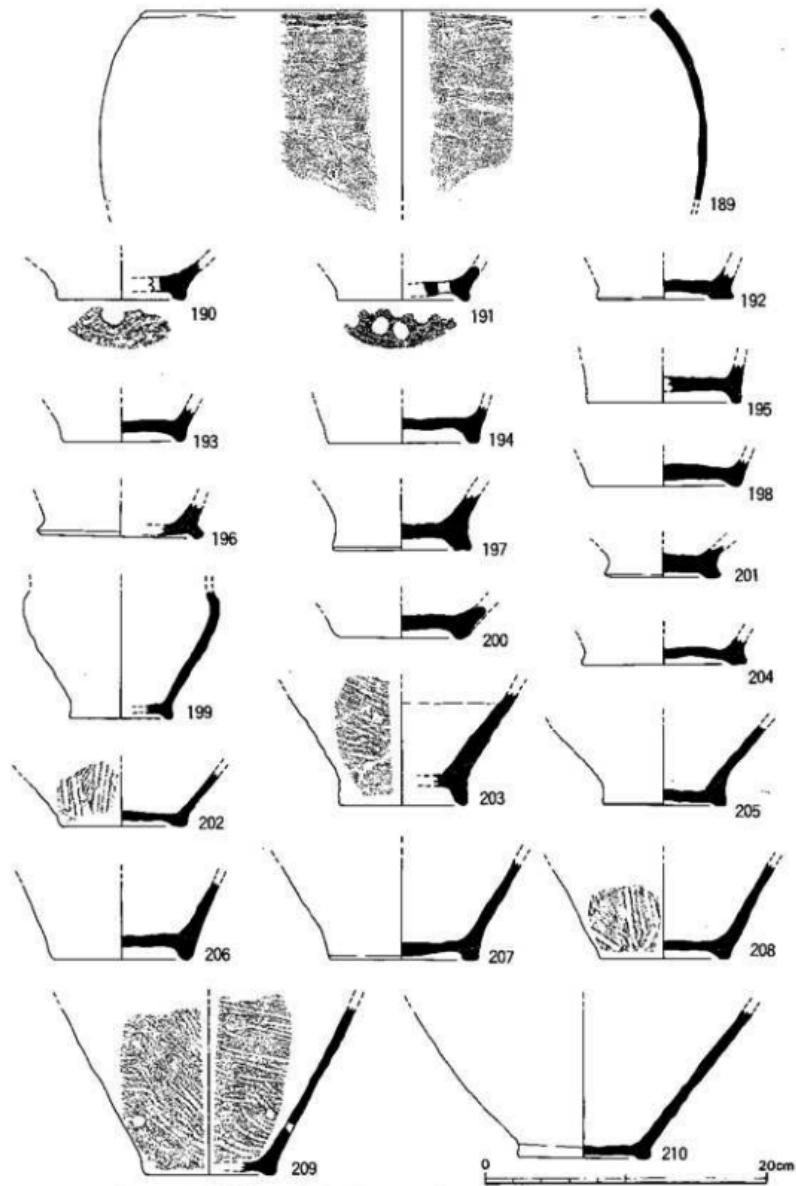
第32図 縄文後期土器 粗製深鉢II-A-①類 (162・167), 同II-A-②類 (163・164・168),  
同II-A-③類 (165・166・169)



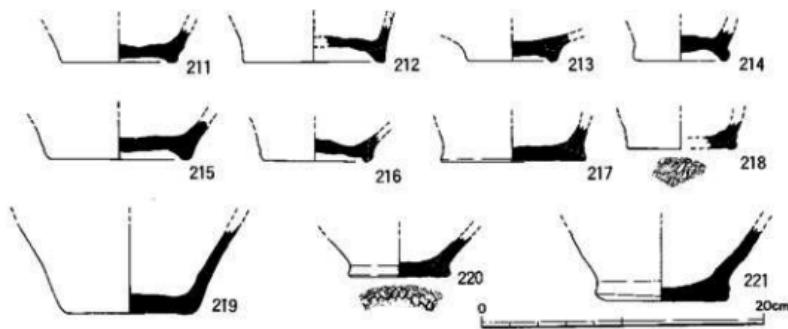
第33図 拠文後期土器 粗製深鉢II-A-①類 (170), 同II-A-②類 (176),  
同II-A-③類 (171~175), 同II-B-③類 (177~179).



第34図 繩文後期土器 粗製深鉢II-A-③類 (182), 同II-B-③類 (180・181・183),  
同II-C-①類 (188), 同II-C-③類 (184・185・187), 同II-D-③類 (186)



第35図 繩文後期土器 粗製深鉢II-D-③類 (189), 深鉢底部 (190~210)



第36図 橋文後期土器 深鉢底部 (211~221)

I - B類 (第29図-139・140, 第30図-142~145・149)

I - A類に比して外反の角度が弱いタイプである。刻日は短沈線状をなす例も多い。

I - C類 (第30図-147・148, 150~154)

胴部から口縁部に向かって直線的に立ち上がるタイプである。148・153は端部が肥厚している。本類も短沈線状の刻目が多い。

I - D類 (第30図-155, 第31図-157)

口縁部が内湾するタイプである。155は波状口縁を有し、157は内面が肥厚している。

以上I類の器面調整は、内外面荒いナデや巻貝による条痕が主に用いられている。

#### ② 粗製深鉢Ⅱ類

口縁に刻日のないものをⅡ類とする。Ⅰ類と同様に口縁部の型態によってA~Dに分類することが可能であり、更に口縁端の型態によって①~④に細分することができる。

II - A - ①類 (第30図-156, 第31図-158, 第32図-162・167, 第33図-170)

口縁部が強く外反するタイプであり、口縁端部が内・外面に幅広く拡張されるタイプである。167は波状口縁をなし波頂部の拡張が特に著しい。

II - A - ②類 (第31図-159・160, 第32図-163・164・168, 第33図-176)

口縁部内面に断面カマボコ状の粘土帯を貼付するタイプである。159・176は内面肥厚部に1本の沈線を配している。168は三角形状の粘土帯を貼付している。

II - A - ③類 (第31図-161, 第32図-165・166・169, 第33図-171~175, 第34図-182)

口縁端部が肥厚、拡張などなせずにそのまま終るタイプで、最も多くを占める。

II - B - ③類 (第33図-177~179, 第34図-180・181・183)

II - C - ①類 (第34図-188)

II - C - ③類 (第34図-184・185・187)

II - D - ③類 (第34図-186, 第35図-189)

以上Ⅱ類の器面調整は、(165・176・189) の内外面及び (187) の内面にハケ状原体による調整が認められるが、他は巻貝条痕及び荒いナデ調整である。

#### (4) 深鉢底部 (第35図-190~210, 第36図-211~221)

有文・粗製深鉢を一括した。190~216が上げ底で、217~221が平底である。図示し得なかつたものも含めて上げ底が圧倒的に多い。190・191は1cm内外の円孔を焼成前に多数穿っている。191・200は粘土接合部で欠損しており縫口縁の形状を観察することができる。平底底部218・220の外底にはアンペラの圧痕が見られる。

#### (5) 有文浅鉢

##### ① 有文浅鉢Ⅰ類

2本沈線を基調とする磨り消し繩文を有するタイプで、砂粒を含まない精緻な胎土を用いた外面丁寧に研磨され赤彩の施されるものが多い。口縁部が内湾する①類と外反する②類に分けることができる。

###### I - ①類 (第37図-222・224~226)

222は、直線的に立ち上がり口縁部が強く内湾、内面に段部をもつ。波状口縁を有し波頂部に文様が集約され、波頂部下に径1.4cmの円孔が穿たれている。224も波状口縁を有し波頂部に文様が集約されている。口縁部は一旦外反した後、「く」字状に内傾する。口縁部外面に複雑な意匠の区画文を描き、区画外に繩文が施される。225・226は胴部片であるがI-A類の口縁を有するものと考えられる。225は入り組みが見られ、226は部分的に3本沈線が認められる。222・224は赤彩を施し、繩文の撚りはすべてR Lである。

###### I - ②類 (第37図-223)

ボール状の器形をなし口縁が緩く外反、内面に段を有す。口縁部内・外面に方形・楕円の区画文を描き区画外に繩文を施す。段の下に径1.2cmの円孔を焼成前に穿っている。I-①類に比べて研磨が弱く、沈線間にドテを残す。内外面赤彩が施されている。

##### ② 有文浅鉢Ⅱ類 (第37図-227・228)

上胴部が強く内湾し口縁部が短く立ち上がるタイプである。外面全体に渦巻文など幾何学的な沈線文を駆使している。以下に述べるⅢ類に比べて沈線幅が太く5mm前後を測る。両者共に赤彩が施される。

##### ③ 有文浅鉢Ⅲ類

口縁部が強く内湾して終るタイプで、有文浅鉢の主体を占める。胴部から口縁部にかけて幾何学的な沈線文を駆使している。赤彩の施されるものも多い。施文手法が沈線のみのもの(A類)と繩文を施すもの(B類)及び口縁部付近にのみ沈線を施すもの(C類)に分けることができる。

###### III - A類 (第37図-229~231, 第38図-232~242, 244~248, 第39図-249~268, 271, 第40図-272・276)

文様意匠のすべてを把むことはできないが、総じて胴部外面の4箇所に等間隔で渦文あるいは重圓文を配して主文様とし、その主文様と主文様の間を長方形の区画文（229・230・234・238・240・241・245・248・265・266・271）や三角形の区画文（233・244・276）でつないでいるものが多い。主文様が渦巻文の場合、時計まわりに展開する例が多く、反時計まわりに展開するのは（240）のみである。271は中心が入り組みをなしているが沈線は両者共に時計まわりの展開を示している。主文様間を区画文ではなく沈線でつなぐもの（237）や入り組み文を描くもの（231）も存在している。また本類の多くは（244）で明らかのように、口縁直下に1本と文様帶下端に1本の沈線を配することが多い。その場合これらの沈線は器面を一周するのではなく主文様部の上と下で切れている。244の下端沈線は両端が鉤状に屈曲し、272の下端沈線の端部は刺突が施されている。本類の231・239～241・246・247・253・258・261～263・266は赤彩が施されている。

#### III-B類（第38図-243、第39図-269・270）

243は口縁部、269・270は胴部片である。243は緩い波状口縁を有し外面に3本沈線の繩文帯が見られる。269は、縱・横・弧状に沈線を描き、下地に部分的に繩文が見られる。270は繩文地に多条の沈線を垂下させる。243・270はR L、269はL Rである。270は赤彩を施す。

#### III-C類（第40図-273・274・277）

口縁部付近に少条の沈線を施すタイプである。273・274は2本の沈線を配し、溝内刺穴を施している。両者は同一個体の可能性がある。277は1本の沈線を配し口縁部が僅かに肥厚している。

#### ④ 有文浅鉢IV類

無文の口頭部を有するタイプで、胴部文様の差異によってA～C類に分けることができる。

#### IV-A類（第40図-280）

胴部文様の意匠はIII-A類と同様であるが沈線の幅が広い。時計まわりに展開する渦巻文を主文様とし等間隔に4箇所配していると考えられる。主文様間にには方形に展開する渦巻文が2組配されるが、主文様と同様に時計まわりに展開している。文様帶の上端には埠縁が配されるが器面を一周せず入り組み状につながっている。また埠縁端部にはIII-A類でも認められた刺突が施されている。III-A類に比べると胎土に粒子の粗い砂粒を多く含み、器面の研磨も少し丁寧さを欠いている。

#### IV-B類（第40図-278・279）

胴部文様が少条の沈線か区画文を配するタイプである。278は、口縁部が外方に拡張され上面に刺突文を配する。上胴部に2本まで沈線を認めることができる。下胴部文様の展開が不明であるがIV-A類となる可能性もある。279は、粘土紐接合部で欠損しており丸味を帯びた擬口縁を見ることができる。胴部には上・下2段の長辺円形区画文が施されている。

#### IV-C類（第41図-281）

頸胸部間の堀線以下に R L の繩文を全面に施すタイプである。

⑤ 有文浅鉢V類 (第41図-282)

上胴部で強く内傾した後、口縁が短く外反。上胴部及び頸部外面に幅5mmの太い沈線で区画文を配し、区画文間に横円・弧文を配している。上胴部から口縁部にかけて R L の繩文を施している。施文順序は明らかに繩文→沈線→磨研である。内・外面黒色磨研風で胎土も他の有文浅鉢とは異なり、有文深鉢Ⅴ類(94)に似ている。明らかに搬入品である。

⑥ 有文浅鉢VI類 (第41図-283)

器形は有文深鉢Ⅲ類と同じであるが、胎土・色調・文様意匠が全く異なる。口縁部に1本の沈線を横走させ、胴部は三角形状の区画内にL R の繩文を残し、他の部位は磨り消している。赤彩が施されている。胎土・色調共に有文深鉢Ⅴ類(94)と同じである。搬入品である。

⑦ 有文浅鉢VII類 (第41図-285)

口縁部が強く内湾し端部に2条の沈線を配するが、内側の沈線は太い刺突によって切れている。外側の沈線にはLの短沈線が施される。

⑧ 有文浅鉢VIII類 (第40図-275)

皿状を呈し口縁内面を肥厚させ2条の沈線を巡らす。

⑨ 有文浅鉢IX類 (第41図-284)

直線的に外方に立ち上がる体部から口縁部が「く」字状に屈曲して立ち上がり、端部は外反、屈曲部外面には刻目が施される。

(6) 無文浅鉢

① 無文浅鉢I類 (第42図-289)

ボル状の器形を有するタイプである。

② 無文浅鉢II類 (第42図-290~293)

口縁部が強く内湾するタイプである。2個1対の小孔を焼成前に穿つものが多い。290は擬口縁で欠損している。291は外面赤彩がなされる。内外面共に丁寧な磨研がなされている。

③ 無文浅鉢III類 (第43図-294・295)

口縁部が内側に強く屈曲するタイプで、外面が肥厚する①類(294)と肥厚しない②類(295)に分けることができる。器面は内外面共に丁寧な磨研がなされている。

④ 無文浅鉢IV類 (第43図-296~302, 第44図-303~309)

皿状の器形をなすタイプである。口縁部が肥厚する①類と肥厚しない②類があり、①類は更に肥厚幅の狭い①-④類と肥厚幅の広い①-⑤類に分けることができる。総じて器面調整は他の類に比べて丁寧さを欠き柔軟が残るものも多い。

IV-①-④類 (第43図-299・300・302, 第44図-303・306・307)

303は、山形状の突起部を有し次起部は内面に強く肥厚、突起中央部に焼成前の円孔を穿つ。

IV-①-⑤類 (第43図-297, 第44図-304・305・308・309)

297は口縁部が僅かに外反し、焼成前に小孔を穿つ。

IV-②類 (第43図-296・298・301)

⑤ 無文浅鉢V類 (第44図-310, 第45図-311・312)

上胴部で内側に屈曲し口縁部が外反するタイプである。311・312は波状口縁を有し波頂部が著しく肥厚する。312は完形に近く4個所に波頂部がある。両者共に頸部に小孔を有するが、311は焼成前、312は焼成後に穿っている。312は外面赤彩を施す。

⑥ 無文浅鉢VI類 (第45図-313)

壺状の器形を有するが一応木類に入れた。内傾して立ち上がる頸部から口縁が外反、口縁下に焼成後の円孔がある。外面は丁寧に磨研されるが内面には条痕が残る。

(7) 浅鉢底部 (第45図-314~324)

上げ底 (316・319) と上げ底風 (314・315・317・318・320) と平底 (321~324) が見られる。外底まで丁寧に磨研されているものが多い。323・324の底部径は他のものに比べてずば抜けて大きい。

(8) 注口土器 (第46図-325・326)

共に注口部のみの破片である。325は長さ5cm、外側の直径2.8cm、326は長さ4cm、外側の直径2.5cmを測り、1.3cmと1cmの孔を穿っている。326は、体部との接合部から欠損し基部近くに沈線文を配している。赤彩が施されている。

(9) 双耳壺 (第46図-327・328)

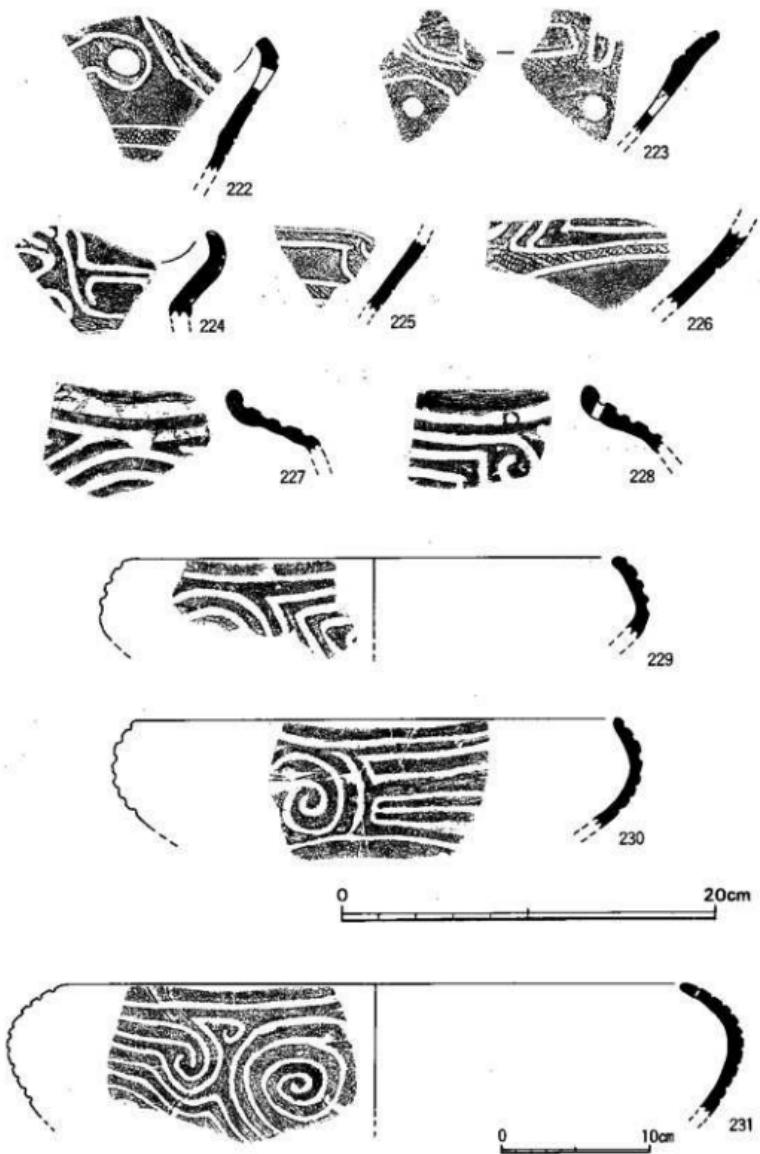
共に小破片であり全体の器形は不明である。327は耳部分の正面に径1.5cmの太い刺突を配し外縁を沈線で囲繞、そこから2本の沈線が横走する。孔の直径は0.8~1cm、長さ2.4cmを測る。328は、体部の接合部から欠損している。耳部の正面形は三角形を呈し端部が反り上がっている。中央に端部が溝巻状を呈するS字の沈線文を配し、両脇にも鉤状・渦巻の沈線文を施している。円孔は径8mm、長さ3cmを測る。

(10) 器種不明土器及びその他 (第41図-286~288, 第46図-329)

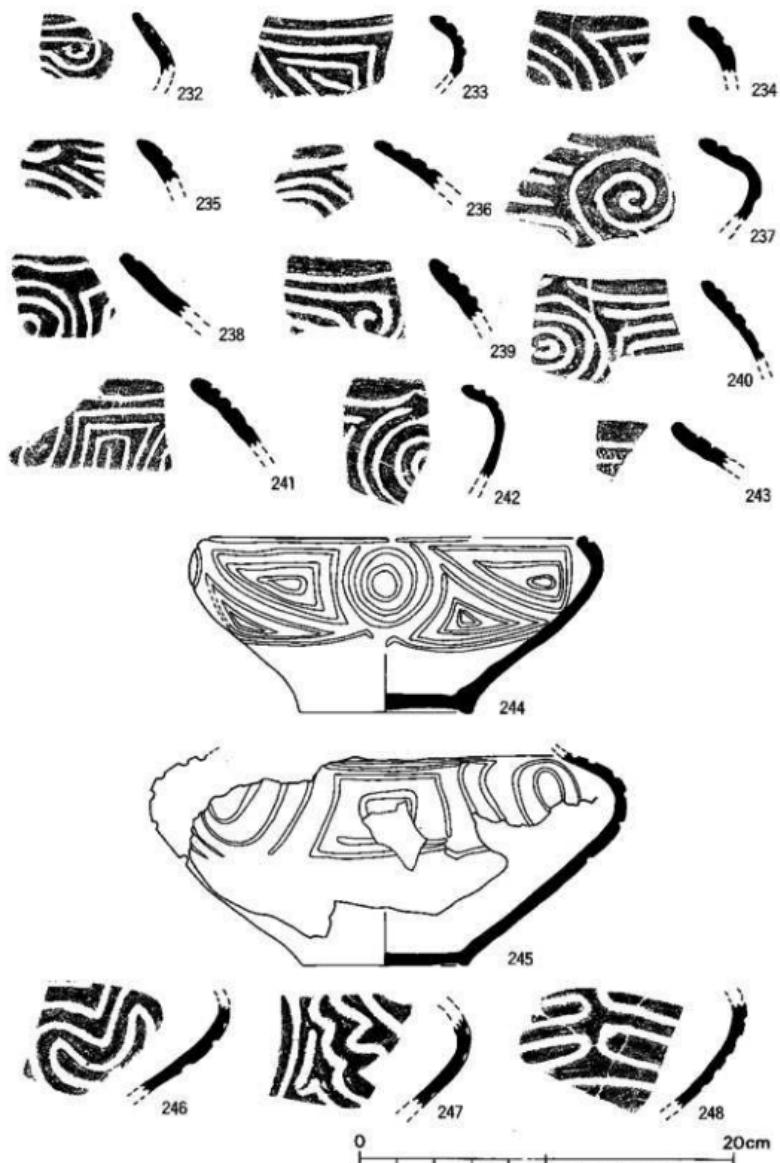
筒状把手の可能性もあるが器種を断定することができない。幅広い沈線で長指円形状の区画文を配し、その脇に縱方向の弧文を2本まで認める。弧線の上端部と内側に刺突を施している。外面赤彩である。286~288は、有文深鉢か浅鉢の胴部文様であるがここで触ることにする。286は竹管による刺突文、287は2本沈線の縄文帯が屈曲部に施されている。288は多条の沈線が横走している。

(11) 各型式と出土層位との関係

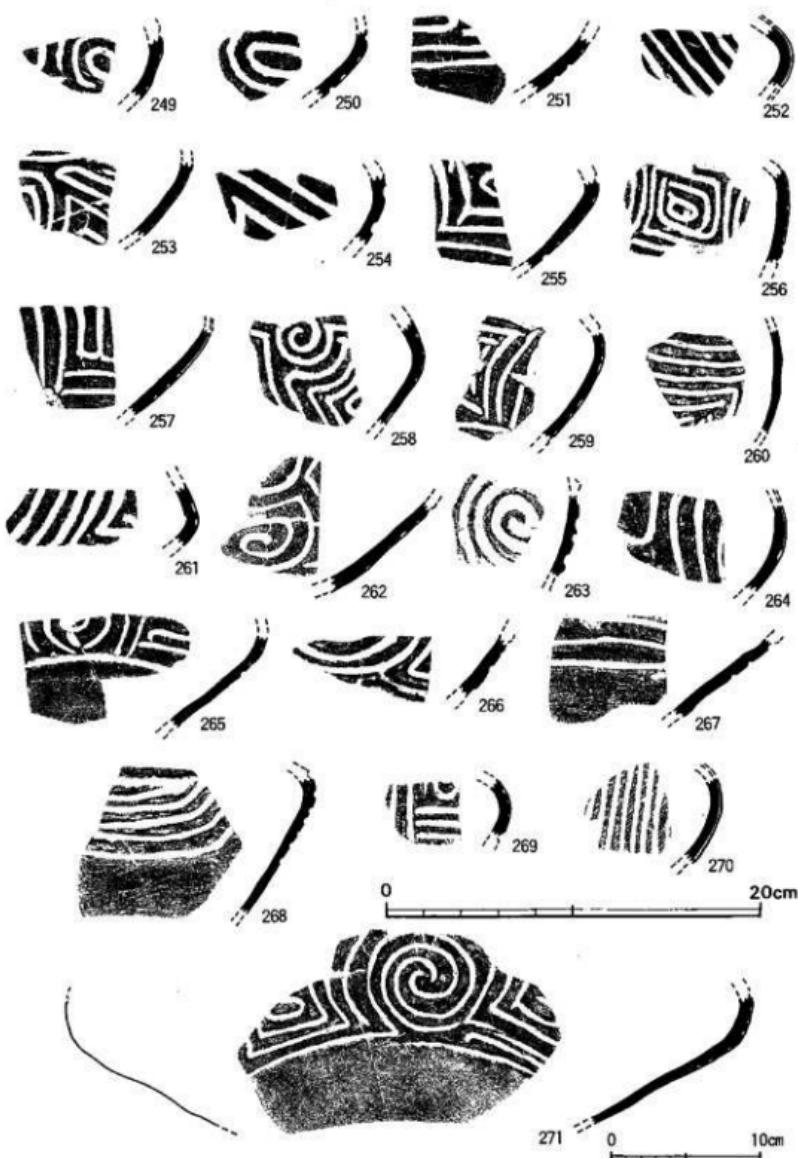
以上各器種別に型式分類を行ったが、ここで各型式と出土状況との関連について見ておこう。すでに前章において触れたように土器の多くは溝状の落ち込み（人口的に擦られたものか自然の凹みかは判断しかねる）から出土しており、層序と土器の出土位置との関係についてはセクションベルト及びその付近でしか明確には把握できなかった。従って観察表記載の出土層位



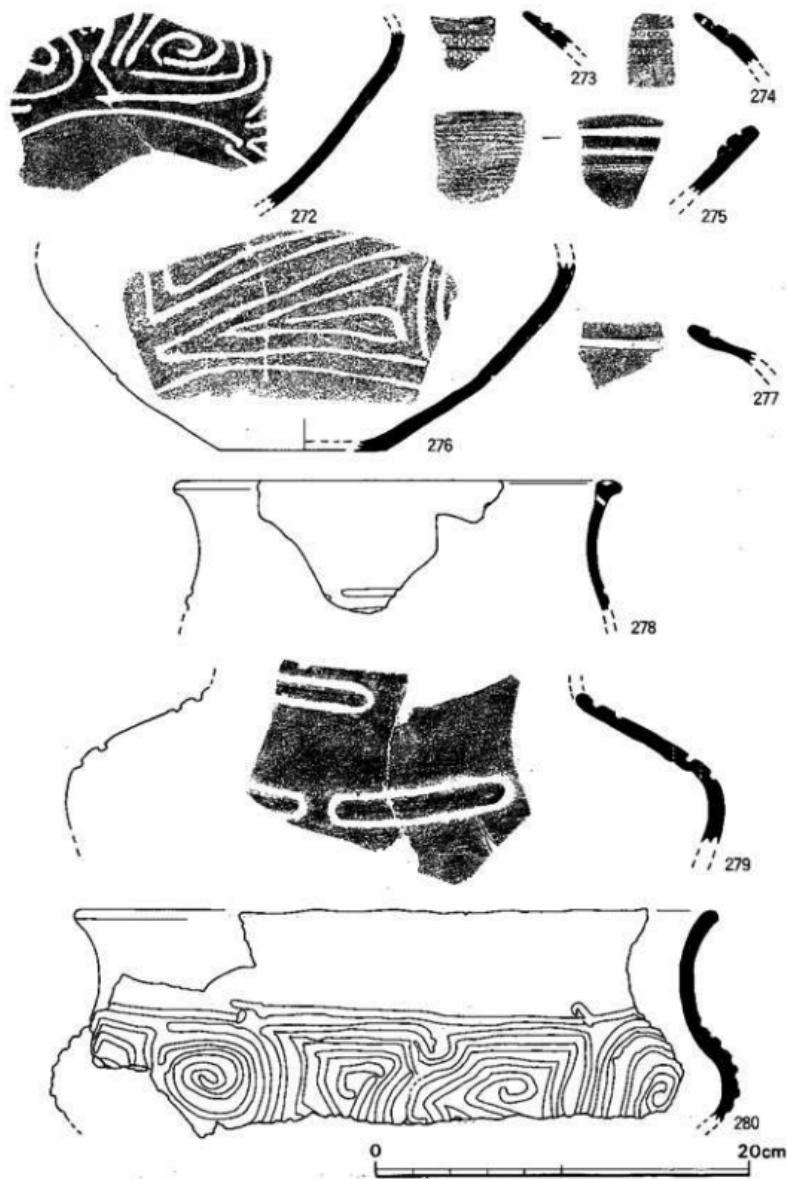
第37図 裝文後期土器 有文浅鉢 I-①類 (222・224~226), 同 I-②類 (223),  
同 II類 (227・228), 同 III-A類 (229・230・231)



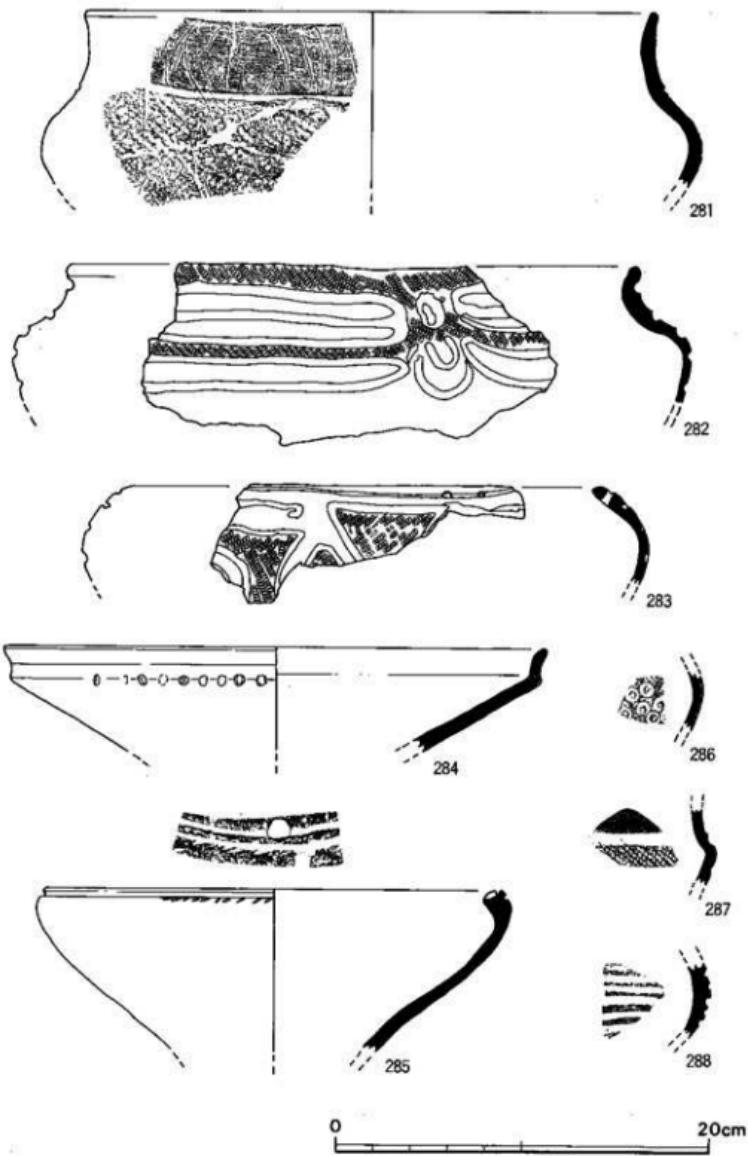
第38図 繩文後期土器 有文浅鉢Ⅲ-A類 (232~242・244~248), 同Ⅲ-B類 (243)



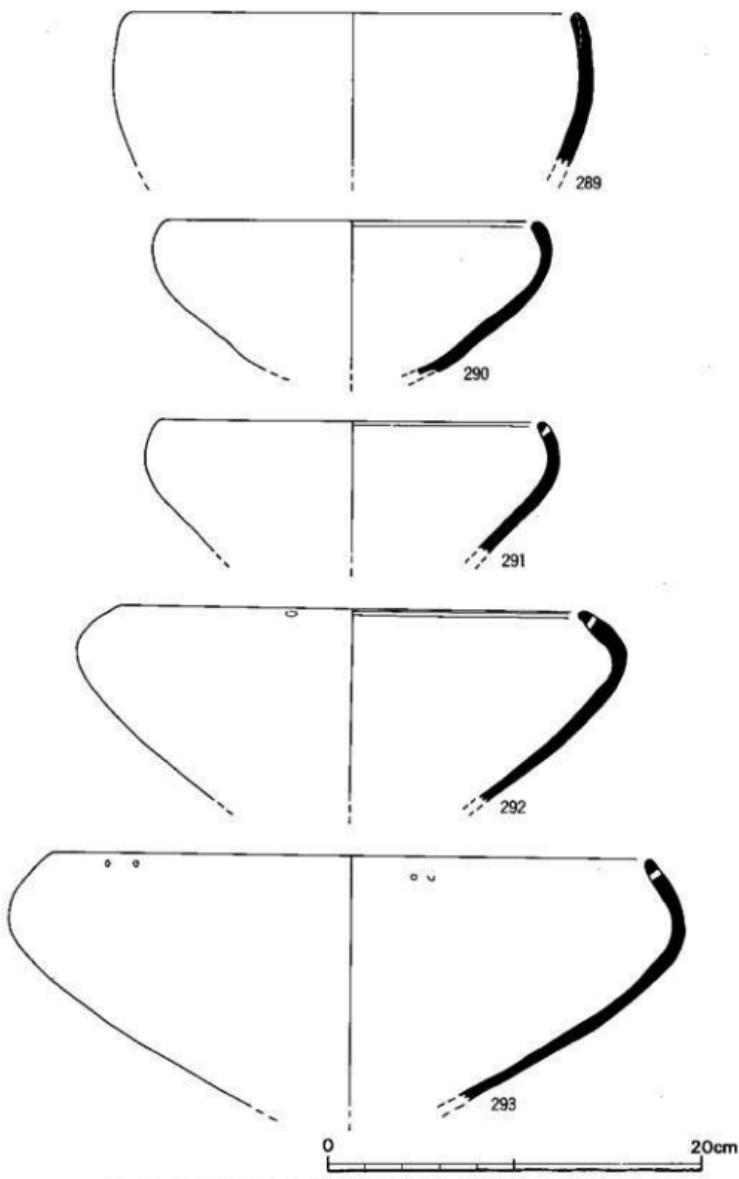
第39図 繩文後期土器 有文浅鉢Ⅲ—A類 (249~268・271), 同Ⅲ—B類 (269・270)



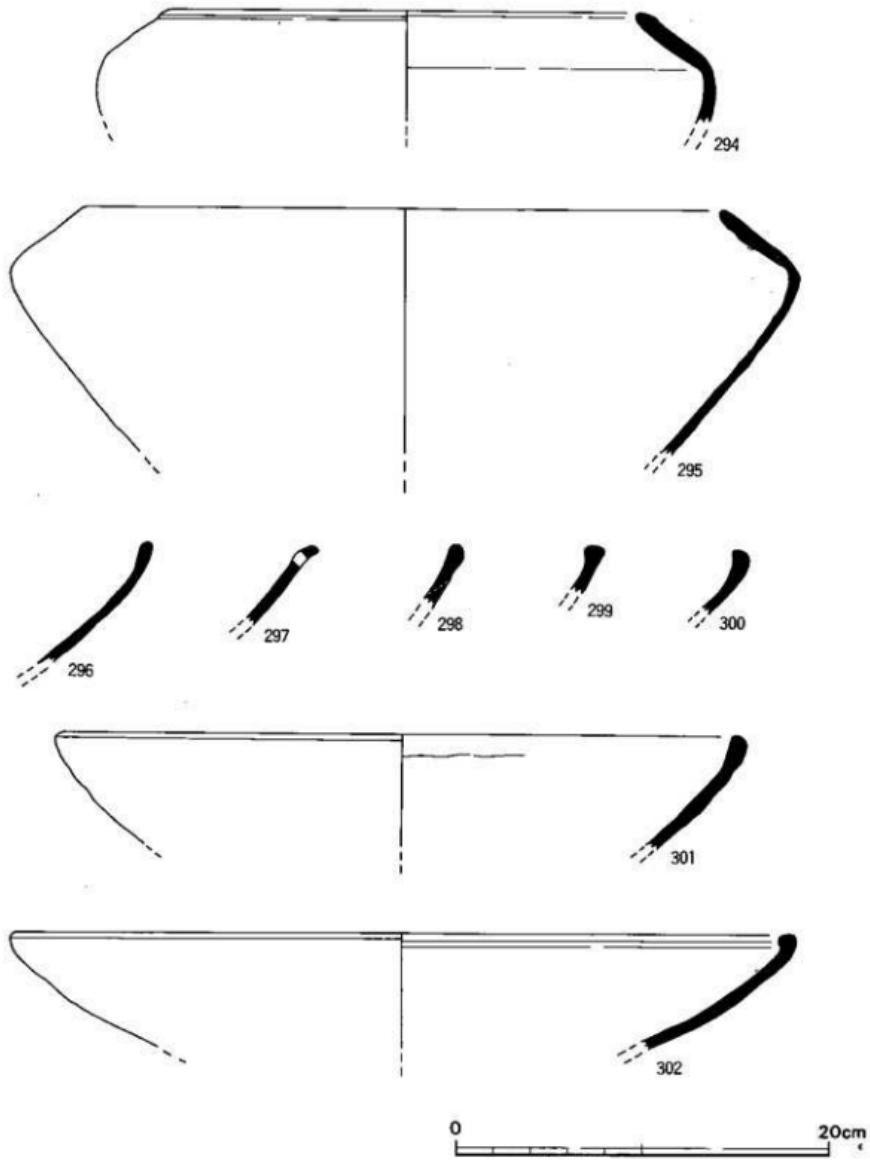
第40図 繩文後期土器 有文浅鉢Ⅲ—A類 (272・276), 同Ⅲ—C類 (273・274・277),  
同Ⅳ—A類 (280), 同Ⅳ—B類 (278・279), 同獨類 (275)



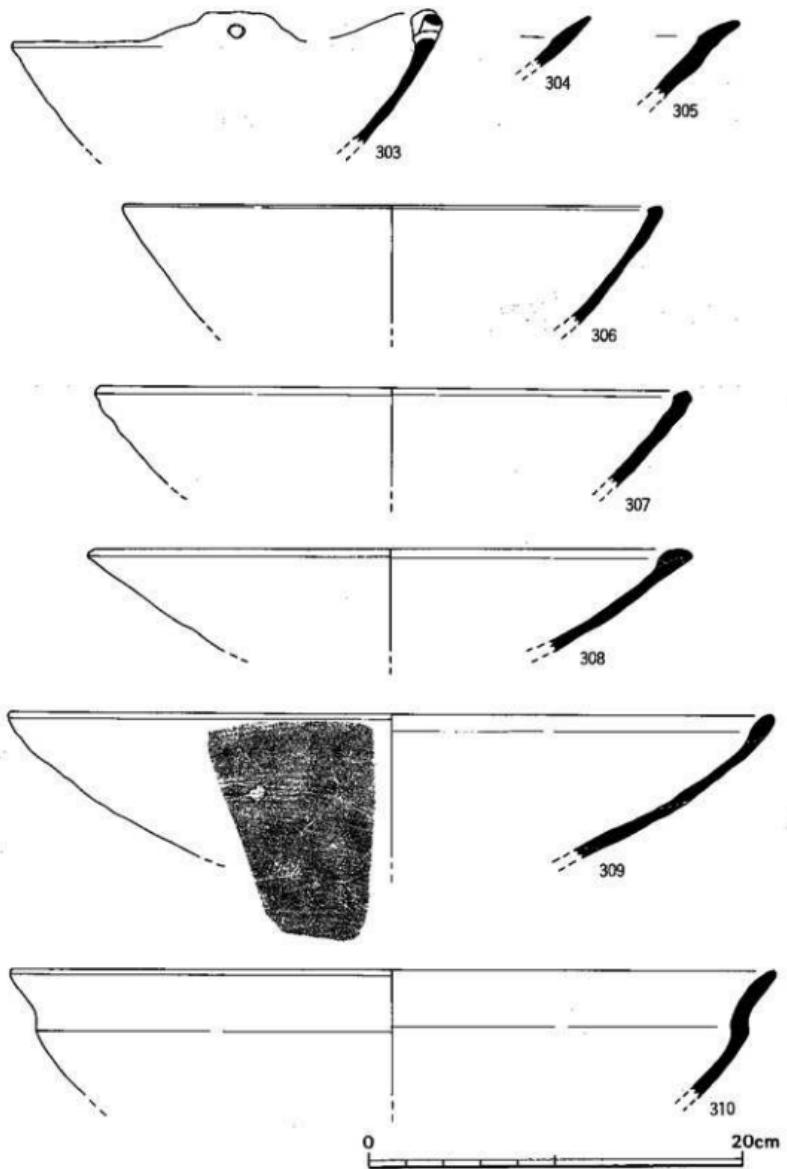
第41図 繩文後期土器 有文淺鉢IV—C類 (281), 同V類 (282), 同VI類 (283),  
同IX類 (284), 同VII類 (285), 同その他 (286~288)



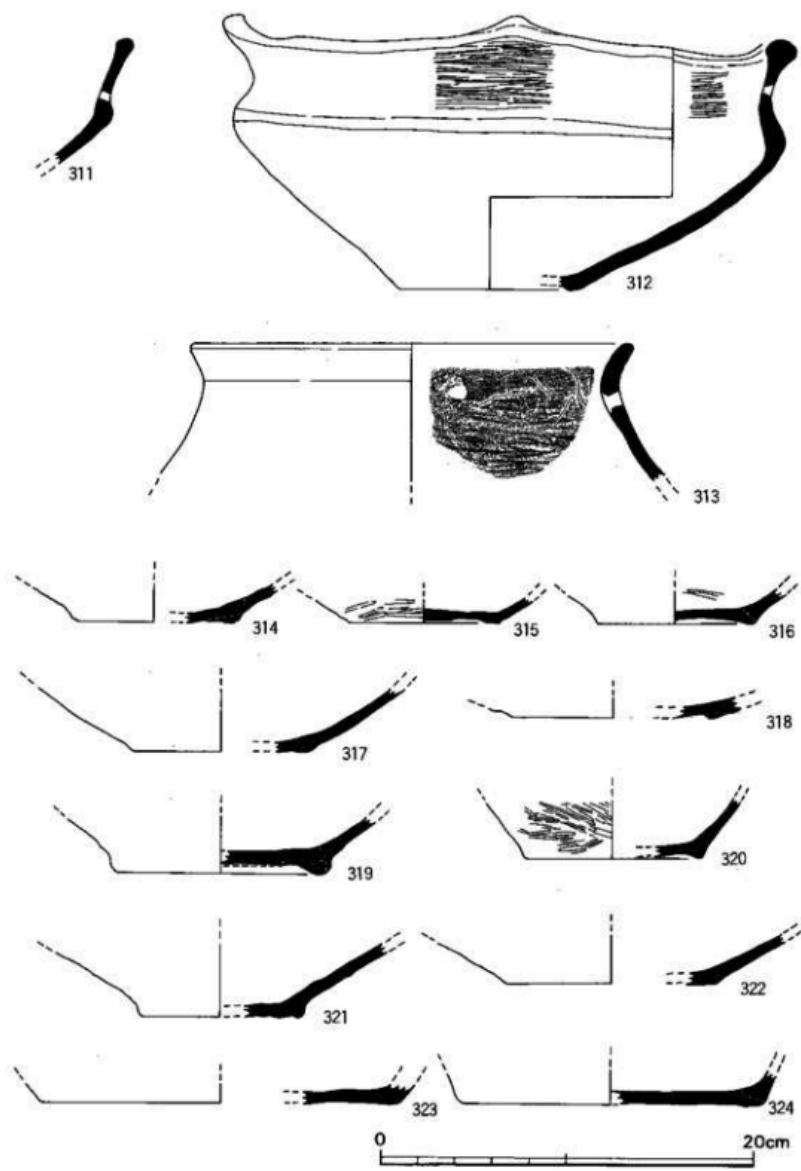
第42図 舟文後期土器 無文浅鉢Ⅰ類 (289), 同Ⅱ類 (290~293)



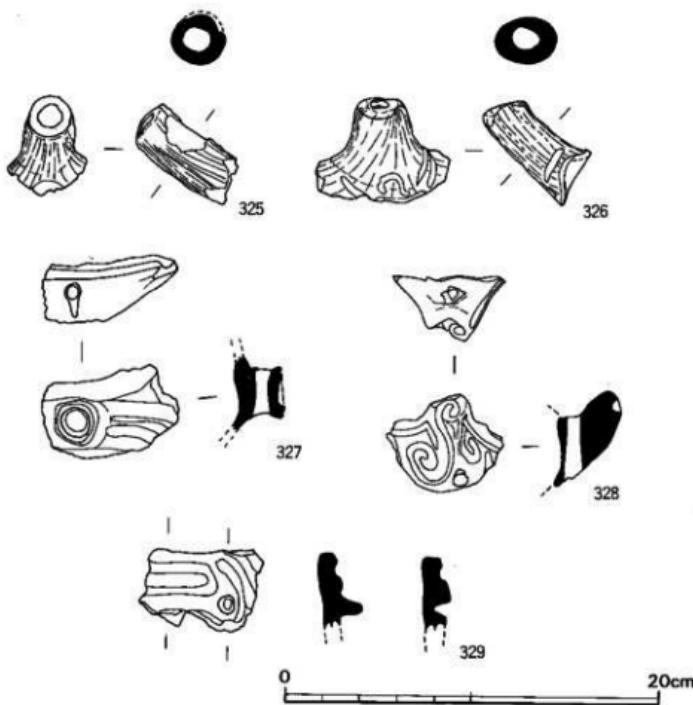
第43図 繩文後期土器 無文浅鉢III-①類 (294), 同III-②類 (295), 同IV-①-⑤類 (299・300・302),  
同IV-①-⑥類 (297), 同IV-②類 (296・298・301)



第44図 繩文後期土器 無文浅鉢IV-①-⑤類 (303・306・307),  
同IV-①-⑥類 (304・305・308・309), 同V類 (310)



第45図 縄文後期土器 無文浅鉢V類 (311・312), 同VI類 (313), 浅鉢底部 (314~324)



第46図 繩文後期土器 注口土器（325・326）、双耳壺（327・328）、  
器種不明土器（329）

については、セクションベルト及びその周辺出土の土器が主なものであり、それ以外の地点から出土した土器で層名を付しているものは、擾乱層以外からの出土でセクションベルトの層位に対応する層位から出土したものである。各器種・各型式と出土層位との対応関係は表2-5に示した通りである。層位を付して取り上げることができた土器は136点であり、型式分類可能な全土器数の2割に満たない数である。しかし一応の目安としては使えると考えている。各表を見ても分かるように第IV層から最も多くの土器が出土しており、全体の44%を占めている。そしてこれに対応するように各器種・各型式共にIV層からの出土が最も多い。このことは前章で述べた出土状況とも合わせて各型式共に同時期か極めて短い時間幅の中で堆積したことを示している。また、1つの土器片が2層にまたがって出土したり、66（VI-III層）・68（IV-III層）・110（III-II層）・112（IV-III層）のように層位を越えて出土した土器が接合関係にあることもその事実を裏付けるものである。ただⅣ-V層からは出土点数は少いものの（94

表2 有文深鉢各型式層位別出土点数

分類 層位	I	II	III-A	III-B	III-C	IV					V					VI		VII		VIII		IX		X		XI		XII		XIII		XIV		XV		計
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	A	B	C	D	E	A	B	C	E	A	C	B	D	(1)	(2)	A	B	(1)	(2)	A	B	(1)	(2)	XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	計
I																																	2			
II																																	8			
III			1	1																												10				
IV		2																															23			
V																																	1			
VI																																	1			
VII																																	5			
VIII																																	1			

表3 粗製深鉢各型式層位別出土点数

分類 層位	I					II-A					II-B					II-C					II-D					計						
	A	B	C	D	E	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	(21)						
I	1																										7					
II	1	2	3																								8					
III																																
IV	1	2	2	1	1	1	1	3	1	2	2	2	2	16																		
V																																
VI																																
VII																																
VIII																																

表4 有文浅鉢各型式層位別出土点数

分類 層位	I					II					III					IV					V					VI					計	
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O		
I																															2	
II	1																															6
III																																8
IV	1																															11
V																																1
VI																																
VII																																

・98・312) のように完形に近い土器が出土している。このことはこの時期に意識的な土器廃棄(投棄)が始まり、IV層の段階で廃棄(投棄)のピークを迎えたことが考えられる。VI-V層とIV層との間に間層は全く認められないが、IV層とVI-V層との間に接合関係が認められることからIV層から上層と下層とでは多少の時間差があった可能性もある。しかしこの時間差も後述するように1つの土器型式の中で推移した堆積である。

従って今次調査で得た資料は全くの混入と考えられる数点の縄文前期土器を除けば、ほとんど同時期のものとして把握することが可能である。ただ有文深鉢I類(7)・有文浅鉢I類(222)の宿毛式、及び有文深鉢II類(9・10)の福田K II式との関係を如何に理解すべきか少し問題の残るところであるが、このことについては後述する。

### 3 石器

石器の種類及びその点数は表-6に示した通りである。出土地点は打製石包丁(331)が落ち込み北側の地山面から出土した他はすべて落ち込みと擾乱層出土である。層位的にはⅣ・

表5 無文浅鉢各型式層位別出土点数

分類 層位	I					II					III					IV					V					計					
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)						
I																													4		
II																													1		
III																															
IV	2	1																													10
V																															3
VI																															
VII																															

VI・IV・II層から出土しているが、土器と同じようにIV層中が最も多い。石材は表-7に示した通りである。石鎚など剥片石器類はサヌカイトが圧倒的に多いが、石斧・石錐などについては三波川帯の御荷鉢緑色岩が多く使われている。砥石は当遺跡の西方にある上八川一池川構造線の石英粗面岩が使われている。以下種類別に所見を述べることにする。

#### (1) 打製石包丁 (第47図-330・331・333)

三者共一部を欠損しているがほぼ完形である。330・331は横長であり両者共に短側縁の幅が異なっており幅の広い方には強い抉りが認められる。両長側縁に両面から刃部が作り出されているが両者共に一方が薄く、薄い側の刃部が丁寧に作られている。また刃部の形状は330が湾曲、331が直線状である。330は長さ9.3cm、幅(短)-2.9cm、長-3.9cm、最大厚0.8cm、331は長さ8.5cm、幅(短)-1.5cm、長-2.9cm、最大厚0.65cmを測る。333は、幅の広いタイプであり抉りは認められない。一方の長側縁が外湾し両面から刃部が作り出されている。長さ5.7cm、幅4.0cm、厚さ0.7cmを測る。この種の打製石包丁は西日本各地の縄文後期遺跡で出土例が増加しているが、本県では初めての出土である。穂摘具と考えられる。

#### (2) 石鎚 (第48図-337-342) ・ 石錐 (343) ・ 石匙 (344)

石鎚は細片を含めて8点出土しているが、6点を図示した。337-339・341は、基部に比較的深い抉入があり、337-339は丸味を帯びて抉られている。脚端部は338が丸く、341はやや鋭くおわっている。340は平基式で基部の一部を欠損しているが平面は正三角形に近い。また基部にも両側から剥離が施され薄くつくり出されている。342は大型鎚で正面に弱い棱を有し、基部は凹状をなすが左右非対称で一方の脚が長く伸び外反りしている。他の石鎚に比べて風化が激しく、前期の可能性がある。

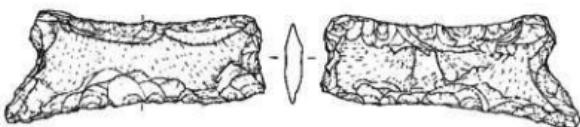
石錐 (343) は、頭部の断面が平行四辺形、錐部の断面が三角形をなし、頭部から段をなさずにそのまま錐部につながり、先端は鋭く尖っている。344は、綫長の石匙である。片方に大剥離面を残す。つまみは中心軸に対し屈曲してつくり出され、両側から抉りが入れられる。刃部は細い押圧剥離によって両側からつくり出されている。

#### (3) 磨製石斧 (第49図-345-347)

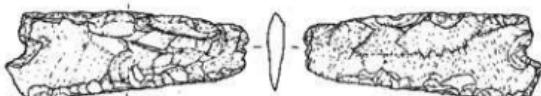
3点出土しているがすべて欠損品で、石材は御荷鉢緑色岩である。345は、刃部の一部と側縁部の破片である。比較的肉厚であるが刃部は鋭く研ぎ出され、器面は丁寧に磨研されている。346は、刃部が薄く剥離したものであるが、剥離欠損後両側縁部を鋸歯状に再加工している。347は、刃部の形状をとどめている。刃部幅は7cm、厚さ2.7cmである。刃部は左右非対称であり、刃部片面の磨耗の激しい側を後側縁とすべきであろうか。器面は丁寧に磨研されてい

表6 石器器種別  
出度点数

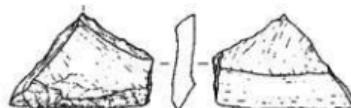
種類	点数
打製石包丁	3
石鎚	8
石匙	1
石錐	1
打欠き石錐	28
叩石	3
磨製石斧	3
砥石	1
加工痕有剥片	9
剥片・碎片	180
その他	1
計	246



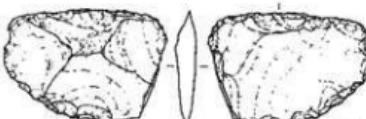
330



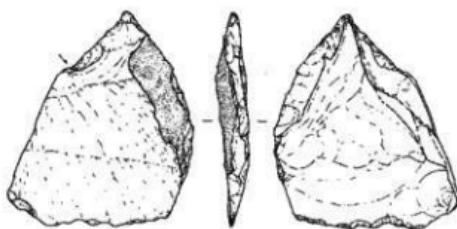
331



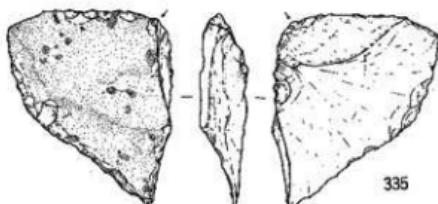
332



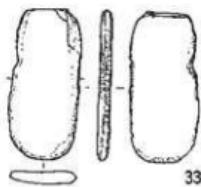
333



334



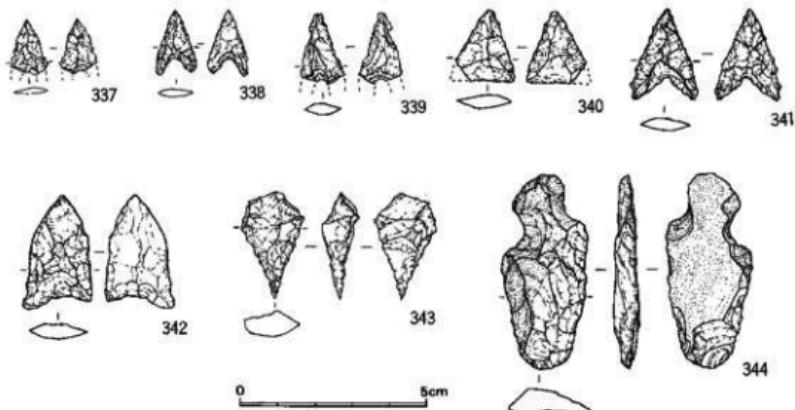
335



336



第47図 石器 打製石包丁 (330・331・333), 刺片石器 (332・334・335), 器種不明 (336)



第48図 石器 石鋸（337～342），石錐（343），石匙（344）

る。

（4）叩き石（第49図-350～352）

350・351が御荷鉢緑色岩、352が砂岩で、重量は1010 g, 278 g, 650 gである。350は端部の一方に顕著な使用痕が見られ、使用面は凹凸が残る。351は、扁平な河原石で側縁の2箇所に敲打による使用痕が見られる。352は、両主面中央部が凹み側縁部の一部にも使用痕が見られる。

（5）砥石（第49図-349）

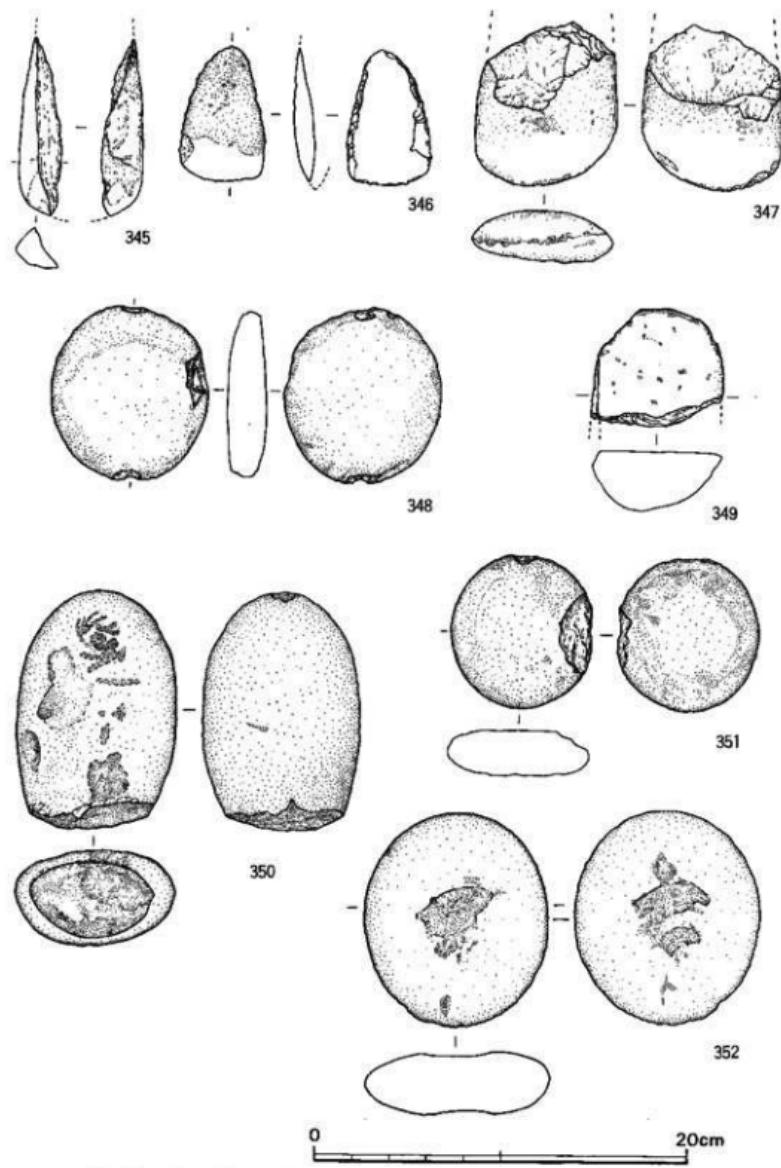
石英粗面岩製で、使用面は一面であるが水平に研磨されている。

（6）打ち欠き石錐（第50・51図-353～379）

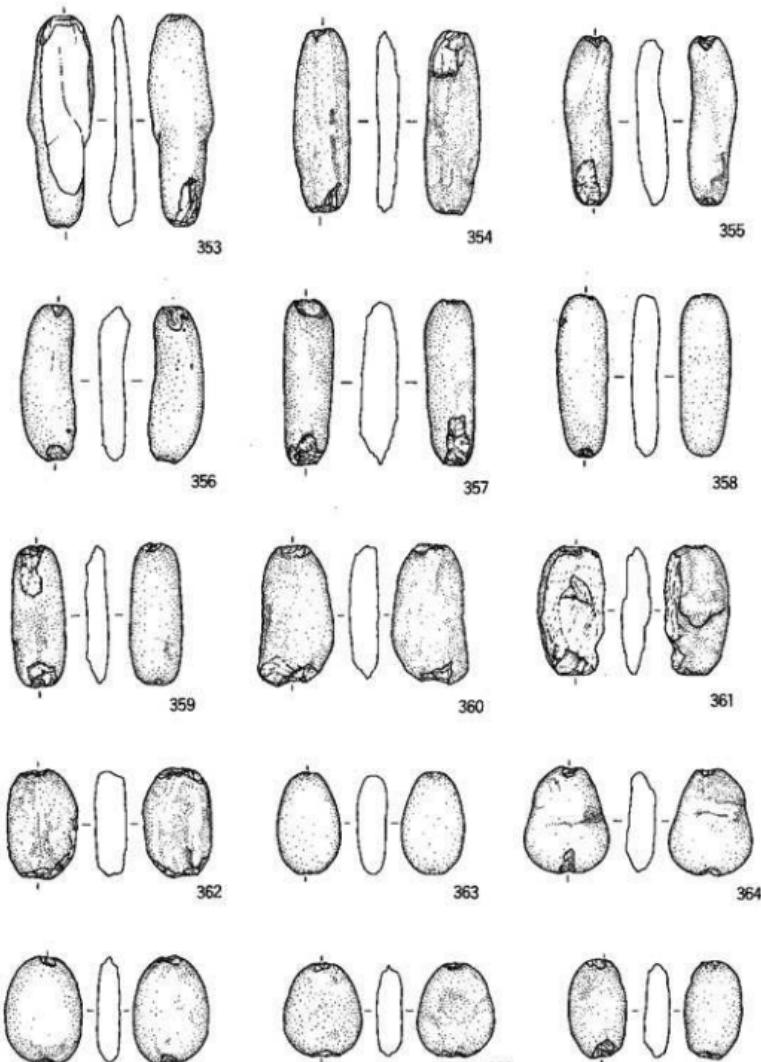
河原石の両端をかるく打ち欠いたもので抉りは弱い。石材は御荷鉢緑色岩と結晶片岩が主に使われているが前者が多い。形態と重量によって大きく2つのグループに分けることができる。A類（353～361・379）は棒状をなすもので平均重量63.39 g, 379は打ち欠き方が他の例と異なっているが一応本類に入れた。A類は御荷鉢緑色岩：結晶片岩：石英粗面岩が7：2：1で用いられている。B類（362～373）は、丸味を帯びたタイプで平均38.12 gを測る。石材は御荷鉢緑色岩：結晶片岩：石英粗面岩が10：4：1で用いられている。これらの他に剥離面を残した扁平な（厚さ3～4 mm）石錐（374・377）がある。377は一端が欠落しているが374は両端を僅かに抉っている。一応C類とする。

（7）その他（第47図-336）

結晶片岩製で長さ5.4 cm, 幅2.5 cm, 厚さ0.5 cm, 重量10.5 gを測り、両主面は研磨されている。側縁の一方には細い刺突が不規則に2列に施されている。装飾品の一種であろうか。機能不明の石器である。

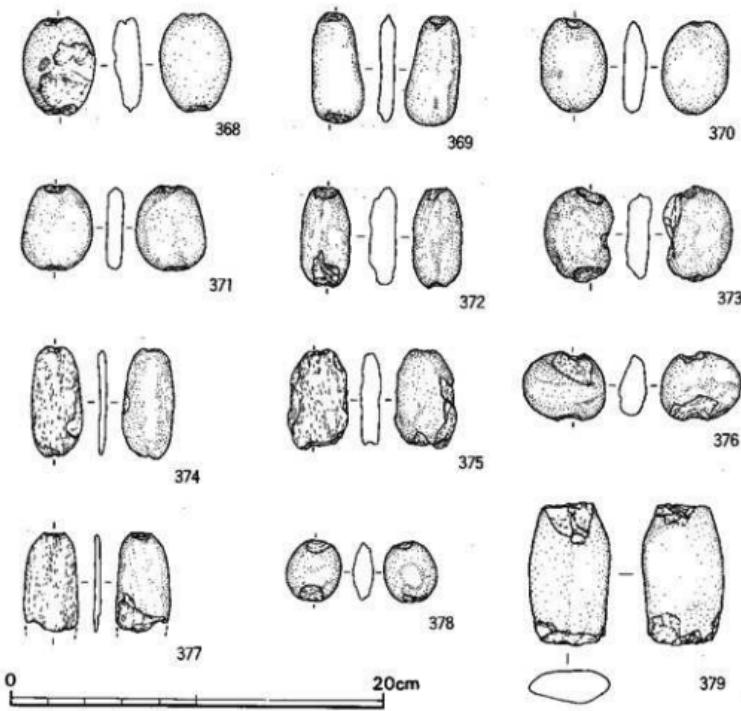


第49図 石器 磨製石斧 (345~347), 叩石 (348・350~352), 蔴石 (349)



0 20cm

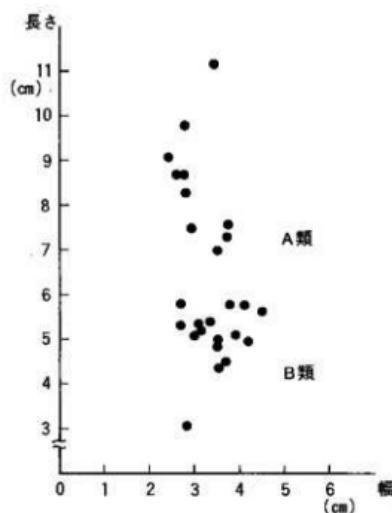
第50図 石錘 A類 (353~361), B類 (362~367)



第51図 石鏃 A類 (379), B類 (368~373・376・378), C類 (374・377)

表7 石器石材別点数

石材種類	サスカイト	チャート	御荷鉢 緑色岩	砂岩	石英粗面岩	結晶片岩	不明	計
打製石包丁	3							3
石鎌	8	1						9
石匙	1							1
石錐		1						1
打欠き石錐			17		2	8	1	28
叩石			2	1				3
磨製石斧			3					3
砥石					1			1
加工痕有剥片	6	3						9
剝片・破碎片	159	21						180
その他						1		1
計								239



図表1 石錐法量表

## 第VI章 考 察

### 1 縄文後期土器

ここでは第IV章で行なった型式分類をもとに、他地域の土器との比較・検討をも行いながら松ノ木遺跡出土土器の編年的な位置付け、系譜などについて若干の考察を試みるものである。

#### (1) 有文深鉢

有文深鉢は全体の3割近く(30.3%)を占める。I~XV類の人分類を行いIII~X類については更に細分を行った。IV類(46.7%)が最も多く、次いでV類(29.6%)が多く、両者を合わせると実に有文深鉢の76.3%を占めており、IV・V類が松ノ木遺跡出土縄文土器の主体を有していると言えよう。以下両者を中心に検討することにしたい。

I類はすでに記したように本県西部の宿毛貝塚を標式遺跡とする宿毛式土器である。本塚中部以東の遺跡における宿毛式土器の確認は今次調査が初めてである。県西南部から豊後水道あるいは西部瀬戸内を中心には分布域を展開していると考えられているが、今次調査によって県中部にまで分布域が広がることが明らかとなった<sup>[1]</sup>。今後当遺跡への流入ルート(瀬戸内経由か土佐湾岸を経出したか)が問題となろう。

II類(8~10)は3点出土している。3本沈線の磨り消し縄文であることから一括したが、8は福田貝塚資料のF K 9層出土土器の段階に入れることができる<sup>[2]</sup>。9は千葉農氏の口縁部分類に従うと口縁下の文様帯が上退したb1種に属し福田K II式の新段階に比定することができる<sup>[3]</sup>。

III類は、有文深鉢の7.5%を占める。胴部文様が沈線のみで飾られるA類と縄文を伴うB類。口縁部のみに文様をもつC類に、更に口縁が内面に強く肥厚する①と肥厚の弱い②の都合6型式に細分を行った。本類は口縁部直下から器皿全面に文様を施し口縁部文様帯が独立していない点は後述するIV・V類と異なるが、口縁内面に肥厚帯を有して口縁部文様帯を作り出す点や突起更に胴部文様がネガティブな磨り消し縄文を有する点などIV・V類と共に通する要素を持っている。またIII-B-①類の(16・17)は、口縁下に1本の沈線を残しており先述のII類(9)のb1種口縁に類似している。III-B-①類とIII-B-②類は、口縁内面の肥厚帯の差異だけでなく前者の区画文が大柄に描かれるのに対して後者は矮小化している。型式的にはIII-B-①類からIII-B-②類へ変化する可能性がある。III-B-①類の中でも(20)は、口縁下に僅かな無文帯が認められるが、基本的には本類は頸部無文帯を形成しないタイプであると考えられる。口縁部の形態や文様意匠、沈線脇にドテを残す手法などから見てIV・V類などと共に土器様式を構成する有文深鉢のバリエーションの1つと考えられる。近畿・瀬戸内など広く西日本の資料を見ても管見の限りではあまり類例を見出すことはできないが、わず

表8 後期土器の器種組成

器種	点数	%
有文深鉢	240	30.3
有文浅鉢	70	8.8
無文浅鉢	116	14.6
粗製深鉢	356	44.9
粗製浅鉢	4	0.5
双耳壺	5	0.6
注口上器	2	0.25
計	793	99.95

かに洗谷貝塚<sup>(4)</sup>や小松川遺跡<sup>(5)</sup>で類似相を求めることができる。時期的に後出する田村遺跡群<sup>(6)</sup>や西分増井遺跡出土資料中<sup>(7)</sup>にもⅢ類に祖形が求められる型式は発見できない。従って本類は在地色が強い型式で当該期以降縁帶文土器が盛行する中で消滅していく型式であると考えられる。

Ⅳ類土器は、V類と共に有文深鉢の主流を占めるものである。その最大の特徴は口縁部文様帯と胴部文様帯が明瞭に分離する点にあり、千葉氏が福田K II式と津雲A式の間を埋める土器型式として設定した〈広瀬土墳4段階〉<sup>(8)</sup>には相当させることができる。すなわち成立期の縁帶文土器の四国タイプとして位置付けることができよう。千葉氏の指摘にもあるように波状口縁がほとんど認

表10 有文深鉢IV・V類口縁部文様

口縁部の特徴	IV類		V類	
	点数	%	点数	%
1本の沈線+Rの短沈線	66	63.5	20	30.3
1本の沈線+Lの短沈線	3	2.9	4	6.1
1本の沈線+Cの短沈線	2	1.9		
1本の沈線+R+L+Cの短沈線			1	1.5
Rの短沈線のみ	1	0.9	15	22.7
Lの短沈線のみ	2	1.9		
1本の沈線のみ	7	6.7	9	13.6
2本の沈線のみ			5	7.6
2本の沈線+R Lの繩文	2	1.9	3	4.5
区画文+R Lの繩文			1	1.5
1本の沈線+繩文+Rの短沈線	13	12.5	1	1.5
Lの短沈線+R Lの繩文			1	1.5
Rの短沈線+L Rの繩文			1	1.5
にぶい凹線			1	1.5
にぶい凹線+擬似縄文			1	1.5
2本の沈線+Rの短沈線	2	1.9	1	1.5
にぶい凹線とRの短沈線	2	1.9		
1本の沈線とR Lの繩文	4	3.8	1	1.5
無文			1	1.5
計	104	99.8	66	99.8

表9 有文深鉢型式分類表

I類	2点(0.8%)	
II類	3点(1.3%)	
III類	III-A-(1)	3点
	III-A-(2)	2点
	III-B-(1)	5点
	III-B-(2)	2点
	III-C-(1)	4点
	III-C-(2)	2点
	小計	18点 18点(7.5%)
IV類	IV-A	14点
	IV-B	11点
	IV-C	1点
	IV-D	1点
	IV-E	85点
	小計	112点 112点(46.7%)
V類	V-A	4点
	V-B	5点
	V-C	2点
	V-E	60点
	小計	71点 71点(29.6%)
VI類		6点(2.5%)
	VI-A	4点
	VI-C	1点
	小計	5点 5点(2.1%)
VII類		3点(1.3%)
	VII-A	2点
	VII-B	7点
	小計	9点 9点(3.8%)
X類	X-A	2点
	X-B	2点
	小計	4点 4点(1.7%)
XI類		1点(0.4%)
XII類		1点(0.4%)
XIII類		2点(0.8%)
XIV類		2点(0.8%)
XV類		1点(0.4%)
合計		240点(100.1%)

められず、平縁で突起を有するものが多いことについても全く一致し、口縁部について見れば福田K II式土器からのスムースな移行を辿ることができる。また突起部外面にはしばしば垂下沈線帯が見られ、中には(38)のようにボジティブな縄文帯を垂下させる例も認められる。このような現象も、福田K II式土器によく見られるところの突起あるいは波頂部から垂下して胴部文様帯との間を埋める垂下文様のルジメントとして位置付けることができる。従って本類が福田K II式土器を模形として成立することは確実である。近年当該期の資料は飛躍的に増加しつつありほぼ西日本一帯に広がっていると言っても過言ではない。すでに周知のように〈広瀬土壙40号段階〉の他にも山陰では布勢式<sup>(8)</sup>、滋賀では今安楽寺式<sup>(9)</sup>など型式名も命名されている。これら各地に見られる土器群には先に挙げたような特徴の齊一性と共に地域性も存在し、また多少の時間差を含むことも有り得よう。以下主として口縁部文様と胴部文様とに分けて検討を加え当遺跡における特徴を明らかにしたい。先ず本類の主様な特徴の1つである内面に肥厚した口縁部文様帯は、先に示した千葉氏のb1種口縁から口縁下の「横走沈線が消失」したd1・d2種、及び瀬戸内に多く分布するとされるe種口縁に属する。ただし d・e類を峻別することは難しい。これらを詳細に分類すると表-11のようになり11種類のタイプが存在するが、1本の沈線とRの短沈線の組合せが半倒的に多く全体の63.5%に及ぶ。また短沈線についてみると91例中84例までがRで占められている。この短沈線Rの優勢は縄文の燃りと一致し、洗谷貝塚Ⅳ類<sup>(4)</sup>、岡山大学男子学生寮予定地<sup>(10)</sup>、小森岡遺跡<sup>(11)</sup>出土のK 6類などに見られる状況と一致している。また2本沈線を描く例は4例と少ないが、これらが4等分割突起間に施される場合は、両端が内側に向かって垂下気味に終るか、区画文状に展開していると考えられる。

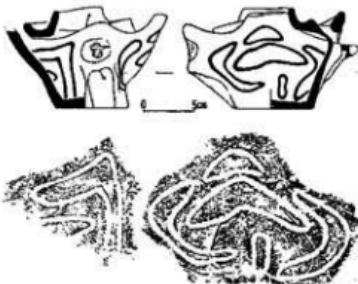
千葉氏は、また上記の分類とは別に口縁部の形状と文様施文位置を基準に「上面施文型」「前面施文型1・2」、「内面施文型」に類別を行っている<sup>(12)</sup>。筆者は内面肥厚帯の厚・薄あるいは大・小を基準に分類しており千葉氏とは若干基準が異なるが、IV類口縁には「上面施文型」(23・24・27・29・34・53など)と「内面施文型」(25・26・30・33・36など)が共存している。両者の混在は洗谷貝塚においても見られる現象であり、「内面施文型」の僅少さは山陰地方の地域色として理解することができる。「内面施文型」「前面施文型」については、縄帶文土器の展開に直結する重要な問題を含んでいるが、このことについては後述する。

次に胴部文様の検討に移ろう。前章においてA類(沈線のみ)、B類(縄文を伴うもの)、C類(集合沈線)、D類(刺突文)に類別した。A・B類は類例も多く基本的には入り組み文を混じえた沈線区画文である。文様意匠の全体を知り得る資料は少ないが、鉤状あるいは逆L字状を呈するものが目につく。(35・37・40・43・47) この種の文様を有する例は、右近次郎遺跡<sup>(13)</sup>や時期は降るが仏伊遺跡71-O D<sup>(14)</sup>などに見られ、かなり広い分布圏を有している。この文様について千葉氏はa-1類として福田K II式からの変化として把握している<sup>(3)</sup>。たしかに広瀬土壙や中戸遺跡<sup>(15)</sup>や山陰地方では、曲線文様の直線化、簡略化のあとがスムースに辿

れるものが存在するが、これらと同じ系譜に位置付けることが妥当であろうか。そのためには3本沈線から何段区画文に変化するのかということが説明されなければならない。第52図に示した土器は、本県西部の仕出原遺跡出土の双耳壺であり、中津式土器併行に位置付けられている。<sup>(16)</sup> A・B類の区画文は、このような土器の文様に祖形が求められると言える。従って口縁部については福田K II式からの展開が辿れたが、胴部文様については、福田K II式とは無関係な在地的な土器の文様意匠からの展開が考えられる。このことは本類に福田K II式に祖形を求めることが可能な胴部文様が1点も存在しないことによっても証明される。次にC類(51)である。広瀬土壇40号出土の胴部文様に一致し、千葉氏の胴部文様b類(多重半円文)に属する。氏は「福田K II式の文様に系譜を求めるることは困難で他地域に系譜を求めるべき」としたうえで「堀之内I式の胴部文様との類似が問題になろう」<sup>(3)</sup>といふ指摘をしている。また泉氏は在地的要素<sup>(17)</sup>として理解している。関東においてかかる集合沈線充填手法が登場するのは堀之内I式でも第II段階後半以降とされており<sup>(18)</sup>、この文様が称名寺式からは辿れない文様であることや後述するXII類(88)との関係からしても、祖形を関東に求める事はできないのではないかと考える。D類(48)は近畿以西において例を見ないものであり、強いて求めれば北陸地方の三十稻葉式に類例を求める事ができる。三十稻葉式古段階の「横方向へ整然と並ぶ」ものと比べれば粗雑化しておりほぼ新段階に併行させることができよう<sup>(19)</sup>。当型式は越前以南にはほとんど分布が認められない土器である。

<sup>(15)</sup> 四国からの出土は注目される。この他口縁部のみに文様帯をもつて類が85点と最も多いが、これには(55)のように胴部外面まで無文が確認できた例もあるが、頸部以下欠損の資料が本類に多く含まれている。

次にV類を見よう。IV類との最大の違いは口縁内面の肥厚帯が薄くなる点である。千葉氏のd・e類、「上面施文型」



第52図 仕出原遺跡出土の後期土器  
註(16)より転載

・「内面施文型」に属するが、本類はIV類に比べると「内面施文型」が増加する点は否めない。表10のようIV類では、1本の沈線+Rの短沈線が63.5%を占めていたが本類では30.3%に半減している。かわってRの短沈線のみのものや1本の沈線のみのものが大幅に増加している。突起を有するものも減少しIV類に盛行を見た大形突起は皆無である。それに照応して頸部外面の垂下沈線も認められない。胴部文様はA・B・C類が見られる。A・B類にはIV類で顕著で

表11 有文深鉢胴部文様

	点数	%
A : 2本沈線	262	50.0
B : 繩文を伴う	231	44.2
C : 集合沈線	28	5.4
D : 刺突文	2	0.4
計	523	100.0

あった鉤状・逆L字状区画文（61・64）がほとんど変化することなく見られるが、（64）で明らかのように地縄文は更に散満な施文となる。これは（63）においても同じである。C類で明確に把握できるのは（65・67）の2例である。口頭部と胴部文様を統一的に把握できる資料が少ないので、胴部文様は本類でもA・B類が主流を占めるという傾向は否めない。IV類とV類は、層位的に先後関係を求ることはできないが、型式的にはIV類→V類への変化を想定することができる。従ってIV類→V類との関係においては、千葉氏の「上面施文型」→「内面施文型」への移行が認められ、四国においては瀬戸内と共に「上面施文型」との関係において「内面施文型」を型式学的に序列化することができるのである。

V類は、「施文省略型」<sup>(11)</sup>の口縁部を有する一群である。胴部文様は基本的にA・B・C類が認められる。波状口縁を有する（81）の頸部外面には垂下沈線があり成立期の縄帶文土器に併行することを示している。また当該期に先行する仏並遺跡120-00出土資料中<sup>(20)</sup>には、V類の祖形と考えられる土器が認められる。このことは口頭部文様帯をもたない土器群の系譜を示すものである。

VI類は、口縁部外面に幅広い粘土帯を貼付するタイプであり、「外施文型」に類似するが千葉氏のC類とは一見して趣きを異にする。「上面及び内面施文型」更に福田KⅡ式を祖形とする「外施文型」とも系譜を異にするタイプである。ただ（83）の口縁外面の沈線のタッチはIV類などに共通するものであり、同時期の所産と考えられる。

IX類は「前面施文型2」<sup>(12)</sup>に属するものであり、（99）の頸部外面の垂下沈線は福田KⅡ式からの系譜にあることを示している。当遺跡では3.75%と少数派であるが山陰に多く分布するタイプである。このことは「上・内面施文型」と「外施文型」が地域によって組成比率を異にして同時に分布することを示している。IX類の（96）は、「口頭部を屈曲によって区別する」<sup>(13)</sup>「前面施文型1」に類する。

XII類は、1点のみであるが関東との時間的な関係を示すものとして有効な資料である。口縁外面の隆帯や刺突は称名寺式に特徴的な文様と/orすることができるが、頸部無文帯（Ⅱa帯）の出現は堀之内1式の初頭の指標となるものである<sup>(21)</sup>。

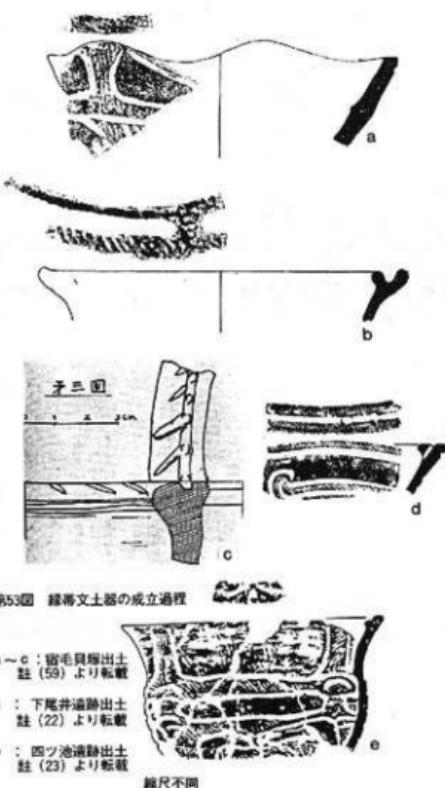
XIV類は、胴部外面に全縄文・擬似縄文を施すものであり、口縁外面を肥厚させて縄文を施せば津雲A式に多く見られるタイプとなる。高知平野においても津雲A式段階の口縁・胴部全縄文の土器が数多く分布しているがそれらの祖形に位置付けられる。

VI・XI・XIII・XV類は、極めて僅少であり系譜関係について触ることは現段階では不可能である。しかしXV類は第V層出土であり成立期の縄帶文を構成するバリエーションとして理解したい。以上主として千葉氏の成果に依拠しながらIV・V類を中心に検討を加えて来たが、ここでもう一度原点に立ち帰ってIV・V類（成立期の縄帶文土器）の成立について別の角度から考えて見る必要がある。何故なら南四国には福田KⅡ式に併行する宿毛式が存在するからである。当遺跡の位置から考えて瀬戸内からの影響を強く受けることは至極自然に考えられ

ことであるが、当地域に宿毛式の分布が明らかになった以上、同式との関係について触れなければ、当地域の後期土器の展開を正確に位置付けたことはならないからである。第53図に示した土器はすべて宿毛貝塚出土の資料であり  $a \rightarrow b \rightarrow c$  の変遷が考えられる。 $a$  は現在我々が認識している宿毛式土器とは趣きを少し異にしているが、内面の段や2本沈線は宿毛式により近いものであり、波状部から垂下する縄文帯は、IV類の垂下沈線または垂下縄文帯へ移行する文様として把握することができる。そして口縁外面の沈線が完全に上退すれば  $b$  の口縁部すなわちIV類の口縁部文様帯となる。それが更に展開すれば  $c$  の内面施文となるのである。この他地域は異なるが、2本沈線の磨り消し縄文を基調とする土器からの上面施文への変化は下尾井遺跡（和歌山）<sup>(22)</sup>の資料からも窺える。このような変化は洗谷貝塚や四ツ池遺跡F地点<sup>(23)</sup>の資料などにも見られる。今後各地域における詳細な検討が必要であるが、IV類のような内面施文の口縁部文様帯は福田K II式のみから変化発展するのではなく宿毛式など福田K II式併行期の土器と共に見られる縁帶文土器化への変化として理解することができる。これは各地の成立期の縁帶文土器の地域性を規定するものであり、IV・V類に見られる特徴的な区画文の展開もこのような動向の中で理解することができる。

以上有文深鉢について検討した。その結果I類は宿毛式、II類は福田K II式の新段階として、IV・V類を主体とする他の型式は、搬入品を除いて成立期の縁帶文土器あるいはそれに併行する土器として位置付けることが可能である。

## （2）粗製深鉢



第53図 縁帶文土器の成立過程

a～c：宿毛貝塚出土  
鉢(59)より転載

d：下尾井遺跡出土  
鉢(22)より転載

e：四ツ池遺跡出土  
鉢(23)より転載

縮尺不同

粗製深鉢は土器組成中で最も多く、44.9%を占めている。瀬戸内のものとされる刻目を有するタイプ（I類）と刻目をもたない（II類）とに大分類を行った。前者が21.6%，後者が78.4%を占めている。両者共に口縁部の外反する（A・B類）が多く、直口及び内湾のタイプ（C・D類）は少ない。口縁部を刻むタイプは中津式に多く見られ、森の宮貝塚（後期1群）<sup>(24)</sup>でも少量認められる。本県では宿毛貝塚<sup>(25)</sup>や三里遺跡<sup>(26)</sup>などから出土している。福田貝塚では福田K II式（F K 11～13）に伴うものを含めて18点（別表6）<sup>(27)</sup>出土しているが、これは總じて刻目が細くきしゃである。当遺跡出土のI類は、原体がすべて棒状であり刻目が太く短沈線状に施される例が多く中津式や宿毛式、森の宮貝塚の例と共通している。しかしI類の場合には口縁に対して直角に刻まれる例よりも斜めに短沈線状に刻まれるものが多く、その場合は有文深鉢と同様にRが圧倒的に多い。また中には（137）のように口縁を4等分してそれぞれ方向を違えて施す例も見られる。口縁端部の形状は丸味を帯びてそのまま終るもののがほとんどであるが、（145・153）のように肥厚する例も稀にある。II類は78.4%で、口縁端部が内外に肥厚する①類が21点（7.5%）、内面に肥厚する②類が35点（12.5%）、そのまま終る③類が223点（79.9%）であり、内面に沈線を施すものが1点ある。口縁を肥厚させる粗製深鉢はあまり類例を見ないが小森岡遺跡<sup>(28)</sup>に①類、宿毛貝塚<sup>(29)</sup>に②類同様な例が出土している。この口縁部肥厚は有文深鉢に見られる現象に対応したものであろう。

粗製深鉢土器の器面調整は、巻き貝条痕、巻き貝条痕+ナデ、荒いナデがほとんどである。少數例（165・167・189など）ハケ状原体による調整が認められるものの、後の西分増井遺跡例のような明瞭な条線を残すものは見られない。

### （3）深鉢底部

底部のみでは有文か粗製か区別できないものが多く、ここでは両者を含めて述べざるを得ない。表-13に示したように上げ底・平底・窪み底の三者があるが、上げ底が圧倒的に多く79.6%を占めている。すでに指摘したように上げ底でも外縁が高台状をなす深い上げ底が多い。この種の上げ底は、福田K II式には認められず洗谷貝塚の資料中のⅣ類に認められるが、当遺跡の土器群と併行関係にあるⅤ類にはほとんど認められない。当該期のものとしては、三里遺跡や岩谷遺跡<sup>(29)</sup>で少量確認している。南四国の地域色であろうと考えられる。

次に底部多孔土器について述べる。2点共に上げ底の底部に焼成前に穿孔している。小片で

表12 粗製深鉢型式分類

		点数	%
I類	I-A	34	
	I-B	31	
	I-C	8	
	I-D	4	
I類合計		77	21.6
II類	II-A-(1)	20	
	II-A-(2)	23	
	II-A-(3)	91	
	小計	134	37.6
	II-B-(2)	7	
	II-B-(3)	6	
	小計	13	3.7
	II-C-(1)	1	
	II-C-(3)	23	
	小計	24	6.7
	II-D-(2)	5	
	II-D-(3)	9	
	小計	14	3.9
細分不可		94	26.4
II類合計		279	78.4
合計		356	99.9

あるため孔数は不明であるが、(190) の孔が(191) の孔よりも少しき。この種の土器は中津式以降各地で少なからず出土している。「櫛器」、「漉器」、「造酒器」などさまざまな説がある。また深鉢のみでなく浅鉢底にも穿孔している例がある。小豆島の神子ヶ浜遺跡では浅

表13 土器底部の形態

分類	器種	深鉢	浅鉢
上げ底	113点 (79.6%)	21点 (47.7%)	
平底	23点 (16.2%)	23点 (52.3%)	
座み底	6点 (4.2%)		
計	142点 (100%)	44点 (100%)	

鉢を中心として8例が、西浜遺跡でも浅鉢1点に多孔が見られる。穿孔は内底→外底、外底→内底、両方からが見られる。両者共中津式土器併行期である(30)。一方越後では三十稻場式期に多く見られ繩文時代を通して存在するが、古いものは外底→内底へ、時期が降ると内底→外底へと穿孔方法に変化のあることが指摘されている(31)。190・191は、使用による磨耗が激しく穿孔方向は不明である。また岩谷遺跡(29)では大型1孔の底部穿孔土器と共に多孔の土製品が出土しているが、後者は底部の円盤部が下胴部から剥離した可能性がある。

次に深鉢の機能と関係することであるが、有文深鉢底部の中には胴部下端・外底まで被熱変色している例が見られるのに対して、粗製深鉢は胴部下半までは、被熱による変色や煤けが認められるもののそれ以外の部位は変化を受けていない。また胴部では有文・粗製共にはほぼ同じ割合で煤けや被熱赤変が見られ、粗製深鉢が多く煮沸に使用されたということは認められない。興味深い現象であり今後資料の増加をまって検討したい。

#### (4) 有文浅鉢

有文浅鉢は70点、全体の8.8%を占めている。組成比率は少ないが松ノ木遺跡を代表する土器群であると言える。I類は宿毛式あるいは福田K II式に属し、量的にも少なく有文深鉢に見られた当型式の存在に対応するものとして理解することができる。

表14 有文浅鉢型式  
分類

分類	点数	%
I-①	2	2.9
I-②	2	2.9
II	2	2.9
III-A	35	50.0
III-B	9	12.9
III-C	3	4.3
IV-A	1	1.4
IV-B	2	2.9
IV-C	4	5.7
V	1	1.4
VI	1	1.4
VII	2	2.9
VIII	3	4.3
IX	3	4.3
計	70	100.3

ここでは入り組み文や渦巻文・幾何学文を器表全面に駆使したII・III・IV類を中心に検討を進めたい。これらは表-14に示したように有文浅鉢中で主体を占めるものであり、有文深鉢IV・V類などと共に成立期の縁帯文土器様式を構成するものである。そこで先ず第一に気付くことは、これらの文様意匠が有文深鉢とは全く異なっていることである。従って現段階においては既存の土器型式の中に直接系譜的につながるものを見出すことは難しい。先ず管見の限り各地の出土例を挙げてみよう。四国島内では、本県の宿毛貝塚で2点、片船遺跡(32)で2点出土しており前者は宿毛式に後者は宿毛式と平城式土器の中に位置付けている。愛媛県では岩谷遺跡第Ⅲ下層より2点、小松川遺跡より1点出土している。前者を岩谷第2式土器=宿毛式土器(29)とし後者を小松川式第I類土器として位置付けている(50)。徳島では吉野川下流域右岸の東禅寺遺跡から1点出土してい

る<sup>(33)</sup>。この他島根県ヨレ遺跡で縁帶文土器に伴って1点出土している<sup>(34)</sup>。以上現状では松ノ木遺跡を除くと6遺跡9点の出土であり資料的には極めて僅少であるが、土器分布に見られる傾向としては、南四国を中心としてこれらの土器は2本沈線を主体とする宿毛式土器の分布圏内から出土しているということを指摘することができよう。岩谷遺跡からは福田K II式も出土しているが宿毛式が多く宿毛式土器の分布圏内として理解することができる。島根についても同様の現象が観え、足立克己氏の論考においても指摘があるように基本的に宿毛式土器の分布圏内にあると考えてよい<sup>(35)</sup>。

岩谷遺跡では2点共に宿毛式との共伴が層位的に確認されている例であるが、これはIII-A類の(229・240)と形態文様共に酷似している。しかし当遺跡出土のII~IV-a類の有文浅鉢を宿毛式土器と併行させることはできない。今後、これら有文浅鉢が宿毛式で成立するのか、しないのか、もし成立した場合においても現在知られている宿毛式の有文浅鉢には間違が求められない以上その出自について如何なる背景があるのか等の問題が残る。また宿毛式の段階のものと成立期の縁帶文土器のものとの型式的な差異についても今後追求して行かねばならない。しかしながらこれらの有文浅鉢の分布が宿毛式土器の分布と対応関係にあるという事実は、相形を考えるうえで有力な手掛かりになるであろう。

次にⅤ類(284)について述べる。図示し得なかつたものを含めて3点(4.3%)の出土である。この型式については、すでに千葉氏の指摘にもあるように「縁帶文土器成立期から次の時期にかけて西日本一帯に分布」する型式である<sup>(11)</sup>。小森岡遺跡や洗谷貝塚・永井遺跡<sup>(36)</sup>などから出土している。前者は口縁部に繩文帯を有し後2者は本例に比べて体部に湾曲が見られる。本型式は中津式や福田K II式には見られないが、形態的な祖形は北白川C式土器の中に見られる<sup>(37)</sup>。

#### (5) 無文浅鉢

無文浅鉢は全体の14.5%を占める。I~VI類に大分類したがそのうち直状の形態を有するIV類が69点で59.5%と6割近くを占めている。次いで内湾するII・III類が30点で25.9%である。IV類は小森岡遺跡や洗谷貝塚に少数ながら類例を見ることができるが、IV-①類のように内面を肥厚させるタイプは認められない。II類は焼成前に1対の小孔を穿つ例が多く見られるが、使用方法と関連があるのであろうか。II類も洗谷貝塚に類例がある。III・V・VI類は本遺跡以外で類を見ないタイプであり、成立期の縁帶文土器に伴う土器である。

#### (6) 注口土器・双耳壺

两者共に南四国では中津式段階から見られる。中津式段階の注口土器は十川駄場崎遺跡<sup>(38)</sup>から1点出土しているが、それに比べて今次資料は注口部が長い。双耳壺は先に挙げた仕出原

表15 無文浅鉢型式分類

分類	点数	%
I	5	4.3
II	7	6.0
III-①	14	12.1
III-②	9	7.8
IV-①-④	25	21.6
IV-①-⑤	21	18.1
IV-②	23	19.8
V	11	9.3
VI	1	0.9
計	116	99.9

遺跡や十川駄場崎遺跡から各1点出土している。今回は1遺跡で3点の出土であり当該期が双耳壺の盛行期である可能性を示している。

以上各器種別に検討を行って来た結果、少量の宿毛式・福田KⅡ式及び搬入品を除いて残った有文深鉢Ⅲ～Ⅳ類、Ⅴ～Ⅵ類、粗製深鉢Ⅰ・Ⅱ類、有文浅鉢Ⅱ～Ⅳ類、粗製浅鉢は、当遺跡における成立期の縁帯文土器あるいは成立期の縁帯文土器様式を構成する諸型式として把握することが可能である。これらの土器群について遺跡名を付して松ノ木式土器として新たな型式名を設定したい。そして松ノ木式土器を南四国のみ存の編年体系の中に位置付ければ、宿毛式に続く型式とすることができます。

## 2 石器

今次調査で出土した石器組成は表-7に示した通りである。剥片・破片を除くと打ち欠き石錐が28点と最も多く47.5%を占めている。その形態の違いから細長い棒状のA類と比較的円形に近いB類に分けることができた。後期になると高知平野及び西部の諸遺跡では打ち欠き石錐が数多く出土するようになるが、そのほとんどがB類に属するものである。下表に提示した遺跡の中で三里遺跡<sup>(26)</sup>は松ノ木遺跡と同時期で、四万十川右岸の河岸段丘上にあり立地も共通しているが、石錐の形態はすべてB類に属するものである。地域差による漁撈法の違いであろうか。また土掘り具と言われている打製石斧が認められないのも松ノ木遺跡の特徴である。

表16 遺跡別石器組成表

器種	遺跡	松ノ木遺跡	西分増井遺跡	田村遺跡	片柏遺跡	三里遺跡
石錐	8点(19%)	29点(72.5%)	7点(8.0%)	0	0	
打製石斧	0	3点(7.5%)	54点(62.1%)	4点(14.8%)	2点(7.7%)	
磨製石斧	3点(7%)	3点(7.5%)	4点(4.6%)	1点(3.7%)	0	
石皿	0	0	0	1点(3.7%)	0	
石錐	28点(66.7%)	5点(12.5%)	22点(25.3%)	21点(77.8%)	24点(92.3%)	
打製石包丁	3点(7%)	0	0	0	0	

次に打製石包丁(330・331・333)について述べる。打製石包丁は3点出土しているが、この他にも剥片石器としたものの中には石包丁として使用されたものがあるかも知れない。333は外溝刃で比較的左右対称形をなしているのに対して、330・331は全く形態を異にするものである。すでに記したように両者の形態的特徴は、左右非対称で両短刃に大きさの異なる抉りを有することである。そして上下の長辺に刃部を造り出していることである。この抉りの大小の相異は短辺の長さに対応したものと考えることができる。このような言わば異形とも言える石包丁の出土例を四国島内に求めることはできない。山神遺跡(愛媛県)から後期後半に属する例として2点出土しているが左右対称形に近いものである<sup>(29)</sup>。しかしながら西日本全体に視野を広げれば僅少ではあるが類例を認めることができる。たとえば抉りの深い(330)は、帝

佐狭名越岩陰遺跡より出土した「糸巻状石器」<sup>(40)</sup>（報告書では「糸巻状で両側にえぐりを入れ、上下に内溝する刃部をもつ扁平異形のもの」<sup>(41)</sup>）とよく似ている。抉りは弱くなっているが類例は洗谷貝塚からも2点出土している。また類似相の最古の例としては縄文中期に遡る前谷遺跡<sup>(42)</sup>（鹿児島県）のものを挙げることができる。縄文時代の打製石包丁は、主として後期後半～晩期にかけて見られ。大石遺跡や三万田遺跡など九州の内陸部を中心に多数の例が知られており、賀川光夫氏<sup>(43)</sup>や高木正文氏<sup>(44)</sup>等諸先学によって紹介されている。しかしこれらの諸例の多くは左右対称をなすものであり、当遺跡や洗谷貝塚などに見られる左右非対称のものは形態的に異なる。私見ではこの相異を主として時間的な先後関係に起因するものと考えたい。すなわち左右非対称のタイプは、現状ではすべて縄文中期・後期前半に属するものであり、高木氏が紹介された「両端抉り込みの打製石庖丁」の先行形態として位置付けることができる。ただ当遺跡出土の（333）は、抉りを欠き左右対称のタイプに属している。従って先行形態のすべてが左右非対称抉り入りで占められていることを示すものではない。今後類例の増加をまって両タイプの系譜的な展開について検討をしなければならない。

さて、縄文時代の石包丁は、石鎌と共に雜穀の収穫具として理解され縄文農耕論の根柢の一つとされてきた。しかしその名称は、石包丁・石包丁状石器・石包丁様石器・穂摘具形石器・石刀などと称され統一性を欠いている。これは用途についてはほぼ共通の認識をもちながらも歴史的評価としては曖昧な位置付けしか与えられて來なかつた研究史上の経過を反映したものに他ならない。賀川氏は打製石包丁（石刀）について8つのタイプに分類して検討を試み、打製石包丁と磨製石包丁の変化を縄文時代～弥生時代、高地性集落～低湿地集落、更に畠作以前の農業～畠作農業に対置させている。そして打製石包丁の存在を「コメ栽培の農業とは基本的に」異なるアワ農法と関連付け、その系譜を中国黄土地帯に求めたのであった<sup>(45)</sup>。一方高木氏も、九州各地から出土した後期後半以降に属する「両端抉り込み」の打製石包丁36点を打製石鎌と共に紹介し、これらを穂摘具・穂刈り具として位置付けた。そして「両端抉り込みの打製石包丁」の系譜について中国の仰韶文化期に出現した畠作穀物の収穫具と関連付け、「これと九州の縄文時代後期後半とは時間的に大きな隔たりがあるが、九州の畠作穀類に直接にしろ、間接にしろ大陸からもたらされたはずである。」と結論付けている<sup>(46)</sup>。両氏は共に打製石包丁の系譜を中国新石器時代の雜穀収穫具に求めている。しかしながらすでに周知のようにこれら諸説については、彼我の時間的な差異を根拠に一般に認められるところとはならなかった。

しかし今や、打製石包丁が縄文中期に遡り、後期前半には中国・四国にも分布している事実は、これまで冷淡に取り扱われてきた縄文農耕論について再検討を迫るものである。中国仰韶文化期と縄文中期・後期前半との時間幅は、系譜を論ずるに障害として横たわっているものの、明らかに縮まりつつある。縄文時代の諸遺跡からは各種の雜穀類や栽培植物の存在が明らかになりつつあり、しかもそれは前期にまで遡っている。西日本各地では後期に至って遺跡数が急増しその立地も沖積平野に展開する例が増加しつつあり、これらの諸遺跡の石器組成の特徴と

して石鎌が極端に少なかつたり皆無の状況を示す結果が指摘されている。このような西日本の縄文農耕の存在を示す諸例は、かって藤森栄一氏らによって主張された中期農耕論とは無関係の。おそらく西日本の積極的な新石器文化の受容と展開を示すものであろう。

今や縄文時代の生業のあり方について大きな認識の転換を迫られつつあると言わなければならない。このような状況の中で佐々木高明氏は《初期的農耕社会》<sup>(45)</sup>という見解を示された。かかる状況は、縄文農耕の有無ではなくそのあり方についての積極的な研究が、歴史的発展の諸段階への位置付けとの関連の中で急務となってきた。このことは弥生時代の評価とも直結する重要な課題である。

## 第VII章 松ノ木式土器の提唱とその意義

松ノ木式土器は、南四国における成立期の縁帶文土器様式として一時期を画するものであり、既存の編年体系の中に新たに独立した一型式として位置付けることができる。松ノ木式土器成立の背景には、西日本から一部関東にかけて生起した縄文後期土器の器種分化、有文深鉢の口縁部と胴部文様の独立という新たな動向があることは言うまでもない。縁帶文土器の成立は、先行型式と縁帶文土器、更に後続型式との序列をめぐって、あるいは関東との時間的な併行関係を如何に理解するのかと言う問題を内包している。また著しい器種の分化や新たに登場する石器の存在等は、縄文後期前葉の社会的変化に照応した動向として理解しなければならない。ここでは四国を中心とする松ノ木式土器の分布や、上・内面施文と外面施文に示される成立期の縁帶文土器と後続型式の問題、縁帶文土器の成立と関東との関係などについて若干の考察を行おるものである。

四国において松ノ木式土器の類似相にいち早く着目し、独立した型式名を付したのは犬養徹夫氏であった。犬養氏は、小松川遺跡出土の土器の分析を通して独立した土器型として小松川式土器を設定し、その編年的位置を「六軒家I式（中津式土器）と六軒家式土器（福田K II式土器）との中間に位置」付けた<sup>(5)</sup>。しかしながら小松川式に特徴的な有文深鉢の肥厚した口縁部の沈線（上面施文型）や波頂部から直接的に垂下する沈線、胴部外面に施される顎著な条痕調整などは、宿毛式や福田K II式を経ないと出現し得ない文様意匠であり、松ノ木式と共通する要素が多く見られる。と同時に、犬養氏が提示された資料中にはボジティブな磨り消し縄文を有する土器が比較的多く見られ、更に松ノ木式でⅢ類とした土器も存在している。このような特徴は成立期の縁帶文土器よりも古い要素であり、松ノ木式と宿毛式あるいは福田K II式をつなぐステージとして編年的位置付けを考えなければならない。今一つ小松川式土器で注目すべきことは、上面施文型の口縁と外面施文型の口縁部を有する有文深鉢が共存しているという事実である。松ノ木式以前の段階に外面施文型の口縁部と上面施文型の口縁部を有する有文深鉢が共存していることは、後述する縁帶文土器の展開を検討するうえで重要な資料となる。

本県における松ノ木式の分布は、先に挙げた宿毛貝塚・片柏遺跡の他にも三里遺跡・躑躅山遺跡<sup>(46)</sup>・庄司ヶ市遺跡<sup>(47)</sup>・川口遺跡<sup>(48)</sup>・山根遺跡<sup>(49)</sup>・永野遺跡<sup>(50)</sup>などから出土しており、わけても三里遺跡はこの段階に盛行期を見せている。三里遺跡では外面施文型の有文深鉢を伴い、石包丁状石器も出土している。これらの遺跡出土の類似土器については、宿毛式・平城式・彦崎I式などと呼ばれて來たが、今後は南四国における成立期の縁帶文土器として位置付けなければならない。本県における縄文時代の遺跡は、西部を中心に中津式段階から増加しあるが、松ノ木式の段階は全県的な広がりを持つことが予想され、遺跡の分布においても当該期は一つの画期をなすことが指摘できる。

次に土器組成について見ると、松ノ木式は有文深鉢・粗製深鉢・有文浅鉢・無文浅鉢・粗製

浅鉢・注口土器・双耳壺によって構成され、更に各器種ごとに多くのバリエーションが存在する。一般的に後期になると器種分化が認められると言われているが、先行する諸型式に比べても当該期のバリエーションの豊富さは極めて顕著な現象としなければならない。わけても松ノ木遺跡は当該期の他の諸遺跡と比較した場合、特にバリエーションが豊富である。このことは遺跡の性格や土器出土空間の性格とも深い関係があるのかも知れない。有文深鉢の主要なものはⅢ～Ⅸ類からなっているが、これらを口縁部の特徴からまとめてみると、Ⅲ～Ⅵ類が上・内面施文型、Ⅶ類が施文省略型、Ⅷ・Ⅹ類が、外面施文型として把握することができる。上・内面施文型は83.8%，施文省略型2.1%，外面施文型5%であり、上・内面施文型が圧倒的に多く他2者は1割にも満たないが、当該期の土器様式を構成する型式として把握することができる。有文浅鉢・無文浅鉢の量的に保証された存在にも剋目しなければならない。両者は全体の中で23.4%を占めており当該期の諸遺跡例と比べても格段に高い比率を表している。たとえば小森岡遺跡では有文・無文の浅鉢をあわせても3.1%，今安棄寺遺跡では7.2%である。浅鉢の減少傾向を当該における土器組成の特徴とする見解もあるが、松ノ木遺跡からはそのような傾向は全く見出すことはできない再考を要する。Ⅲ類に代表される有文浅鉢は、先述したように各地の遺跡から少量出土しており当該期の土器組成の一つをなしているが、松ノ木遺跡のような集中的な出土例は特殊例に属し別の背景を考えなければならないのかも知れない。すなわち時期は中前期に遡るが、「日常使用されている土器の組成とは異なった」土器群か、「何らかの特別な活動を通じて選択的に投棄された可能性もある。」<sup>(51)</sup>との指摘もあり、今後土器廃棄のあり方についての追求も必要である。

当該期にこれほどの高比率で浅鉢が存在する事実は、そして土器の組成が「その用途を通じてあらわれた事象によって〈人々の集団を規定し、特徴づけるもの〉として把握される。」<sup>(52)</sup>以上浅鉢の機能を高頻度に必要とする社会のあり方を反映したものとして理解しなければならない。すなわち食生活様式における大きな変化のあったことを意味し、これは後期社会の構造的な問題に関連する事象であり今後遺跡の立地や生業など多方面からの研究の必要性を提起するものである。

次いで成立期の縁帶文土器の編年的位置付け、及びその後の展開について触れなければならない。周知のごとくこの2つの問題については、近年多くの研究者による活発な論議が展開されており、その現状と課題については千葉氏の最近の論考に端的に整理されている<sup>(53)</sup>。従ってここでは主として後続型式との関係について所見を述べたいと思う。南四国における成立期の縁帶文土器である松ノ木式土器は、福田K II式あるいは宿毛式の変化から小松川式土器の段階を経て成立したものであり、近畿〈広瀬土壙40段階〉や山陰の布勢式及び東九州の小池原下層式には併行関係を求めることができる。ただ〈広瀬土壙40段階〉から出土の関東系土器（堀之内I式）と当遺跡出土の関東系土器（88 堀之内I式）には時期差があり、(88)の方が古相を帯びているので若干の先後関係は認めなければならない。

成立期の縁帶文土器に後続する型式を考える時、議論の焦点は口縁部文様帯の上・内面施文型と外面施文型の存在とその後の展開のあり方についてであり、このことの理解と見通しの相違によって後続型式の編年序列が異なってくるのである。すなわち津雲A式→彦崎K I式か津雲A式と彦崎K I式の併存かである。筆者の結論を先に述べれば、両者は縁帶文土器という共通の要素をもちながら系譜を異なる相互に独立した別型式として共時に存在し、地域と時間差によってその組成比率を異にしながら展開すると考える。前者の立場に立つ千葉氏は、上・内面施文型→外面施文型への変化を成立期の縁帶文土器→津雲A式・北白川上層式への変化として把握し、その変化の典型を山陰の土器の動向の中に見出し、「外面施文型口縁の獲得に関しては、連続的変遷が辿られる近畿・北部・山陰東部の影響とみとめる必要がある。」<sup>(12)</sup>と結論している。しかし山陰からの影響によって近畿・瀬戸内・四国などの外面施文型の口縁部が成立するのであろうか。上・内面施文型→外面施文型の変化を地域的・極地的に生起する現象として否定するものではないが、多くの地域で内面施文型縁帶文土器が成立した段階に、すでに外面施文型縁帶文土器も成立している事をどう解釈するのであらか。一方西脇対名夫氏は、外面施文型の縁帶文土器が西方から普及するまでは、瀬戸内や近畿では「内側に折れ曲った口縁ばかりが有力だった。」<sup>(54)</sup>とする考え方も成立し難い。両者は成立期の段階ですでに共存しているのである。松ノ木式のⅢ～Ⅵ類とⅦ・Ⅷ類がそのことに対応し、洗谷貝塚Ⅴ類・森の宮Ⅴ群の中にも両者は存在し、松ノ木式に先行するとした小松川式の段階においてもすでに両者が見られる。更に外面施文型の段階である北白川上層式Ⅰ期や津雲A式それ自身の中にも少量ではあるが内面施文土器は存在している。このような事実を如何に理解すべきか。更にその後の展開にても仏並遺跡71-O Dにおいて外面施文型30%に対して、上・内面施文型が7%，素縁（施文省略型）17%の比率で存在し、北白川上層式Ⅱ期以降の資料であるが淡輪遺跡においても両者共存している。また地域が異なるが中原遺跡<sup>(55)</sup>（鹿児島）においても高橋謙氏が指摘するように上・内面施文型と外面施文型が共存している。このことは両者が時間的な先後関係にあるのではなく、ほぼ西日本の全域にわたって縁帶文土器様式を構成する主要な二者として位置付けることを可能とするものである。従って瀬戸内や近畿・四国においては、上・内面施文型は彦崎K I式に、外面施文型は津雲A式へとつながり展開をなすのである。文京遺跡<sup>(56)</sup>や永井遺跡X層<sup>(57)</sup>からは津雲A式が、橋ノ口遺跡<sup>(58)</sup>（香川）では彦崎K I式がまとまって出土している。しかしこれらの出土状況が当該期の土器組成を十分に示しているものとは考えられない。以上、両型式の差は系譜に根ざしたものであることを述べたが、これで問題が解決した訳ではない。上・内面施文型は成立期の縁帶文土器の段階に至って始めて出現する型式であり、その口縁部文様・形態共に齊一的である。それに対して外面施文型の口縁は、先にも挙げたように口縁部文様帯と胴部文様帯が独立する以前、すなわち成立期の縁帶文土器以前の段階にすでに先行型式が存在している。いわば伝統的な型式と言うことができよう。このことは外面施文型の口縁部に現われた文様意匠が、上・内面施文型に比べると齊一性に欠け、地域色

が窺える点を指摘したい。すなわち北白川上層Ⅰ式に代表される近畿は重輪や弧文状の文様が多く用され、九州や西南四国においては区画文が比較的に多く用いられる傾向がある。このような観点からこれまで津雲A式、あるいは北白川上層式Ⅰ期として呼称されてきた外面施文型口縁部の発達の諸段階について、各地域での検討が必要である。このことは前章で触れた胴部文様の展開とも連動したものであろう。田中良之氏は頸部文様について「強い地域性を持っていた可能性」<sup>(58)</sup>を指摘している。田中氏の示した縁帶文土器の編年觀とは見解を異にするものであるが、齊一性と在来性との統一的な把握は重要な視点であり、上・内面施文型に示された齊一性的な側面と外面施文型に現われた伝統的・在地的な要素を有する展開が、縁帶文土器段階の特徴でありその両側面が、西日本のほぼ全域に分布を拡大する要因ともなったのである。

最後に関東との関係について触れたい。縁帶文土器の成立には、福田KⅡ式に由来する伝統と共に関東系の土器の影響があったとする見解は多くの研究者の指摘するところであり、その根拠として「集線文系の文様群」・「多重半円文」などの集合沈線が関東起源であるとする考え方である。このことについても前章で述べたように堀之内Ⅰ式に集合沈線が盛行する時期は西日本で成立期の縁帶文土器が出現する時期よりも後出であり、関東の影響によって成立したとは考え難い。集合沈線が西日本東部に集中することは事実であり、当地域の伝統に生起した文様と考えたい。頸部無文帶の創出も関東と連動した動きであり関東が発信源であるとは確定できない。西日本からの影響である可能性も多分に残されている。中期末から後期初めに東日本から数多くの物質的・精神的文化の流入があったことは事実であり、東日本文化複合体の強い影響を受けたことは否めない。しかしながら中津式に始まった粗製深鉢や当該期に認められる浅鉢の増加などに現われた著しい器種分化、また新しい生産用具である打製石包丁の普及などにみられる変化は、西日本縄文後期社会の中で発現したものであり東日本文化複合体の西進によって生じたものではない。西日本のこのような新しい動き、あるいは「西日本文化複合体」のもつ積極性を歴史的な発展段階を示すものとして評価したい。松ノ木式土器=成立期の縁帶文土器は、まさにこのような後期社会の中で一時期を画する様式として登場したものである。

註

- (1) 1991年本山村教育委員会が実施した発掘調査では、今次調査よりも多くの宿毛式土器が出土している。更に最近では県東部においても宿毛式土器の存在が知られるようになって来た。
- (2) 泉拓良・松井章『福田貝塚資料 山内清男考古資料2』奈良国立文化財研究所 1989年
- (3) 千葉豊「縁帶文土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」『史林』76巻2号 1989年
- (4) 小都隆編『洗谷貝塚』洗谷貝塚発掘調査団・福山市教育委員会 1976年
- (5) 大妻徹夫「西四国における小松川式土器の設定」『愛媛考古学』8・愛媛考古学協会 1985年
- (6) 森田尚宏『田村遺跡群』第1分冊 高知県教育委員会 1986年
- (7) 出原恵三「西分増井遺跡群発掘調査報告書」春野町教育委員会 1990年
- (8) 久保樟二郎「鳥取県下における後期前業から中業にかけての縄文土器の変遷について－S I 0 1出土No. 9 土器の縦年位置付け－」『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会 1987年
- (9) 植田文雄「今安寺遺跡縄文後期土器の検討」『今安寺遺跡』滋賀県能登川町教育委員会 1990年
- (10) 岡山大学理系文化財調査研究センター「岡山大学構内遺跡調査研究年報」五 1988年
- (11) 千葉豊「縄文土器」「小森岡遺跡」兵庫県竹野町教育委員会 1990年
- (12) 千葉豊「近畿北部・山陰東部の成立期縁帶文土器」「小森岡遺跡」同上
- (13) 福井県大野市教育委員会「右近次郎遺跡」II 1985年
- (14) 岩崎二郎「仏並遺跡71-0Dの縄文土器」「動大阪府埋蔵文化協会研究紀要1」大阪府文化財協会 1988年
- (15) 註(3)所収
- (16) 木村剛朗「土佐における後期縄文文化について」『高知の研究』1・地質・考古 清文堂 1983年 所収より転載 図示した土器が確実に中津式土器に併行するのかどうかについては再検討を要するが当Ⅳ類よりは古相と考えている。少なくとも胴部文様については当地において、このような文様が先行して存在する以上福田K II式に系譜を求めるよりは在地的な土器文様の展開の中に求めるべきであろう。
- (17) 泉拓良「縁帶文土器様式」「縄文土器大観」4 小学館 1989年
- (18) 石井寛「南関東西南部（多摩丘陵以南）堀之内式土器シンポジウム資料」1987年
- (19) 田中耕作「三十幅場式土器様式」「縄文土器大観」4 小学館 1989年
- (20) 「仏並遺跡」大阪府埋蔵文化財協会 1986年
- (21) 今村哲爾「称名寺式土器の研究」上『考古学雑誌』63-1 日本考古学会 1977年
- (22) 和歌山県教育委員会「下尾井遺跡」「和歌山県史」考古資料 19 年 国528
- (23) 千葉豊「鎌崎・北久根山式期における近畿・瀬戸内の土器様相」「第7回九州縄文研究会資料」

1988年 所収 図3-14

- 04 松尾信裕「縄文土器」「森の宮遺跡第三次・四次発掘調査報告書」大阪市文化財協会 1978年
- 05 岡本健児「宿毛貝塚出土縄文式土器の再検討」「研究誌」第5号 高知県立高知小津高等学校 1966年
- 06 岡本健児・広田典夫・木村剛朗「三里遺跡」高知県中村市教育委員会 1978年
- 07 前掲註01 Fig. 25の323
- 08 安岡源一・酒詰仲男・岡本健児「宿毛貝塚」「高知県史跡名勝天然記念物調査報告第4集」高知県教育委員会 1951年
- 09 犬養徹夫他「岩谷遺跡」(愛媛県北宇和郡広見町)岩谷遺跡発掘調査団 1979年
- 10 大平要「県内縄文遺跡出土の多孔底土器について」「瀬戸内海歴史民族資料館だより」第2号 1975年
- 11 中村孝三郎・寺村光晴「縄文文化に於ける獸様土器——特に越後発見の多孔底土器を中心として——」「考古学雑誌」42巻1号 1956年
- 12 岡本健児・広田典夫・木村剛朗「高知県片瀬遺跡」高知県教育委員会 1975年
- 13 徳島考古学研究グループ「東禅寺縄文遺跡発掘調査の概要」徳島県鳴門町教育委員会 1972年
- 14 鳥取県西見町教育委員会「ヨレ遺跡現地説明会資料」1991年
- 15 足立克己「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」「東アジアの考古と歴史」中岡崎敬先生退官記念論集 1987年
- 16 渡部明夫「永井遺跡」香川県教育委員会 1990年
- 17 泉拓良・家根祥多他「京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ」京都大学埋蔵文化財センター 1985年
- 18 山本哲也「十川駁場崎遺跡発掘調査報告書」十和村教育委員会 1988年
- 19 永井数秋「山神遺跡」「愛媛県史」資料編 考古 1986年
- 20 松崎寿和「広島県の考古学」吉川弘文館 1981年
- 21 川越哲志「帝釈名越岩陰遺跡の調査」「帝釈状遺跡群」帝釈状遺跡群発掘調査団編 1976年
- 22 「前谷遺跡」鹿児島県松山町教育委員会 1986年
- 23 賀川光夫「縄文晩期農耕文化に関する一問題—石刀抜法—」「考古学雑誌」52巻4号 1967年
- 24 高木正文「九州縄文時代の収穫用石器」「鏡山猛先生古稀記念古文化論叢」1980年
- 25 佐々木高明「日本の歴史」1 日本書生 集英社 1991年
- 26 木村剛朗「通響山遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」轄多摩文研 1987年
- 27 木村剛朗「庄司ヶ市遺跡」同上
- 28 木村剛朗「川口遺跡」同上
- 29 岡本健児・広田典夫「山根・石屋敷遺跡」春野町教育委員会 1976年
- 30 岡本健児・木村剛朗「水野遺跡出土の遺物」高知県栗山村教育委員会 1978年
- 31 三宮昌宏・合田幸美他「小阪遺跡(その6-3)」大阪府教育委員会・動 大阪府文化財センター

1989年

- 52 高橋謙「土器とその型式」『考古学手帖』1 1958年
- 53 千葉豊「西日本縄文後期土器の二三の問題——瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題」『古代吉備』第14集 1992年
- 54 西脇対名夫「伊木力遺跡出土縄文時代後期土器の検討」『伊木力遺跡』多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編 1990年
- 55 新東晃一「中原遺跡」鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会 1985年
- 56 宮本一夫「文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討」『文京遺跡第8・9・11次調査』愛媛大学法文学部考古学研究室・同埋蔵文化財調査室 1990年
- 57 計25件収
- 58 田中良之・松永幸男「広域土器分布図の諸相——縄文時代後期西日本における類似様式の並立」『古文化論叢』第14集 1984年
- 59 国本健児「高知県史・考古資料編」 高知県

## 遺物観察表

探査番号	出土地點	器種	口径 法縫 深さ 測定 実際	分類	粘土・色調	各 種			備考
						縄文 施り	器面調整	文様他	
第8回 -1	IV層 有文献鉢				1~2mmの砂粒 灰山ガラス	X.L.	内:ナデ 外:ナデ	C状の系形文	外縁斜ける 厚壁4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白 淡赤色		内:ナデ	小縫竹管による押引き、裏面 は凸凹が著しい。	厚壁4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白 淡赤色		内:ナデ	縦縫起削を施し、側に削付し その上を平削り等で丁寧で押 引き。	厚壁4mm
					*	X.L.	*	縦縫起削を部分的に削付し、 その上から手筋打削皮の工具 で削除する。	厚壁5mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色		外:ナデ 内:*	口沿部既打、半縫合費力工具 (上段)と複合工具(下段) による押引き、裏面内が削 除される。	厚壁3~4mm 外縁斜ける
第9回 -7	753	*	口径24.6		0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色		内:ナデ	口縫に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜 厚壁3mm 外縁斜ける
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	X.L.	外:摩擦 内:*	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜 厚壁3mm 外縁斜ける
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:*	底面削下から3本を剥離しす る。口縫部に施すに付加せず、手筋 竹管による削除で、裏面内が削除 された上に手筋打削皮の工具で削 除する。	外縁斜3~ 4mm
					*	*	外:ナデ 内:*	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:*	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
第10回 -18	直縫	*		I. 細	0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色		外:摩擦 内:*	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜 厚壁3mm 外縁斜ける
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:*	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:*	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:*	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:*	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
第11回 -26	直縫	*	口径27	II-A -②	0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色		外:ナデ 内:ナデ	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:ナデ	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:ナデ	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:ナデ	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm
					0.5~2mmの砂粒 灰石・灰白・角閃石 茶褐色	*	外:ナデ 内:ナデ	口縫部に施すに付加せず、手筋竹管 による削除で、裏面内が削除され た上に手筋打削皮の工具で削除する。	外縁斜3~ 4mm

## 遺物観察表

辨明番号	出土地点	器種	口徑 法量 (cm)	口径 等高 測定 結果	分類	粘土・色調	器			備考	
							蓋		文様		
							萬文 掛り	表面調整			
第11回 -27	鹿丸地	有文漆鉢	口径 29	N-D	0.5-2 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 茶褐色	R.L.	外：朱赤 内：ナゲ	口部は圓錐形を呈し、外側に 鋸歯状、底部外側に凹凸状、上部底に ドツ	外銀掛ける。		
+ 28	日暮	*	* 33.5	N-A	0.5-2 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 火山ガラス 茶褐色		外：朱赤 内： *	口部は圓錐形を呈し、外側に 鋸歯状、底部外側に凹凸状、上部底に ドツ。底成後ののが あり。	外銀掛ける。 外銀掛ける。 内銀掛ける。 外銀掛ける。 外銀掛ける。 外銀掛ける。		
第12回 -29	吉原	*		*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 火山ガラス 茶褐色		外：朱赤 内： *	口部は圓錐形を呈し、外側に 鋸歯状、底部外側に凹凸状、上部底に ドツ。底成後ののが あり。	外銀掛ける。		
+ 30	441-443 588	*	口径 30.0	*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 火山ガラス 茶褐色		外：朱赤 内： *	口部に耳状の突起がつづけ、 底部外側に凹凸状、上部底に ドツ。底成後ののが あり。	* 外銀掛ける。		
+ 31	鹿丸地	*		*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 火山ガラス 茶褐色		外： *	口部は圓錐形を呈し、外側に 鋸歯状、底部外側に凹凸状、上部底に ドツ。底成後ののが あり。			
第13回 -32	37	*		*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 火山ガラス 茶褐色		外：朱赤 内： *	口部に圓錐形を呈し、底部外側に 凹凸状、上部底に ドツ。底成後ののが あり。	外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 33	718	*		*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 火山ガラス 茶褐色		外：朱赤 内： *	口部は圓錐形を呈し、底部外側に 凹凸状、上部底に ドツ。底成後ののが あり。	内・外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 34	165 174	*	口径 24.6	V-A	*		外：ナゲ 内：ナゲ	口部は圓錐形を呈し、底部外側に 凹凸状、上部底に ドツ。底成後ののが あり。	内・外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 35	616	*	* 23.7	N-A	0.5-2 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 茶褐色		外：朱赤 内： *	口部は圓錐形を呈し、底部外側に 凹凸状、上部底に ドツ。底成後ののが あり。	外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 36	244	*	* 44.6	*	0.5-2 mmの砂粒 チャート 淡茶色		外：朱赤 内：ナゲ	口部は圓錐形を呈し、底部外側に 凹凸状、上部底に ドツ。底成後ののが あり。	外銀掛ける。 外銀掛ける。		
第14回 -37	4	*	* 19.5	*	0.5-2 mmの砂粒 石英片岩・火石・角 閃石・火山ガラス 茶褐色		外：ナゲ 内：ハケ	底成後に2個の刺立点、口部 は圓錐形と鋸歯状、底部外側に 凹凸状による区画文、 上部底に ドツ。	外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 38	229-334	*		N-B	*	R.L.	外：朱赤 内：ナゲ	口部に圓錐形の突起。尖端部 に縦溝を有せず、 その間に横溝を有する。 底部外側に 凹凸状のドツ。	外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 39	473-614	*	口径 34.2	*	0.5-7 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 火石 茶褐色		外：朱赤 内： *	口部は圓錐形と鋸歯状、底部外側は 凹凸状位に走る横溝、 上部底に ドツ。	内・外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 40	372-686	*	* 37.2	*	0.5-2 mmの砂粒 チャート 淡茶色		外：ナゲ 内：ナゲ	口部に大・小の突起。小突起 部には縦溝を有する。 底部外側は 凹凸状位に走る横溝を有する。 上部底に ドツ。	外銀掛ける。 外銀掛ける。		
第15回 -41	吉原	*	* 30.3	*	0.5-3 mmの砂粒 石英・長石・角閃石 茶褐色	*	外：朱赤 内：ハケ	口部は圓錐形と鋸歯状、底部外側は 凹凸状位に走る横溝、 上部底に ドツ。	外銀掛ける。		
+ 42	50	*	* 31.8	*		*	外：朱赤 内： *	口部は圓錐形と鋸歯状、 底部外側は 凹凸状位に走る横溝、 上部底に ドツ。	*		
+ 43	246-492 -635 鹿丸地	*	* 17.4	*		*	外：ナゲ 内：ハケ	口部は圓錐形と鋸歯状、底部外側は 凹凸状位に走る横溝、 上部底に ドツ。	外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 44	鹿丸地	*		*	0.5-2 mmの砂粒 チャート 淡茶色		外：朱赤 内：不明	口部に大・小の突起。口部 に2本の沈線。外側に横溝、 底部外側に 凹凸状位に走る横溝を有する。	外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 45	32	*	口径 39.9	*	0.5-2 mmの砂粒 チャート 淡茶色		外：朱赤 内： *	口部は圓錐形と鋸歯状、底部外側は 凹凸状位に走る横溝、 上部底に ドツ。	内・外銀掛ける。 外銀掛ける。		
第16回 -46	鹿丸地	*	* 31.5	*	0.5-2 mmの砂粒 チャート 淡茶色		外：ナゲ 内：ナゲ	口部は圓錐形と鋸歯状、底部外側は 凹凸状位に走る横溝、 上部底に ドツ。			
+ 47	800	*	* 33	*	0.5-2 mm砂粒 チャート 淡茶色		外：朱赤 内：ハケと 横溝	口部は圓錐形と鋸歯状、底部外側は 凹凸状位に走る横溝、 上部底に ドツ。	外銀掛ける。		
+ 48	吉原	*	* 30	N-D	0.5-2 mmの砂粒 チャート 淡茶色		外：朱赤 内： *	口部は圓錐形と鋸歯状、底部外側は 凹凸状位に走る横溝、 上部底に ドツ。	内・外銀掛ける。 外銀掛ける。		
+ 49	790	*		N-E	0.5-2 mmの砂粒 チャート 淡茶色		外：不明 内： *	口部に大・小の突起。突起間に2箇の 横溝を有する。	外銀掛ける。		

## 造物観察表

標図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胸径 底径	分類	胎土・色調	特徴			備考
							織文 彫り	器面質	文様他	
第16回 -50	横浜港 右太津神	口付 37.2	V-E	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色		外: 塗装 内: ハケ	波瀬部に輪突実。口唇波瀬と 底波瀬			外側剥ける
第17回 -51	7.207 805-538 V層 植	*	*	27	V-C	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 突起ナ 内: *			外側剥ける 波瀬幅2-3mm
* 52	横浜	*			V-E	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 塗装 内: *			波瀬幅2.5mm
* 53	10	*	口付 35.5	*	V-E	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 突起ナ 内: *			外側剥ける 波瀬幅2mm
* 54	616	*			V-E	ナ 暗赤色	外: ナテ 内: 塗装	波瀬口縁。口唇は波瀬と削目 波瀬	+3-4mm	外側剥ける
* 55	39	*	口付 36.9	*	V-E	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 塗装 内: ナテ	口唇3本の波瀬。外側文帯		波瀬幅4mm
第18回 -56	日神	*	*	24	*			口唇波瀬、削目	+3-4mm	
* 57	横浜港	*	*	35.5	*	0.5-1mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: ナテ 内: *			内面剥ける 波瀬幅4mm
* 58	横浜港 296	*	*	39.9	V-A	ナ 暗赤色	外: ナテ 内: *	口唇に輪突実の波瀬縁。頭部 波瀬束束・波瀬、波瀬幅のドナ 凹凸		
* 59	横浜港	*	*	37	V	ナ 暗赤色	外: 塗装 内: *	口唇3本の波瀬。削目5削 波の化粧。ドテなし		外側剥 波瀬幅3-4mm
* 60	*	*			*	*	外: 塗装 内: *	口唇部2本の波瀬と底火 ドテなし		波瀬内に塗 外側剥ける 波瀬幅3-4mm
* 61	200 116	*	口付 21.6	V-A	0.5-3mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 塗装 内: *	口唇部波瀬と削目波瀬。削目外 部は波瀬。波瀬縁に波瀬			外側剥 波瀬幅3-4mm
* 62	865	*	*	33.1	V-B	0.5-3mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 塗装 内: *	削目部2本の波瀬。削目 内側は波瀬縁。波瀬縁に波瀬		内・外側剥 波瀬幅3mm
第19回 -63	246-256 テラス床	*	*	35.5	*					
* 64	315-319	*	*	24	*					
* 65	440	*			V-C	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 塗装 内: ハケ	口唇に削目波瀬。削目部は削 波の波紋を斜めに施す。波瀬 縁のドテ有る		
* 66	日・吉原	*	口付 31.2	V-B	0.5-3mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 塗装 内: *	口唇に削目2個の波瀬。口唇 に2本の波瀬の盛り出しが有る			内・外側剥 波瀬幅3mm
第20回 -67	46-193 テラス床	*	*	29.1	V-C					
* 68	日・吉原	*			V-E	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 塗装 内: *	口唇部2本の波瀬。削目外 部は波瀬が盛り		
* 69	789	粗製波瀬	口付 30	I-A	0.5-7mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: * 内: *	口唇部波瀬。削目文 縁に波瀬後から孔孔あり			外側剥ける
* 70	473-614	*	*	35.1	*	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: ナテ 内: *	口唇に突起。口唇部波瀬		
* 71	横浜 右太津神				V-E	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: ナテ 内: *	口唇部波瀬。沈縫化合部に3 割の削目有る		外側剥ける
第21回 -72	日原	*	口付 25.4	V-E	0.5-2mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: 塗装 内: *	口唇に小凹凸。2個の削目文 縁に波瀬後と削目波瀬			内・外側剥 波瀬幅3mm
* 73	横浜	*			*	0.5-1mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: *	口唇部2本の波瀬。ドテなし		
* 74	日	*			*	0.5-3mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: *	口唇部波瀬と削目文		
* 75	636	*	口付 37.5	*	*	0.5-3mmの砂粒 ナット・底は 暗赤色	外: * 内: *	口唇部に削波		
* 76	横浜	*			*		外: 塗装 内: ナテ	口唇部に削波と削目波瀬 縁にドテ		波瀬幅5mm

## 遺物観察表

辨別番号	出土地点	器種	口径 法算 (cm)	口徑 高さ 側柱 底柱	分類	粘土・色調	器 形 概 要			備考	
							横文 熱り	唇面調査	文様他		
							外: 実いナ ガ内: +	口唇部沈縮と冠沈縮			
第21回 -77	鹿丸堀 W端	有支脚杯			V-E	0.5~1.5cmの砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	外: 実いナ ガ内: +	口唇部沈縮と冠沈縮		外縁に 沈縮幅5mm	
* 78	615	*	口径 19.3		V-A	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	外: 備貝条 内: ナダ	口唇部斜面に沈縮文 形模様にドテあり		外縁に 沈縮幅2mm	
第22回 -79	594	*	+ 20.1	*			外: ナダ	上唇部斜面に 側柱外縫模様の沈縮		沈縮幅3mm	
* 80	250	*	+ 17.1		V-C	0.5~1.5cmの砂粒 石英・結晶片付 褐色	外: 不明	口唇部斜面に 側柱外縫模様文			
* 81	192	*	+ 19.8		V-A	0.5~2cmの砂粒 チャート・石英・結 晶片付 褐色	外: ナダ 内: +	口唇部斜面に、底部に3本の垂 れ柱と側柱に垂れ柱 に沈縮に付する。	沈縮幅3mm		
* 82	244 N端	*	+ 19.5		V-B	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石・火山ガ ラス付 褐色	R-L	外: 滑り 内: +	外縫部斜面に 側柱外縫に垂れ柱 を付する。側柱 を付する。	外縫部 側柱外縫 幅3mm	
* 83	777	*	+ 24		V	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	外: ナダ 内: +	口縫部外縫に側柱2.4mm、 底部3本の執士巻を付付し、側柱 に沈縮を付す。	外縫に 沈縮幅3mm		
* 84	810	*	+ 24.9	*			外: 滑り 内: +	口縫部外縫に側柱2.4mm、 底部3本の執士巻を付付し、 側柱を付す。	*		
* 85	鹿丸堀	*			V-B	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	R-L	外: 滑り 内: +	口縫部圓筒文地に2本の沈縮	沈縮幅3~ 4mm	
* 86	*	*				0.5~2cmの砂粒 チャートが多い 褐色	外: ナダ 内: +	口縫部外縫を厚厚し、文様等 と付する。 側柱に沈縮を付す。	+ 3mm		
* 87	242	*	口径 25.5		XIV	磨滅された粘土で 底はほとんど保存す る。	外: 滑り 内: +	口縫部外縫に沈縮、側柱に垂れ柱 に沈縮を付す。			
* 88	鹿丸堀	*			XII	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石	外: 各底の 内: ナダ	底凹凸部、底面等に側柱によ る文様を施す。側柱の内側に 沈縮模様を付す。	外縫に 沈縮幅2mm		
第23回 -89	*	*			XIII	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石	外: 備貝条 内: ナダ	口縫部底に沈縮と 側柱外縫に付する。	外縫に 沈縮幅4mm		
* 90	265	*			XI	0.5~2cmの砂粒 チャート・滑石・共 通模様	L-R	外: ナダ 内: +	口縫部内縫上面から2層の側 柱と上縫は側柱を付する ものと付する。	外縫に 沈縮幅2mm	
* 91	222	*			XIII	1mm程度の砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	外: ナダ 内: +	頭部底に文様、胸縫に沈縮文	内縫に 沈縮幅2mm		
* 92	V端	*	口径 21		X-I-③	0.5~3cmの砂粒 石英・黄石・チャート 褐色	外: ハケ 内: +	口縫に沈縮と冠沈縮	内・外縫 に 沈縮		
* 93	282	*	+ 18.3	*			外: ナダ 内: +	*	+ 3mm 外縫熱帯帶		
* 94	348 V端	*	底径 6		XV	0.5~3cmの砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	外: 備貝条 内: +	胸縫外縫側上縫2mmの底 部を側柱と付する。	側柱外縫 側柱	側柱外縫 側柱	
* 95	鹿丸堀	*			XIV	0.5~2cmの砂粒 石英・角閃石・黄石 褐色	R-L	外: ナダ 内: +	胸縫外縫全縫文		
* 96	113 V端	*	口径 28.4		X-I-①	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石 褐色	外: ナダ 内: +	口縫部内縫、口縫の4分縫位 に側柱を付する。			
第24回 -97	320	*	+ 52		X-V	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	R-L	外: 備貝条 内: +	口縫に沈縮、外縫に文様、胸 縫に文様と側柱に付する。	沈縮幅4mm	
* 98	117-150 132 134 136 138 140 鹿丸堀	*	+ 44.8		V-E	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	外: +	口縫の4分縫位に文様、そ の側柱を付する。			
第25回 -99	473	*	+ 27.6		X-④	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	外: ナダ 内: +	口縫部圓筒文、底面等に2層 の側柱を重ねさせた。沈縮幅 のナダ側柱	沈縮幅5mm		
* 100	512-235	*	+ 36.6		V-E	0.5~2cmの砂粒 チャート・多 孔質	外: 各底の 内: ナダ	口縫に沈縮と外縫に底面 に付する。	+ 3mm 外縫に付する		
* 101	604-844	*	+ 32.1	*		0.5~2cmの砂粒 チャート・砂岩 褐色	外: ハケ 内: +	底面に2個の側柱を付する 文様と側柱に付する。	沈縮幅4~ 5mm		
第26回 -102	514 V端	(陶器)			A	0.5~2cmの砂粒 石英・黄石・角閃石 褐色	外: ナダ 内: +	底面沈縮、底縫にドテ	外縫に 沈縮幅4mm		
* 103	鹿丸堀	*			A	0.5~2cmの砂粒 チャート・黄石・滑 石	外: 滑り 内: +	頭部外縫3本単位の底面沈縮	沈縮幅3mm		

## 遺物観察表

標印番号	出土地點	器種	法量 (cm)	口径 基部 底径 底径	分類	胎土・色調	特徴			備考
							織文 熱り	器面調整	文様	
第26回 -104	Ⅳ層	石文器物 (圓筒)			B	0.5-2 mmの砂粒 石英・長英石 黄褐色	L.R.	外:不明 内:ハゲ	複数の区段沈縫。沈縫外に織文、沈縫間にドナ	底部との接合部で欠損。 外周部7 cm 沈縫幅4 cm
* 105	後部層	*			*	粗造された胎土 黄褐色	L.R.	外:磨き 内:*	2 cmの複数沈縫をはさんで上下に構成され、沈縫部のドナなし	沈縫幅3 cm
* 106	Ⅳ層	*			A	0.5-2 mmの砂粒 チャート・石英・長 英石 黄褐色		外:無痕 内:ハゲ	縫に沿うる粗造沈縫。沈縫部にドナあり。	内外接合部 を除く 外周部 沈縫幅3-4 cm
* 107	473-526	*			*	1 mmの砂粒 石英・石英・角閃岩 黄褐色		外:全表面 内:ハゲ・ ナダ	複数の区段沈縫。沈縫部にドナ	外周部だけ 沈縫幅3-4 cm
* 108	467	*			B	0.5-2 mmの砂粒 チャート多 孔褐色	R.L.	外:磨き 内:*	入り組み文、区段沈縫内を構成 沈縫部にドナ	沈縫幅3-4 cm
* 109	786	*			*	0.5-2 mmの砂粒 石英・石英・角閃岩 黄褐色		外:全表面 内:ナダ	沈縫部粗造、区段外に部分的 に織文、沈縫部にドナ	沈縫幅4 cm
* 110	Ⅱ・Ⅲ層	*			*	0.5-2 mmの砂粒 チャート多 孔褐色		外:磨き 内:ナダ	沈縫部内を磨き、区段外は 織文	+ 3 cm
* 111	742	*			*				入縫み文、区段沈縫内を磨き 沈縫部に織文、沈縫部にドナ	+ 3 cm
* 112	屋上層 -107	*			*	0.5-2 mmの砂粒 チャート・石英 黄褐色	R.L.	外:ナダ 内:*	入縫み文、区段沈縫内ナダ、区段外織文 沈縫部のドナあり	+ 4 cm
第27回 -113	711	*			*	0.5-6 mmの砂粒 チャート多 孔褐色		外:ナダ 内:赤茶	区段沈縫内ナダ、区段外織文 沈縫部にドナあり	+ 3-4 cm
* 114	後部層	*			*	0.5-2 mmの砂粒 チャート・粗晶片岩 乳白色		外:ナダ 内:赤茶	沈縫で削られた幅広い織文帶	+ 4 cm
* 115	83	*			*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長英石・火成ガラス 灰茶色		外:毛皮風 内:*	入縫み文、沈縫部内磨き 沈縫部にドナ	+ 4 cm
* 116	後部層	*			*	赤茶		外:ナダ 内:ナダ	入縫み文、区段内磨き	+ 3 cm 内外接合部
* 117	*	*			*	黄褐色		外:ナダ 内:ナダ	*	+ 3 cm
* 118	*	*			*	0.5-2 mmの砂粒 チャート・火成ガラス		外:ナダ 内:全表面	沈縫部に織文 沈縫部にドナ	外周部ける 沈縫幅4 cm
* 119	*	*			*	0.5-3 mmの砂粒 石英・長英石・粗晶片岩 乳白色		外:ナダ 内:ナダ	入縫み文、沈縫部内磨き	外周部ける 沈縫幅3 cm
* 120	535	*			*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長英石・粗晶片岩 乳白色		外:全表面 内:ナダ	入縫み文、幅広い織文帶 沈縫部にドナ	外周部ける 沈縫幅5 cm
* 121	530	*			*	0.5-3 mmの砂粒 石英・長英石・粗晶片岩 乳白色		外:全表面 内:ハゲ	幅広い織文帶、沈縫部にドナ	沈縫幅4 cm
* 122	Ⅳ層	*			*		L.R.	外:磨き 内:*	前面カーブ状の縫合を模状に貼付。縫に沈縫を施す。	水印
* 123	Ⅲ層	*			*	0.5-2 mmの砂粒 チャート多 孔褐色	R.L.	外:ナダ 内:*	沈縫部外に幅広い織文帶 沈縫部にドナ	沈縫幅3 cm
* 124	後部	*			*	0.5-2 mmの砂粒 チャート・赤茶		外:磨き 内:ナダ	入縫み文、区段沈縫内柔軟性 沈縫部にドナ	沈縫幅4-5 cm
* 125	Ⅳ層	*			*	0.5-2 mmの砂粒 石英・石英・赤茶	R.L.	外:毛皮風 内:ナダ	沈縫部内に磨き。区内織文 沈縫部にドナ	沈縫幅5 cm
* 126	46	*			*	0.5-2 mmの砂粒 石英・石英・赤茶		外:ナダ 内:+	3方向から織文帯が下	
第28回 -127	Ⅳ層	*	測定 27.6		*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長英石・粗晶片岩 乳白色		外:磨き 内:赤茶	沈縫区段内磨き。区段外織文 沈縫幅5 cm 内外接合部	
* 128	33	*	*	27	*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長英石・粗晶片岩 乳白色		外:全表面 内:ナダ	長英石の粗造沈縫。区内には 織文を磨き、区段外織文、沈縫部にドナ	背面ける 沈縫幅4 cm
* 129	Ⅳ層	*			D	0.5-2 mmの砂粒 チャート・火成 黄褐色		外:毛皮風 内:ナダ	外周部織文	内形の一部 に推進層
* 130	Ⅳ層	*			C	0.5-2 mmの砂粒 石英・長英石・粗晶 片岩・乳白色		外:全表面 内:ナダ	豊富な火成を有する 沈縫部にドナ	沈縫幅4 cm
* 131	*	*			*	0.5-2 mmの砂粒 石英・長英石・粗晶 片岩・乳白色		外:全表面 内:ナダ	多角の沈縫を底下	外周部ける 沈縫幅2 cm

## 遺物観察表

博物館番号	出土地点	器種	寸法 法量 (m)	JIS 規格 基準 別種 基準	分類	粘土・色調	特徴			備考	
							風化 熱性	器皿調整	文様等		
第28回 -132	815 在文部省(新規)	口徑 胴径	22.0 23.3	C	0.5~3mmの砂粒 心灰・青灰石・黄石 基板	外:ナゲ 内:*	各面の状態が被覆 並びに底にアーチ	洗削痕なし	洗削痕なし	内面無ける。	
第29回 -134	30 磁製鉢	口徑 胴径	26.0 28.0	I-A	+	外:無 内:*	圓底の口唇に被覆 並びに底にアーチ	内面無ける。	内面無ける。	内面無ける。	
+ 135	49	口徑 胴径	26.0 28.0	+	0.5~2mmの砂粒 チャート・結晶片岩 基板	外:ナゲ 内:*	口唇に被覆	-	内面無ける。	内面無ける。	
+ 136	瓦盤	*	*	*	無質地	外:無 内:*	口唇に被	*	*	*	
+ 137	656	*	口径 胴径	26.7 32.8	0.5~3mmの砂粒 石英・黄石・黄色	外:ナゲ 内:ナゲ	器皿の右側 / 右脇の2種 が焼かれている。	*	*	内面無ける。	
+ 138	6~7	*	口径 胴径	34.8 39.4	0.5~2mmの砂粒 チャート多・黄褐色	外:窓内 内:*	口唇に被	*	*	内面無ける。	
+ 139	432~434	*	口径 胴径	36.0 37.5	I-B	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・灰色	外:無 内:*	*	*	内面無ける。	
+ 140	420	*	口径 胴径	43.0 46.0	*	*	外:無 内:無	*	*	内・外面無ける。	
第30回 -141	鹿丸屋	+	I-A	0.5~2mmの砂粒 チャート多・黑色	外:ナゲ 内:無	-	-	-	-	-	
+ 142	733	*	I-B	0.5~2mmの砂粒 結晶片岩多・灰茶色	外:不明 内:*	*	*	*	*	*	
+ 143	66	*	*	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・灰色	外:無 内:*	*	*	*	*	*	
+ 144	577	*	口径 胴径	20.8 22.0	+	0.5~2mmの砂粒 結晶片岩 灰色	外:無 内:ナゲ	*	*	*	
+ 145	*	*	口径 胴径	18.0 18.0	*	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・青灰石 基板	外:無 内:*	*	*	内面無ける。	
+ 146	383	*	口径 胴径	34.8 32.4	I-A	0.5~2mmの砂粒 チャート・結晶片岩 灰色	外:窓内 内:*	*	*	*	
+ 147	532	*	I-C	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・灰色	外:無 内:ナゲ	*	*	*	*	*	
+ 148	287	*	*	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・青灰石 基板	外:ナゲ 内:*	*	*	*	*	*	
+ 149	瓦盤	*	I-B	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・灰色	外:無 内:*	*	*	*	*	内面無ける。	
+ 150	無記	*	I-C	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・青灰石 基板	外:ナゲ 内:ナゲ	*	*	*	*	*	
+ 151	294	*	*	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・灰色	外:無 内:*	*	*	*	*	内・外面無ける。	
+ 152	瓦盤	*	*	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・青灰石 基板	外:*	*	*	*	*	*	
+ 153	47	*	口径 胴径	30.8	*	1mm内・外の砂粒 石英・黄石・乳白色	外:ナゲ 内:*	*	*	*	
+ 154	瓦盤	*	*	21.2	*	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・灰色	外:無 内:ナゲ	*	*	内・外面無ける。	
+ 155	瓦盤	*	*	22.0	I-D	*	外:各口唇 内:*	底状口縫を有す。口唇に被	*	*	
+ 156	216	*	*	18.0	II-A	*	外:ナゲ 内:ナゲ	口唇内面を肥厚させ、傾斜した 口唇に被	*	内・外面無ける。	
第31回 -157	761~773	口径 胴径	29.2 30.8	I-D	0.5~2mmの砂粒 チャート・結晶 灰色	外:窓内 内:ナゲ	口唇内面を肥厚させ、傾斜した 口唇に被	*	内・外面無ける。	内・外面無ける。	
+ 158	234	*	口径 胴径	44.8	II-A	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・灰色	外:無 内:*	口唇内面を肥厚させ、口唇は 傾斜した面を有す。	*	*	
+ 159	737	*	*	54.8	II-A	0.5~2mmの砂粒 チャート・砂岩 灰色	外:*	内面に肥厚した口唇上面に被	*	*	
+ 160	9	*	口径 胴径	50.0 47.5	*	0.5~2mmの砂粒 石英・黄石・灰色	外:無 内:ナゲ	口唇内面肥厚	*	*	
+ 161	163~164	*	口径 胴径	45.2 45.5	II-A	*	外:無 内:ナゲ	口唇は内側に肥厚、傾斜した 口唇	*	内・外面無ける。	
第32回 -162	234	+	II-A	灰褐色	+	外:無 内:*	口唇は内側に肥厚、傾斜した 口唇	*	内・外面無ける。	内・外面無ける。	

## 遺物観察表

探査番号	出土地点	器種	口徑 法量 (cm)	口径 器高 厚径 底径	分類	胎土・色調	特徴		備考
							器面調整	文様	
第32回 -163	653	粗面陶器			E-A -①	0.5-2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 結晶片岩・淡褐色	外:各板のうえ 内:各板のうえ ナゲ	口縁部内面肥厚	
* 164	113	*	口径 38.0		*	0.5-2mmの砂粒 ナゲ・多	外:各板 内:各板	*	内・外面剥 け
* 165	231	*	口径 14.0 厚径 12.5		E-A -②	0.5-2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 結晶片岩・淡褐色	外:ナゲ・ナゲ 内:ナゲ	*	外表面熱赤 茶
* 166	636	*	口径 26.0		*	*	外:各板		内・外面剥 け
* 167	B層	*	口径 38.4 厚径 23.0		E-A -①	0.5-1mmの砂粒 石英・長石・角閃石 結晶片岩・淡褐色	外:ナゲ 内:ナゲ	弱い液状口縁、口縁は内側に肥 厚し、板は凹凸感	
* 168	504-505 地元・ B層	*	口径 37.6 厚径 33.6		E-A -③	1-5mmの砂粒 ナゲ・ト・砂岩 淡 褐色	外:短いナゲ 内:ナゲ		外表面熱中 位から上が 著しく変化し て茶色、下は ナゲ化が見ら れない。
* 169	339 334-338	*	口径 50.0 厚径 49.2		E-A -③	0.5-1mmの砂粒 ナゲ・ト・芸母 茶	外: + 内: +		外表面剥け
第33回 -170	436	*	口径 39.0 厚径 29.2		E-A -①	0.5-2mmの砂粒 石英・長石・角閃 石・結晶片岩	外: + 内: +	*	
* 171	637	*	口径 32.0		E-A -③	*	内: +		*
* 172	43	*	口径 30.8		*	0.5-1mmの砂粒 石英・長石・ナゲ 結晶片岩・淡褐色	外: 勝負系病 内: ハケ		
* 173	725	*	口径 18.0 厚径 21.2		*	0.5-2mmの砂粒 ナゲ・ト・結晶片岩・角 閃石・淡褐色	外: 勝負系病 内: ナゲ		外表面熱赤 茶
* 174	B層	*	口径 38.0		*	*	外: 短いナゲ 内: ナゲ		内・外面剥 け
* 175	粗面陶	*	口径 34.4 厚径 35.6		*	*	外: + 内: +		*
* 176	757	*			E-A -②	0.5-2mmの砂粒 ナゲ・ト・砂岩 淡 褐色	外: ハケ 内: +	口縁内面に沈線	
* 177	B層	*			E-B -③	0.5-2mmの砂粒 ナゲ・ト・砂岩 淡 褐色	外: 勝負系病 内: +		外表面剥け
* 178	*	*			*	解構化	外: + 内: +	口縁下に燒成痕の跡あり	*
* 179	852	*			*	*	外: + 内: +		*
第34回 -180	760-767	*	口径 22.0 厚径 20.0		*	0.5-4mmの砂粒 ナゲ・ト・多 法茶色	外: ナゲ 内: +		*
* 181	質屋	*	口径 24.0 厚径 23.2		*	*	外: + 内: +		
* 182	295-215 B層	*	口径 30.0 厚径 30.0		E-A -③	0.5-2mmの砂粒 ナゲ・ト・結晶片岩 ・ナゲ 淡褐色	外: 各板のうえ 内: +		外表面熱中 位以上が 剥け、内面 が剥けた。
* 183	94	*	口径 18.4		E-B -③	0.5-2mmの砂粒 ナゲ・ト・結晶片岩 ・ナゲ 淡褐色	外: 各板 内: +		内・外面剥け
* 184	B・質屋	*			E-C -③	0.5-2mmの砂粒 長石・石英・角閃 石茶	外: ナゲ 内: +		*
* 185	B層	*	口径 22.4		*	0.5-2mmの砂粒 ナゲ・ト・石英 茶	外: + 内: +	弱い液状口縁	*
* 186	B層	*	口径 32.0		E-C -③	0.5-5mmの砂粒 石英・ナゲ・長石 茶	外: 短いナゲ 内: ハケ・ナゲ		
* 187	251	*	口径 35.2		E-C -③	0.5-2mmの砂粒 石英・長石・角閃 石茶	外: 短いナゲ 内: ハケ・ナゲ		
* 188	564	*	口径 42.8		E-C -①	0.5-2mmの砂粒 石英・長石・角閃 石茶	外: 勝負系病 内: +	口縁がわずかに内側に肥厚	外表面剥け
第35回 -189	183-186 -187	*	口径 36.0 厚径 43.2		E-D -③	0.5-3mmの砂粒 石英・長石・長石 乳白色	外: ハケ 内: +		*
* 190	地元	粗面陶器	底径 8.8	上底	0.5-2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 乳白色	外: 撫摸 内: 短いナゲ	径1.1-1.3mmの円孔が多数空 れ。焼成痕、内面外縁部に 小範囲の白斑が多くある。		
* 191	88	*	口径 9.6	*	0.5-2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡褐色	外: ナゲ 内: +	径1.0mmの円孔が数箇所空 れ。軽土帶接合部で欠損。複口 縁は丸味を帯びる。		

## 遺物観察表

博団番号	出土 地点	器種	法蓋 (m)	口徑 高さ 測定 基準	分類	粘土・色調	特 徴		備 考	
							器蓋調整			
							外 内	内 外		
第3556 -192	鶴見層	鉢形瓶	未記	9.6	上げ崩	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡青色	外:ナガ 内:+	底部外縁部に不整形の凹痕	骨片が混入	
+ 193	386	*	*	8.4	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡青色	外: + 内: +			
+ 194	52	*	*	10.4	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡青色	外: + 内: +	底部外縁部に不整形の凹痕		
+ 195	113 直槽	*	*	10.8	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡青色	外: + 内: +	*		
+ 196	直槽	*	*	11.2	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡青色	外: + 内: +	底部外縁部に純丸		
+ 197	409	*	*	10.0	*		外: + 内: +	底部外縁部に不整形の凹痕		
+ 198	鶴見層	*	*	10.4	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡青色	外: + 内: +			
+ 199	*	*	*	6.5	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡青色	外: + 内: +		下部外縁部まで傾ける 場合に外縁部で破損 しない。	
+ 200	402	*	*	9.5	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡青色	外: + 内: +	瓶口縁で欠損		
+ 201	743	*	*	8.4	*	0.5~2mmの砂粒 チャート多 石英色	外: + 内: +	*		
+ 202	直槽	*	*	9.5	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 淡青色	外: + 内: +	下側部外縁、3本束縫の注縫が 正面にまで通ず、底盤面にLR の窓穴	下側部外縁 まで傾ける 場合に外縁部 で破損する。	
+ 203	74-153 鶴見層	*	*	9.0	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・粘土 淡青色	外: + 内: +			
+ 204	80	*	*	8.0	*	0.5~2mmの砂粒・石 英・長石・乳白色	外:ナガ 内: +	外底外縁部に不整形の凹痕		
+ 205	493	*	*	8.5	*	0.5~2mmの砂粒 チャート・粘土片 淡青色	外:ナガ 内:ナガのうえ をナガ			
+ 206	18	*	*	9.5	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃 石・粘土片・淡青 色	外: + 内: +			
+ 207	44	*	*	10.8	*	ナ ホ白	外: + 内: +	外底外縁部に不整形の凹痕		
+ 208	商品層	*	*	9.5	*	0.5~2mmの砂粒 石英・淡青色	外:ナガ 内:ナガ			
+ 209	678	*	*	9.2	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・泥母 淡青色	外:ナガ 内:ナガ	下側部に擦痕後の比較あり。	内・外縁部 傾ける。	
+ 210	408-148 -945	*	*	9.7	*	0.5~2mmの砂粒 チャート多 淡青色	外:ナガ・ハケ 内: +			
第360回 -211	794	*	*	8.1	*	0.5~2mmの砂粒・石 英・粘土片・淡 青色	外:ナガ 内: +			
+ 212	直槽	*	*	10.1	*	0.5~2mmの砂粒 チャート・粘土片・ナ ゲ チ 淡青色	外:ナガ 内:ナガ		斜面まで傾 ける。	
+ 213	473	*	*	6.2	*	0.5~2mmの砂粒 角閃石・長石・長石 ・石英	外:ナガ 内: +			
+ 214	鶴見層	*	*	6.5	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・淡青 色	外:ナガ 内:ナガ			
+ 215	373	*	*	10.2	*	0.5~2mmの砂粒 長石・角閃石 ・ナゲ ・細青緑色岩 ・淡青 色	外:ナガ 内: +	瓶口縁で欠損		
+ 216	280	*	*	7.7	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・ナゲ ・長石・淡青色	外:ナガ 内:ナガ		シエーネッ トを混む	
+ 217	454	*	*	10.4	平底	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・粘土片 ・ナゲ ・淡青色	外:ナガ 内: +			
+ 218	直槽	*	*	8.0	*	1~2mmの砂粒 チャート・長石 ・淡青色	外: + 内: +	外底にアンペラの凹痕		
+ 219	209	*	*	9.2	*	0.5~2mmの砂粒 チャート・砂質・粘 土片 ・淡青色	外:ナガ 内: +			
+ 220	商品層	*	*	7.2	*	0.5~2mmの砂粒 チャート・長石 ・淡青色	外:ナガ 内: +	外底にアンペラの凹痕		
+ 221	320 直槽	*	*	9.1	*	0.5~2mmの砂粒 チャート 乳白色	外: + 内: +			

## 遺物観察表

件番号	出土地点	器種	口径 器高 脚底 底径 (cm)	分類	胎土・色調	特徴			備考
						純文 無文 焼け	唇面調整 内・外	文様集	
第37回 -222	100	石文鏡		I-①	焼造された胎土 黄褐色	なし	外: 丁寧な 内: *	波瀬頭から2本の比縫が右斜め に下る波瀬頭。口底に1.4cm の凹部。口底に2.5cmの凹部を有す。 内面に波瀬頭。	未定 比縫幅2mm
* 223	櫻丸塚	*		I-②	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 黄色	*	外: ナデ 内: 丁寧な 焼け	内面に波瀬頭。口縫内に比縫頭 。口底内側壁、外縫も口縫内 に波瀬頭。口底に1.2cm の凹部。比縫幅1.2mm	未定 比縫幅3mm
* 224	日用	*		I-③	焼造された胎土 黄褐色	*	外: 丁寧な 内: *	波瀬頭から比縫が右斜め に下る波瀬頭。口底に1.4cm の凹部。口底に2.5cmの凹部を有す。 内面に波瀬頭。	未定 比縫幅3mm
* 225	201	*		(未確認)	*	*	外: *	入波文、比縫内側文	比縫幅3mm
* 226	IV層	*		*	*	外: *	内: *	2~3本の比縫、2本比縫間 に焼け。	
* 227	669	*		II	*	外: 丁寧な 内: *	極めて波瀬で幾何学文	未定 比縫幅5mm	
* 228	櫻丸塚	*		*	*	外: 丁寧な 内: *	口縫下に5mmの凹部を留むつ (波瀬頭)	未定 と同一 個体の可能性 あり	
* 229	*	*	口径 27.3 深さ 29.7	II-A	*	*	*	外側は、波瀬文と直角文	
* 230	57	*	口径 27.5 深さ 38.5	*	*	外: 丁寧な 内: *	外側は、波瀬文と直角形区別 文	比縫幅3mm	
* 231	392	*	口径 34.5 深さ 39.0	*	黄色	*	外側は、波瀬文とそれをつなぐ 横波紋の多条波紋。口底下に 焼けの付し。底4mm	未定 比縫幅4mm	
第38回 -232	櫻丸塚	*		*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・結晶 片岩 黄褐色	外: 丁寧な 内: ナデ	横波の沈織文	* 2mm	
* 233	436	*		*	焼造された胎土 黄褐色	外: 丁寧な 内: *	外側、三角部の直角文	* 3mm	
* 234	245	*		*	黄褐色	外: 丁寧な 内: *	外側直角文と直角文	* 4mm	
* 235	櫻丸塚	*		*	0.5~1mmの砂粒 石 英・長石 黑褐色	外: 丁寧な 内: *	外側比縫文	* 3.5mm	
* 236	*	*		*	0.5~1mmの砂粒 石英・長石・角閃石 黄褐色	外: 丁寧な 内: *	外側直角文とそれをつなぐ横 波の沈織	* 4~5mm	
* 237	429	*		*	焼造された胎土 黄色	*	外側直角文と直角文	* 4mm	
* 238	476	*		*	0.5~2mmの砂粒 黄色	外: 丁寧な 内: *	外側直角文と直角文	* 4mm	
* 239	II・Ⅲ層	*		*	焼造された胎土 黄褐色	外: 丁寧な 内: *	外側直角文	未定 * 3~4mm	
* 240	II・Ⅳ層	*		*	*	*	外側直角文とそれをつなぐ横 波の沈織	未定 * 4mm	
* 241	IV層	*		*	*	*	外側直角文	未定 * 3mm	
* 242	櫻丸塚	*		*	*	外: 丁寧な 内: *	外側直角文	* 3~4mm	
* 243	II・Ⅲ層	*		III-B	*	外: *	比縫間に横文	* 3mm	
* 244	660-681	*	口径 20.4 深さ 9.4 脚底 22.4 底径 9.3	II-A	0.5~1mmの砂粒 石英・長石・結晶 片岩 黄色	*	脚底内側の4側面に直角文を のせる三角形の直角文でうめる。 また口縫部外縫には、5 年文するように比縫が並ぶ。	* 3mm	
* 245	209 V層	*	口径 25.5 深さ 9.0	*	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・結晶 片岩 黄褐色	*	脚縫の4側面に横縫頭をおい て直角文。その間に直角文	* 4mm	
* 246	94 (未確認)	*		*	0.5~1mmの砂粒 石英・長石・結晶 片岩 黄褐色	*	外側直角的な沈織	未定 * 4mm	
* 247	IV層	*		*	焼造された胎土 黄褐色	外: 丁寧な 内: *	外側直角文	* 4mm	
* 248	70-795	*		*	*	*	外側直角学文	* 3mm	
第39回 -249	櫻丸塚	*		*	*	*	外側直角学文		

## 遺物観察表

博団番号	出土地點	器種	口径 注量 器高 底径 底深 (mm)	分類	粘土・色調	特徴			備考	
						周文 拂り	器皿調査	文様		
								外縁	内縁	
第39回 -250	吉原	有文鉢		III-A	0.5~2mmの砂粒 底無			外縁区角沈縁文 内: +		沈縁幅4mm シヤーリング追加
+ 251	混乱層	+			磨滅された粘土、暗 褐色	+	+			沈縁幅3mm
+ 252	479	+			+	+	+	外縁沈縁文	- 3mm	
+ 253	8	+			+	+	+	外縁幾何学文		外縁 沈縁幅2mm
+ 254	混乱層	+			0.5~1mmの砂粒 石英・長石・角閃石 底無	+	+			+ 5mm
+ 255	+	+			磨滅された粘土、 灰褐色	+	+	外縁底内文		+ 5mm
+ 256	夏屋 横乱層	+			0.5~3mmの砂粒 石英・長石・暗色	+	+			+ 3mm
+ 257	吉原	+			+	淡褐色	外:丁寧な 研磨 内:ナゲ	+		+ 4mm
+ 258	混乱層	+			+	灰褐色	+	外縁底内文と直角文		直角 + 3mm
+ 259	吉原	+			+	**	+	外縁底内文		+ 2~4mm シヤーリング トを追加
+ 260	74	+			+	**	+	外縁幾何学文		沈縁幅3mm
+ 261	混乱層	+			+	暗色	+	+		赤筋 沈縁幅4~ 5mm
+ 262	545 日暮	+			+	磨滅された粘土 黄褐色	外:丁寧な 研磨 内: +	+		赤筋 + 3~4mm
+ 263	5	+			+	*	+	外縁直角文		赤筋 + 5mm
+ 264	II・夏屋	+			0.5~1mmの砂粒 石英・長石・角閃石 底無	+	+	外縁幾何学文		+ 4mm
+ 265	II	+			磨滅された粘土、 淡褐色	外:丁寧な 研磨 内:ナゲ	+			+ 3mm
+ 266	混乱層	+			0.5~1mmの砂粒 石英・長石・底無 底無	外:丁寧な 研磨 内: +	+			赤筋 + 3~4mm
+ 267	吉原	+			0.5~3mmの砂粒 石英・長石・暗色	+	横位の比縁			+ 3mm
+ 268	吉原	+			+	淡褐色	外:研磨 内:美しいナ ゲ	+		+ 4mm
+ 269	混乱層	+		III-B	0.5~1mmの砂粒 石英・長石・底無 底無	L.R.	外:ナゲ 内: +	沈縁間に部分的に織文		沈縁幅4mm 外縁底内文。 研磨追加。
+ 270	吉原	+			0.5~1mmの砂粒 石英・長石・角閃石 底無	R.L.	内:ナゲ	織文地に沈縁		赤筋 沈縁幅3mm
+ 271	吉原	+	網附 36.9	III-A	+	淡褐色	外:丁寧な 研磨 内:美しいナ ゲ	入組みの直角文とその対直角 文でうめる。		+ 4mm
第40回 -272	56	+			0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 底無		外:丁寧な 研磨 内: +	外縁幾何学文		+ 4mm
+ 273	148	+		III-C	磨滅された粘土、 暗褐色	+	口縁下に2本の沈縁。構内に			+ 3~4mm
+ 274	546	+			+	暗褐色	+	+		+ 3~4mm
+ 275	591	+			0.5~5mmの砂粒 石英・長石・底無 底無	外:赤筋 内:研磨	口縁内面肥厚。2本の沈縁			+ 3~4mm
+ 276	391			III-A	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 底無	外:研磨 内:ハケ	外縁幾何学文			+ 4mm
+ 277	混乱層	+		III-C	磨滅された粘土、 暗褐色	外:丁寧な 研磨 内: +	口縁外縁に1本の沈縁			+ 4mm
+ 278	541	+	口径 24	IV-B	+	茶色	+	上側部外縁に横位の比縁		+ 3mm
+ 279		+	網附 34.4		0.5~3mmの砂粒 石英・長石・暗褐色	外:ナゲ 内:ナゲ ナゲ	脚口部で直角 外縁外縁底内文 比縁は深く表面に内次の面を つくる。			+ 4~5mm
+ 280	140-727	+	口径 34.5 網附 34.9	IV-A	+	淡褐色	外:丁寧な 研磨 内: +	直角文；上側部に入組み直 角文を追加し、その下に直 角文		+ 5mm

## 遺物観察表

辨別番号	出土場所	器種	口径 基高 厚径 底径 (cm)	分類	胎土・色調	特徴			備考
						純文 地		器底調整	
						外: 丁寧な 内: *	内: *	文様 備	
第41回 -281	直槽	有文洗鉢	口径 30.9 基高 35.7	N-C	焼造された胎土 褐色	X-L	外: 丁寧な 内: *	器底周間に沈縫 1 本、以下は 全縫合	沈縫幅 2 mm
+ 282	685	*	口径 31.2 基高 36.6	V	0.5-2 mm の砂粒 石英・黄鉄・茶色	*	*	器底及び上縫部に凹凸痕、 器底及び上縫部の凹凸部に純 文	沈縫幅 5 mm
+ 283	IV層	*	口径 25.5 基高 30.6	VI	焼造された胎土 褐色	L-X	*	器底及び上縫部に凹凸痕、 器底及び上縫部の凹凸部に純 文	* 4 mm
+ 284	3・45 後乱層	*	口径 29.4	X	0.5-1 mm の砂粒 石英・石英・淡赤色	外: * 内: *	口縫が強く内側へ屈曲、口 縫は外反。胎底に鉛成形を示す。		
+ 285	784 後乱層	*	*	35.2	質	0.5-4 mm の砂粒 チート	X-L	外: 小型 内: 大型 口縫は強く内側へ屈曲、口縫 幅 7 mm の両側に沈縫に純文	沈縫幅 5 mm
+ 286	Ⅳ層 (N層)	*		その他	0.5-2 mm の砂粒 石英・石英・暗赤色	外: * 内: ナチュラル	外縫竹管による刺突		
+ 287	後乱層	*			焼造された胎土 褐色	X-L	外: 丁寧な 内: *	器底周間に純文帯が胎底部を呈す。	沈縫幅 4 mm
+ 288	*	*			*	0.5-1 mm の砂粒 石英・黄鉄・茶色	外: * 内: ナチュラル	横底の多角沈縫	* 4-5 mm
第42回 -289	後乱層	有文洗鉢	口径 24.9 基高 25.8	I	焼造された胎土 褐色	外: 深底 内: *			口縫外側に横縫
+ 290	316	*	口径 19.8 基高 21.6	II	*	暗赤色	*	胎底には縦口縫で欠損	
+ 291	*	*	口径 21 基高 22.2	*	*				
+ 292	388-681 N層	*	口径 23.9	*	*		*		
+ 293	310-513 684-7層	*	口径 31.4 基高 36.1	*	*		*		
+ 294	659 Ⅳ層	*	口径 23.2 基高 33.4	III-①	*	暗赤色	外: 丁寧な 内: *	口縫外側が肥厚	
第43回 -295	462	*	口径 34.5 基高 42	III-②	0.5-3 mm の砂粒 チート・チート・多 孔・淡赤色	*	*	内面は黑色擦研	
+ 296	Ⅳ層	*		IV-②	0.5-1 mm の砂粒 石英・石英・暗赤色	外: ナチュラル 内: 丁寧な 胎底			
+ 297	圓孔	*		IV-② -⑤	0.5-2 mm の砂粒 石英・黄鉄・暗赤色	外: 丁寧な 内: *			
+ 298	*	*		IV-③	*	茶色	外: ナチュラル 内: *		
+ 299	*	*		IV-④ -⑤	*	茶色	外: *	口縫内面が肥厚	
+ 300	*	*		*	*	0.5-1 mm の砂粒 石英・黄鉄・角閃石 暗赤色	*		
+ 301	30	*		IV-⑤	0.5-1 mm の砂粒 石英・黄鉄	外: ナチュラル 内: ナチュラル			
+ 302	671	*		IV-⑤ -⑥	0.5-2 mm の砂粒 石英・黄鉄・暗赤色	外: ナチュラル 内: *			外縫横行け
第44回 -303	690	*	口径 22.5	IV-①	0.5-2 mm の砂粒 チート・多 孔・淡赤色	外: 丁寧な 内: *			
+ 304	794	*		IV-② -⑥	0.5-1 mm の砂粒 石英・黄鉄・淡赤色	外: 亂具類 内: 丁寧な 胎底	内部がわずかに肥厚		内・外縫横行け
+ 305	後乱層	*		*	0.5-2 mm の砂粒 チート・黄鉄・角閃石 暗赤色	外: 亂具類 内: 丁寧な 胎底	*		
+ 306	IV層	*	口径 28.6	IV-① -⑥	0.5-2 mm の砂粒 チート多 孔・淡赤色	*			
+ 307	後乱層	*	*	31.8	*	0.5-2 mm の砂粒 チート・黄鉄・角閃石 暗赤色	外: 密な 内: 丁寧な 胎底	口縫内面肥厚	
+ 308	665	*	*	31.6	IV-① -⑥	暗赤色	外: ナチュラル 内: 胎底	*	
+ 309	47-580 1層	*	*	40.8	*	0.5-2 mm の砂粒 チート・暗赤色	外: 亂具類 内: 胎底	*	内・外縫横行け
+ 310	471	*	*	40.8	V	0.5-2 mm の砂粒 チート・黄鉄・内側石 暗赤色	外: 亂具類 内: 丁寧な 胎底	口縫横行け外赤	

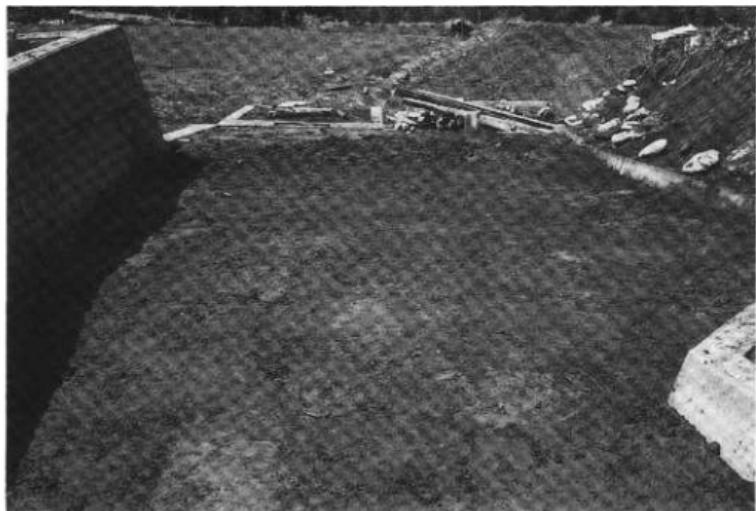
## 遺物観察表

博団番号	出土地点	器種	口径 器高 測定 値	分類	新土・色調	特徴		備考	
						器面調査			
						文様	特徴		
第45回 -311	宮原	神文浅鉢		V	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 暗茶色	外: 丁寧な研磨 内: +	口縁下に焼成前の円孔		
* 312	N解	*	口径 内側作 外側作 高さ 底端	30.6 30.0 14.6 14.7	研磨された胎土 暗茶色	*	底状凸縁　底面部肥厚	内・外面赤 茶	
* 313	823	*	口鉢	27.3	+	外: 丁寧な研磨 内: 器具赤	口縁下に焼成後の円孔あり		
* 314	櫻山	直鉢底盤	底盤	8.4	+	外: 丁寧な研磨 内: 黒色	上げ底風		
* 315	290	*	*	8.4	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 暗茶色	外: 丁寧な研磨 内: +	*		
* 316	575	*	*	8.7	0.5~2mmの砂粒 チャート多 暗茶色	外: + 内: ナゲ			
* 317	櫻山	*	*	9.3	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 暗茶色	外: 丁寧な研磨 内: 黒色を極めて 強く	上げ底風		
* 318	宮原	*	*	12.0	+	外: 丁寧な研磨 内: +	*		
* 319	821	*	*	11.7	+	外: 丁寧な研磨 内: +	上げ底		
* 320	781	*	*	9.6	研磨された胎土	外: + 内: +	*		
* 321	187	*	*	8.7	0.5~2mmの砂粒 石英・長石・角閃石 暗茶色	外: 濃重 内: 研磨	平底		
* 322	401	*	*	11.4	研磨された胎土 暗茶色	外: 丁寧な研磨 内: +	*		
* 323	846	*	*	19.5	+	外: + 内: +	*		
* 324	625	*	*	16.5	0.5~2mmの砂粒 石英・長石	*	*		
第46回 -325	637	直口土器			0.5~2mmの砂粒 石英・長石 暗茶色	丁寧な研磨	底口径55.0mm 外径2.8cm 内径1.3mm		
* 326	104	*			*	*	往口部の径8.4mm 腹部の外径2.5mm + 内径1.0mm	半球形 伴物 との接合部 から火鉄	
* 327	433	双耳罐			0.5~2mmの砂粒 石英・長石・チャート 暗茶色	*	全体の色彩不明、体部底に凹9 mmの円孔		
* 328	459	*			0.5~2mmの砂粒 チャート多 暗茶色	*	底部が褐色化をなすまで穴孔は 径7mm	沈錆槽4mm 体部との接合部 から火鉄	
* 329	櫻山	不明 (把手付)			0.5~2mmの砂粒 石英・長石	ナゲ	太い沈鍵と刺突文	未名 沈鍵幅2mm	

# 図 版



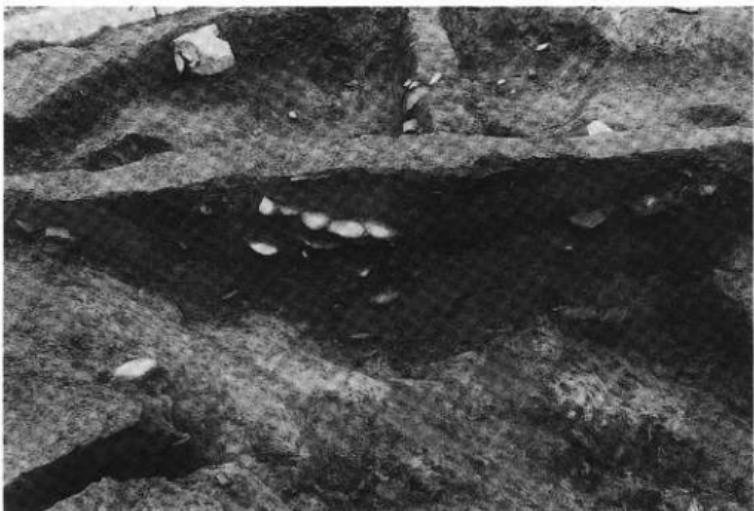
松ノ木遺跡全景（南から）



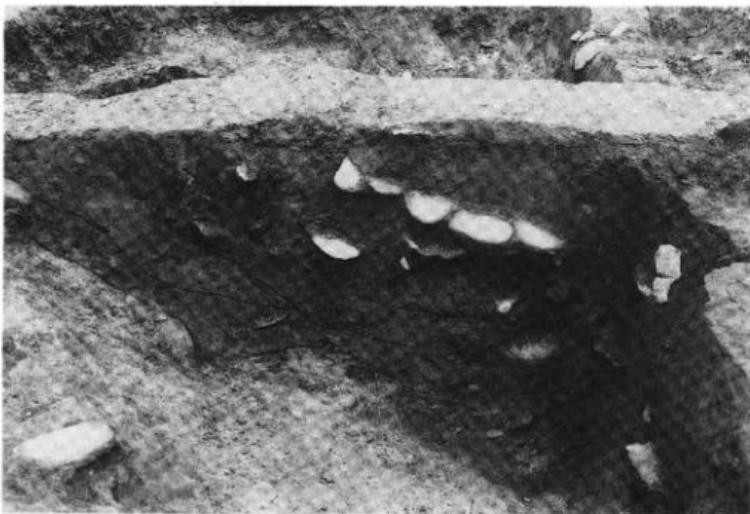
調査前の状況（東から）



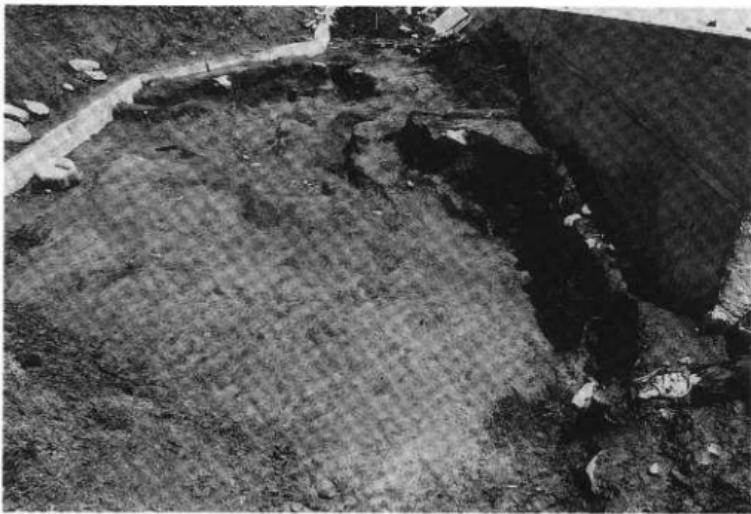
調査前の状況（西から）



N-S セクション断面

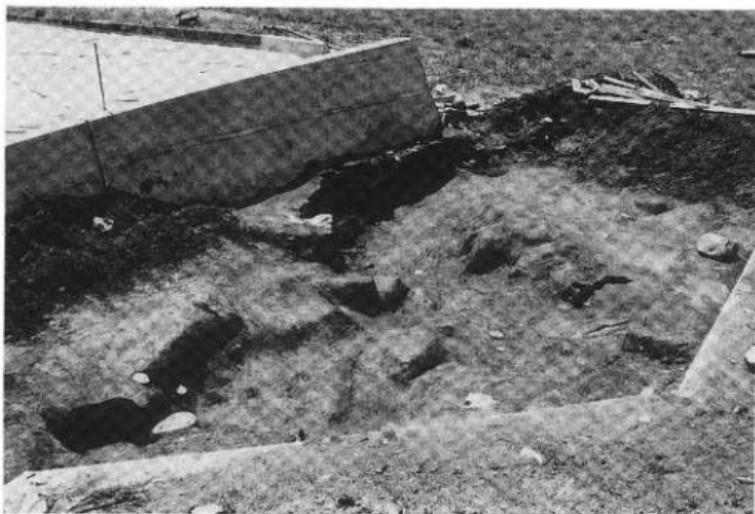


N-S セクション断面



完掘状況（西から）

P L 4



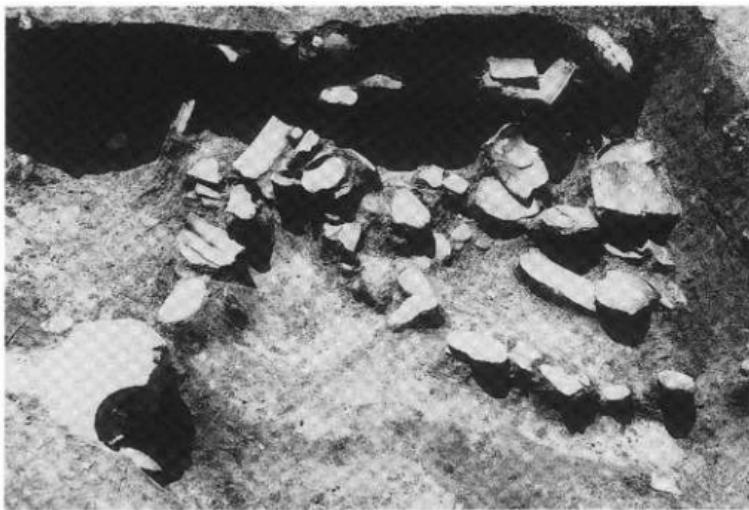
完掘状況（東北から）



N-S セクションベルト付近遺物出土状況



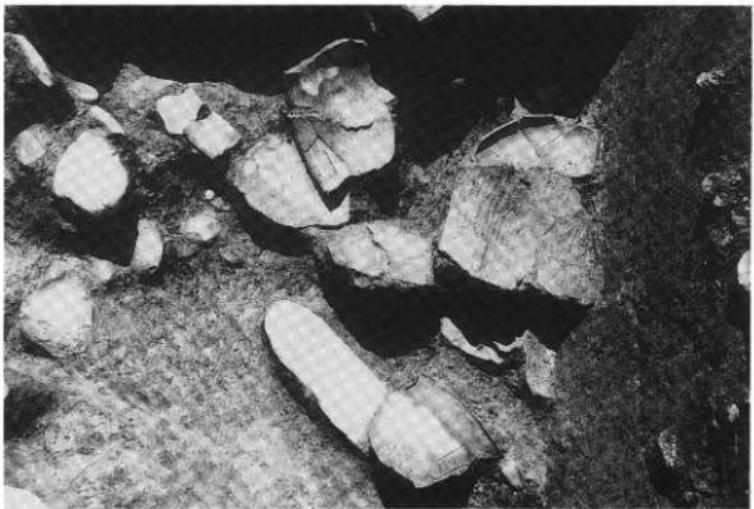
遗物出土状况



同 上



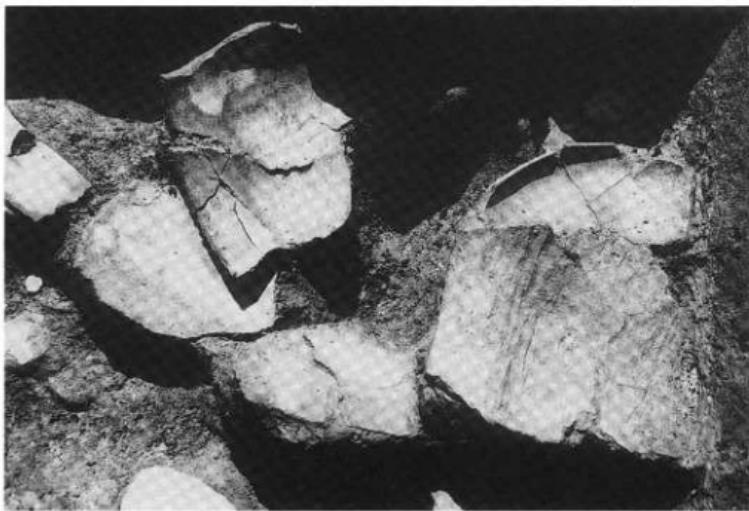
遗物出土状况



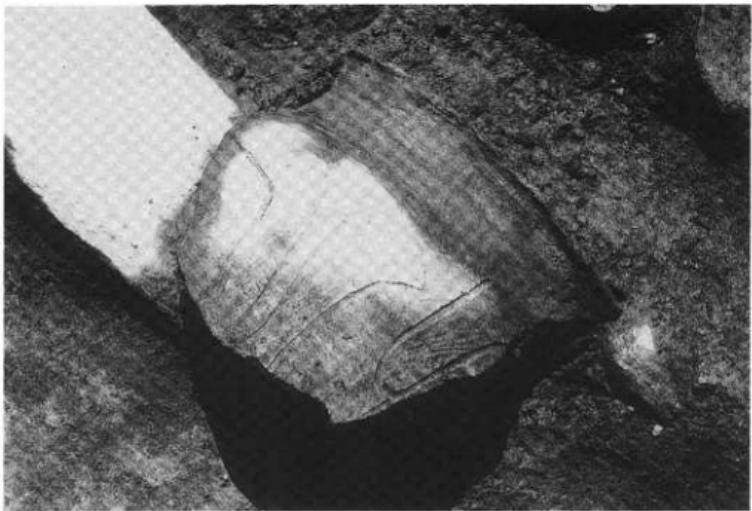
同 上



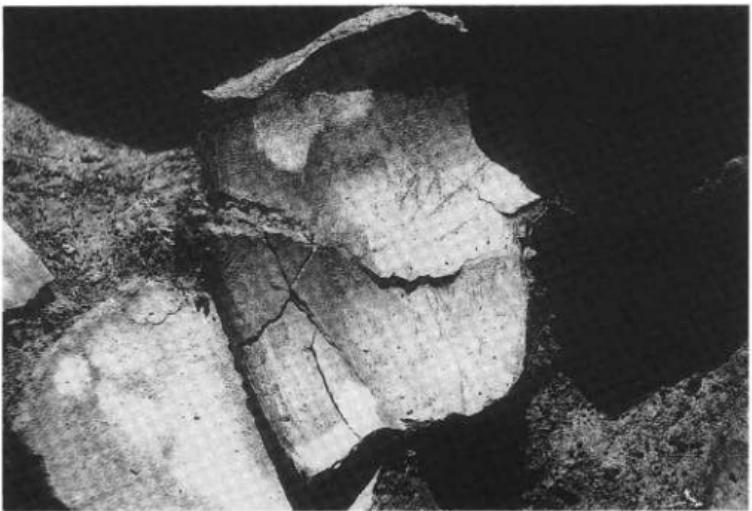
遺物出土狀況（有文淺鉢 276）



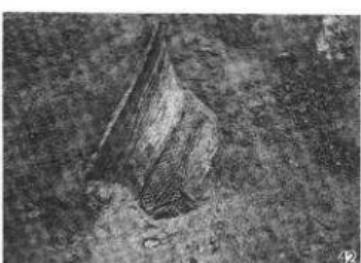
遺物出土狀況



遺物出土狀況（有文深鉢 64）



遺物出土狀況



遺物出土狀況



35



51



67



43



64



63

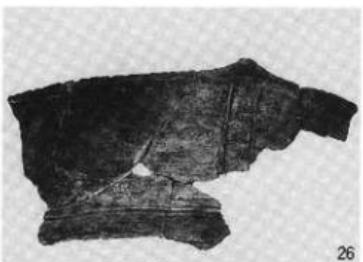


16



94

有文深鉢



26



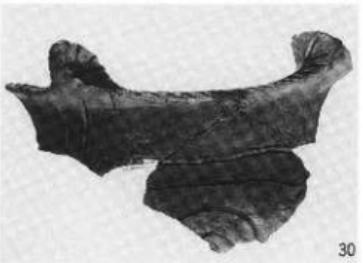
40



28



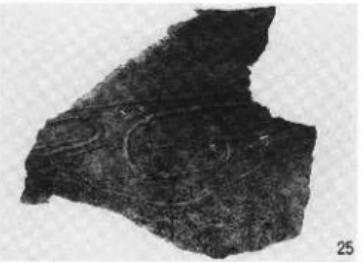
47



30



17



25



97

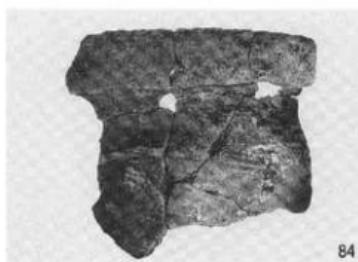
有文深鉢



96



72



84



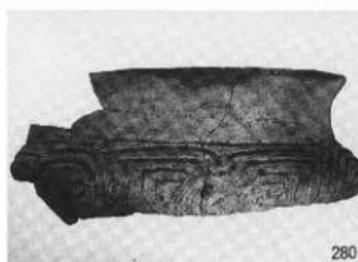
99



245



244



280



231

有文深鉢 (72・84・96・99)。有文浅鉢 (231・244・245・280)



271



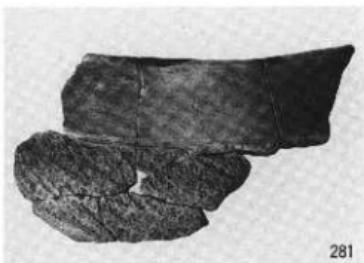
279



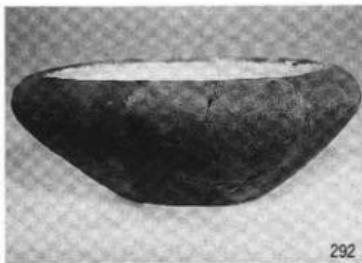
282



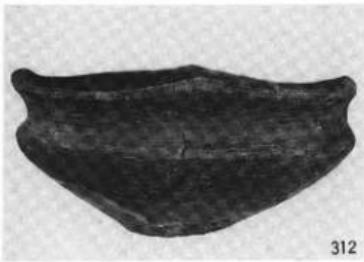
276



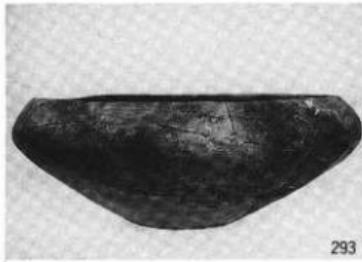
281



292

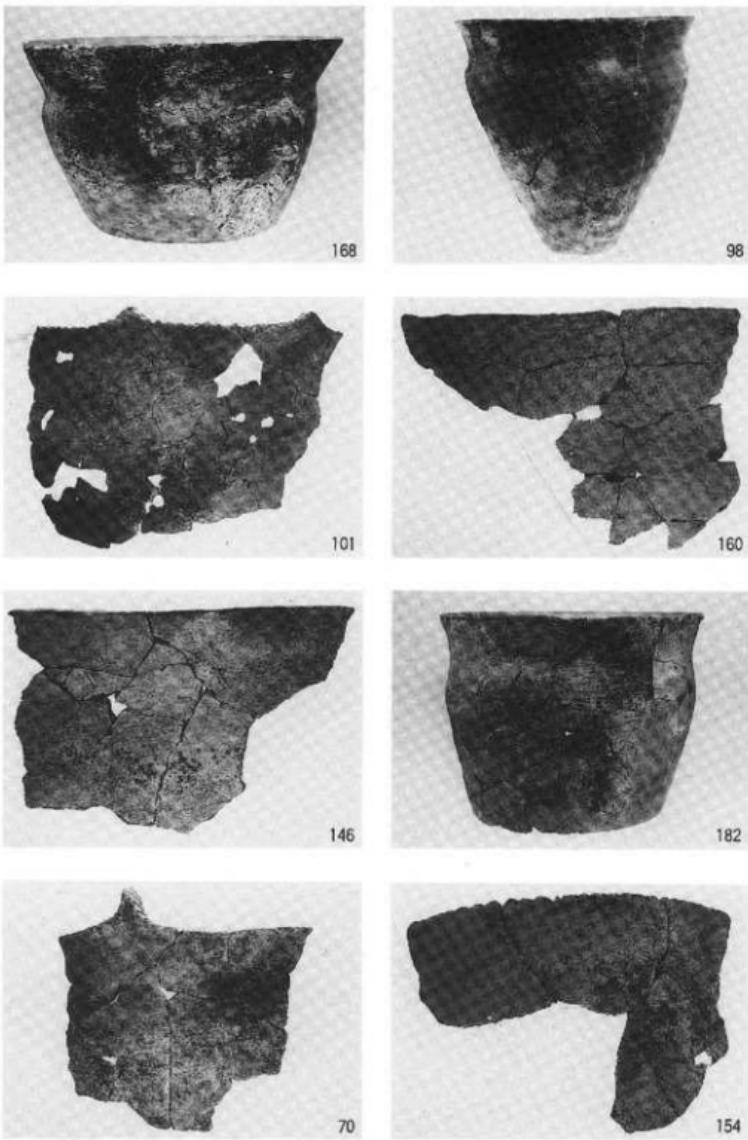


312

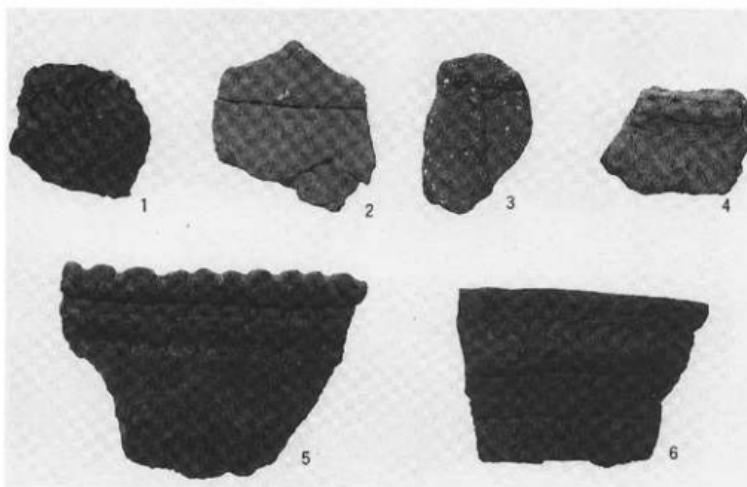


293

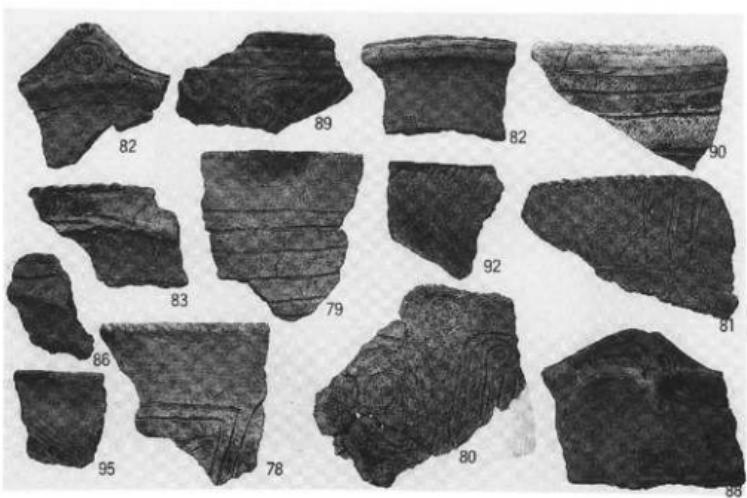
有文淺鉢 (271・276・279・281・282), 無文淺鉢 (292・293・312)



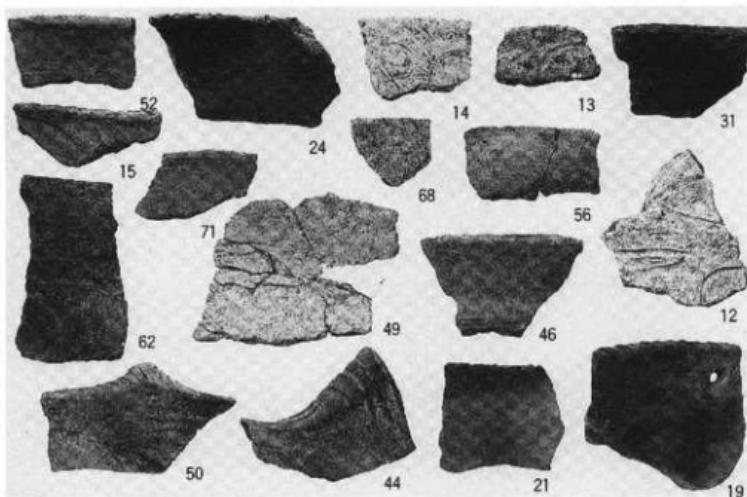
無文深鉢



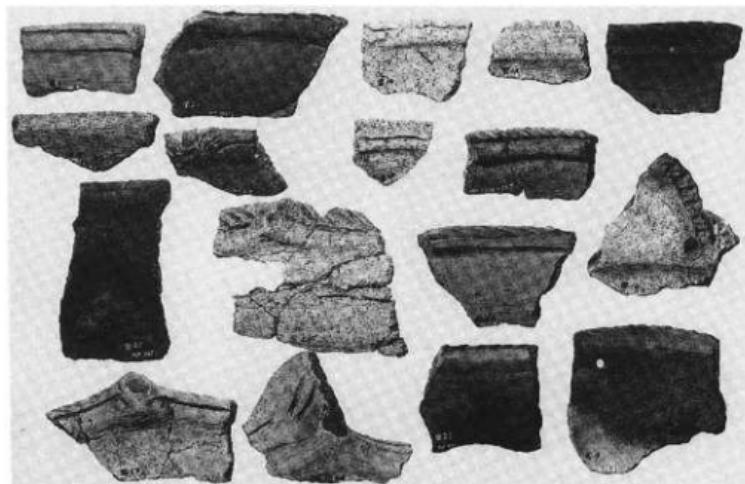
繩文前期土器



繩文後期 有文深鉢



繩文後期 有文深鉢口縁部



同上 裏面